



酒井日香

Vampire

孤独な予言者

鑑定料は超高額。
もし予言を外したら代償を払うという。
闇の占い師。

絶対に外さないと言われたら、
何とでも代償を払う。
何とでも代償を払う。
本巻と続巻を合わせてすべてを見逃す
闇の占い師が今夜も予言を告げる!

KADOKAWA
定価(本体1100円+税)

1、

その頃、新橋ダイヤモンドパレスホテルでは、川嶋がすでに待ち構えていた。田代から、郷原をどうにか回収したと報告を受けて、駆けつけてきたのである。本当は、久子も来ると言って聞かなかったのだが、まさか銃で撃たれているなどとても久子には言えないから、川嶋はなんとか振り切ってきた。

ホテルの裏口から、人目につかないよう郷原と池田史郎を運ぶ。

一群は、裏口から伸びるスイートルームの宿泊客専用エレベーターに乗り込んだ。一緒にいた山本亮一に、川嶋は声をかけた。

「山本先生……、濟まないが、こいつの処置を手伝ってくれないか。今、かかりつけ医を一人呼んだが、医者は多いほうがいい……」

川嶋の言葉に、眼を伏せて、腕を組み、山本は言った。

「借金と引き換えに、と言ったら、どうします？」

「……………」

川嶋は瞠目した。ひと晩、ふた晩会わなかっただけで、山本は妙にタフになったようだった。平然と、減らず口を叩けるようになっている。

この川嶋に向かって――。川嶋は、口元を不敵に歪めると、眼を細めて山本を見た。

「わかった。平安ファイナンスにあんたが作った600万……、そこから手術代ということで、相殺してやる。ヤクザの治療は、1分1万円が相場でな。1時間でざっと60万の稼ぎだ。せいぜい、じっくり手術してやってくれ。それでいいか」

「それじゃあダメだ。もう少し上乘せしてください。僕も疲れている。その上で、眠らずに手術なんかしてやるわけだから、1分1万円プラス、オプションで1分2千円の現金をください。もう手持ちが無いのでね」

「……よかろう……。ずいぶんと駆け引きを覚えたじゃねえか、山本先生……」

「郷原さんのお陰です。オプション分はちゃんと、現金払いをお願いしますよ川嶋社長」

すっかりアウトローの空気を、身にまとっている山本だった。

「あ、あたしも、手伝います……！ 看病とか……」

「この女性は……？」

川嶋が田代に訪ねたが、田代は言いにくそうに首をかしげた。

「あんたがもしかして、飯田議員が入れ込んでいたという、ホステスか……？」

あかりは無言で川嶋を見た。

「まあ、なんでもいい。女の人がいってくれと助かる」

部屋に入ると、皆ですぐに、郷原をベッドへと運んだ。田代が心配そうに、郷原の額の汗を拭おうとしたとき、郷原が不意に叫んだ。

「ばかやろう！ 何してる！ おっちゃん早く帰れっ！！ 直人はどうすんだっ！！」

「そ、それどころじゃないだろ？！ 俺もここにいるよっ！」

郷原の足を持ち上げながら、川嶋が言った。

「郷原の言う通りだ田代。お前はもう帰れ。息子をひとりぼっちにさせていいわけではない。回復したら知らせるから安心しろ」

「でっ、でもっ！！」

郷原を支えてここまで連れてきた田代は、川嶋の部下たちに背中を押されて、部屋を出ていった。

山本はすぐに、郷原のコートを脱がせてネクタイを解き、シャツを鋏で切って、上半身裸にし、創部を露出させた。やがて寺本組のかかりつけ闇医者である辻という男が、手術道具と点滴のパック、薬やガーゼをたくさん持ってかけつけてきた。その闇医者・辻を手伝って、傷の処置をする山本だった。

総白髪なせいで、まだ60代だろうに、老人に見えるほど老けている辻は、郷原の両腕と胴体をベッドに縛って固定すると、山本に押さえさせた。切られ、挟られる激痛に腕を動かさないよう、全力で押さえつけるのだ。舌をショックで噛まないよう、口の中にタオルを突っ込む。こんなところでは局部麻酔しかしてやれない。

「まあ、ちょっとキバれや郷原……。蚊が刺す程度にや痛むからな」

辻はそう言うと、とりあえず腋の下の神経へと直接注射針を刺して、郷原に局部麻酔を施し、麻酔が効いたかどうかを確認しないまま、サクリと創部にメスを突き立てた。

さすがにうめき声を上げる郷原である。あかりは、見ていられなくて、顔を手で被った。

闇医は、筋肉層を裂き骨を露呈させていった。そこに銃弾で砕けている骨の破片を、ピンセットで除去するのだ。弾はきれいに貫通し、反対側へと突き抜けている。幸いなことに、主要な神経や大動脈は切れていなかった。

とりあえず、もっとも痛い一撃を、郷原が乗り越えてくれたので、ホッとした山本は、すぐにベッドルームのドアを閉めた。全員で固唾を飲んで見守られると、やりにくくて仕方がない。

山本は産婦人科医で、外科は研修医時代のジョブローテーションで経験したくらいしか知らなかったが、銃弾を受けた傷を見るのは始めてだったから、興味深々で闇医の手元を手伝った。

しかし、辻は年齢のせいか、眼が丈夫でないようで、どうも手元がおっかない。仕方がないので途中から処置を替わった。いくら3千万も吹っかけてきた郷原でも、腕の神経が切れて、手が使えなくなるのは不便だろう。

「あんた、なかなか上手いな。産婦人科医なんかやめて、フリーの闇医者になったらどうだい」

辻が山本に言った。

「イヤですよ。ヤクザなんかと関わるのは、もうこりごりです」

そう言う山本の施術を受けながら、口元を歪めてほくそ笑む郷原だった。

砕けた骨は、ほぼきれいに除去することが出来たので、あとは闇医の辻が自分の病院から持ってきた、骨を繋ぐ素材で処置を施し、縫合すれば終わりである。たぶん、しばらく安静にしていれば、また元通りに手は動くはずだ。

郷原は、麻酔が遅く効いてきたようで、縫合している最中に眠ってしまった。山本は、郷原の首元から20センチほど伸びている疵跡が、さっきから気になっている。まるで鋭い切っ先で、ぱっさりと胸を切り裂かれたような疵――。

「この疵……。もしかして日本刀、ですか？」

「ああ。それは俺が縫った。死ぬ寸前まで行った傷でな。よく命があったよ」

山本は、処置が終わって手を拭っている辻を振り返った。

「フフ……。こいつは体を張るしか芸のない男でな。占い師が本業らしいが、占いを外した落とし前も、ときどきつけさせられるのさ。それはある人物と占いの大勝負したときに、予言を外して、その落とし前に取られた傷らしい」

話を聞いて山本は、眉根を寄せて眼を細めた。

「……クレイジーだ……。馬鹿げているこそんなの……。占いなんて、当たらないのが普通でしょ？当たらないからこそ、占いの本を読んだり、変なおばさん占い師とか、霊能者をテレビで見て笑えるんだよ。あんなとち狂った連中でも迫害しないであげるのが、ゆとりある社会ってものだ。占いなんて、この日本が平和な国だという証拠でしかない。けど、郷原のは違う。なんというか……。こんな占いは、この世に在っちゃあいけない……。いけないよきっと……」

「………案外、本人が一番それをわかっているだろうよ。まあ、あんまり責めないでやってくれ。こいつにもいろいろと、事情があつてな。いつか郷原が言っていたよ……。悪いのは、占い師じゃなくて、占星術だの手相だの霊視だの、占いや神秘に縋ろうとする、人の心の弱さなのだと。裁かれるべきは、神秘を求め、神秘に過度な期待をするお客たちのほうだと……」

（お前は……。お前には何もないのか……。？　こんなお前を悲しむ人間が、誰もいなかったのか郷原……。これだけの頭脳と、知略と、度胸を兼ね備えておきながら、なぜ占い師にしかたれなかったんだ郷原……。お前ほどの男なら、他の人生を選んでも、きっと何かを掴めただろうに……）

それが理解できない。どうしても理解できない。

「ヤクザなんてな……」

器具を片付けながら、辻が呟いた。

「ヤクザなんて、子どもの頃から、愛されないのが当たり前なんだよ。愛されず、嫌われる自分しか知らないから、恐れられ、罵られる世界でしか生きられない……。あんたが郷原を解せないのだとしたら、それはたぶん、あんたが愛されていたからかもな」

「……だから、僕は郷原より幸せだと……？」

「そうじゃねえよ。愛されれば弱くなるのさ人は。弱くなって、自分では何も決められなくなって、優柔不断という迷路にはまり込む。優柔不断になれば、残るのは後悔だけ……。愛される不幸……。それもこの世の一つの真実だ。愛されても不幸、愛されなくても不幸なら、せめて優柔不断にはなりたくない、こいつらは考える。だからヤクザに反省だとか、後悔なんて言葉は無い。それはそれで潔い生き方さ」

「優柔不断……。か……」

山本は、郷原のベッドの側に腰掛けて、手を組んだ。

（優柔不断――。確かに、そのせいで僕は子どもたちを……。何かやりたいとか、起こしたいというときに、他人任せにしたらそれはダメなんだ。他人の存在など思いやったら、自分を貫けなくなる……。僕はそれを、正面から考えるのが恐かった。だから他人が勧めるままに開業する気

になってみたり、赤ちゃんを院長や、池田理事に全部押し付けて、それで責務を果たしたつもりになっていた……。優柔不断以外の何物でもない……。まるで自分がいなかったのだからな、今までの僕は……)

「あんた、寺本の賭場へ行くんだって？」

山本が後ろを振り返ると、総白髪の間医者・辻は、あっという間に身支度を整え、帰るところであった。

「この際、郷原の占い賭博、じっくり見させてもらったらどうだい。それで、自分の優柔不断と徹底的に戦ってみたらどうだ。何かが、変わるかも知れんぞ……？　じゃあな山本先生。今日は居てくれて助かったよ」

黒いコートを羽織って辻は、郷原が寝かされているベッドルームを出ていった。

(占い賭博――。賭博、か……)

別に、今の辻の言葉など関係ない。もしギャンブルをするなら、自分の意志で、自分の決断で、すべて自分で結果を受け入れる覚悟で望まなければならないはずだ。

(そうでなければ、優柔不断になってしまう。優柔不断など、もうたくさんだ僕は――。そのためにまずは……)

「あの……」

安らかな寝顔を浮かべて眠る、郷原の顔を覗き込んでいた山本の背後で声がした。北山あかりが立っていた。

「あの……。手術が終わったって、さっきの先生が言うので……。あたし、何をしてあげたらいいですか？」

あかりは、水商売の格好のままでそこに立っていた。しかし顔を洗ったのか、化粧はすっかり落ちて、素颜になっていた。こうしてみると、とても素直な、優しい顔立ちの女性である。

「そうですね……。手術直後は、水を飲ませちゃいけないから、しばらくは唇を濡らしてやってください。水、欲しがると思うけど、6時間は我慢させて。6時間したら、何か飲ませて大丈夫。あとは汗をかくから、体を拭いてあげるのと、点滴の交換くらいかな」

「わかりました。あとはあたし、替わります……」

「ああ……。頼みます」

山本は、立ち上がると、郷原の寝顔をチラリと見て、ドアを出て行った。ドアを出るとそこには、池田史郎が静かに座り、川嶋貢が、部下とともに待っていた。

「山本先生、助かったよ。とりあえず、これは借金の値引き書と、処置代30万だ。足がつくとマズいから、領収書は切らないでくれ」

川嶋が差し出した封筒を、山本はだまって受け取ると、中を改めて、その場で現金を数えた。確かに30万円入っている。封筒と、値引き証明書をしっかりと手に握ると、山本は、疲れきった体を池田と対峙する位置のソファに投げ出して、シガーボックスから細巻きタバコを1本取り出し、煙を深々と吸い込んだ。以前の山本ならば、池田の前ではこんな態度はしなかったかもしれない。山本の中で、何かが壊れ始めていた。

メスや注射器を扱ったのは、数ヶ月ぶりである。ひと口プカリと煙を吐いて山本は、柔らかい表情のまま池田のほうを向いた。

「それで結局、池田理事……。僕の5千万円は、何に使ったんです？」

「う……。そ、それは……」

「僕らは別に、あんたがたの犯罪をどうしようとか、罪を糾弾するとか、そんな気はさらさらありません。どうせみんな、同じ穴の貉ですからね。だから、本音で話してください」

「本音……？ 本音と言われてもな……」

「いい歳して、しらばっくれしないでくださいよ理事長……。大人の本音といたら、二つしかないでしょ？ カネとセックス……。この世はそれだけです。僕の5千万で、なんの利益を得ようとしたんですか。それを聞かせてください」

「う……………」

池田は、側にいる川嶋貢や、川嶋の部下たちをキョロキョロと見回していた。みんな柔和を漂わせているが、確かに全員、ひとクセもふたクセもありそうな連中だった。

(寺本組……。ヤクザの前で、こんな話をするだなんて……)

「わ、わかった……。話すよ、本当のことを……」

池田はそう言うと、タバコを1本取り出して火をつけた。タバコで胸を落ち着けなければ、なかなか上手に話せないことである。

郷原の乾いた唇を、濡らした綿で何度か拭いてやり、額や首筋に浮かんだ汗を拭いてやっから、彼が安らかに眠っているので、北山あかりも、リビングのほうへ戻ってきた。

男たちのためにコーヒーを淹れる。自分も、池田の話聞くために――。

「あの5千万は、厚生労働省の新薬承認審査の審査官たちに、賄賂としてバラ播くつもりだった……」

「新薬承認審査？」

「ああ。キミも医者なら、知っているだろう？ 厚労省の承認が取れなければ、国内で薬を売りさばくことが出来ないことぐらい。近藤は時雨製薬の研究室で、ある夢の薬品の研究をしていた……。トルバイドファリン……。微生物が作る酵素の1種だ……。それが持つ作用を応用した薬“トルバイシン”……。知っているかね？」

「トルバイシン？ 聞いたことがある……。たしか、体内に入った放射性物質を、体外に排出する作用のある薬だとか……」

「ああ。近藤と時雨製薬は去年、そのトルバイシンの治験に成功したんだ。それで、それをさっそく新薬として承認してもらおうと、書類申請をした……。まずは日本で承認されてから、その後、世界中で特許を取得して、莫大な利益を得ようとな。ところが……」

「中国の針陽薬品のほうが、申請が早かったというわけですか」

あかりが差し出したコーヒーを、ひと口飲んで、山本が結論を言った。その言葉に頷く池田である。

「そうだ。タッチの差でな。日本が、この国が実は、非常にトルバイシンを必要とする国だというのは、わかるかね？」

「……まさか、原発……？」

川嶋が、眼を細めて池田を見る。

「その通り。日本は世界でも有数の、原発依存大国だ。その原発で働く職員たちや、電力会社、原発がある地域の住民たち……。そして、このままではいつか必ず訪れる、未曾有の大規模原発事故……。それらの脅威に備えるために、日本にはトルバイシンが要る。大量に……。世界中の研究機関がこぞって、トルバイシンの開発を進めてきた。時雨と近藤は、書類を提出するのが3日遅れただけで、何千億という富を掴み損ねるところだった……。だから、私が……」

「元厚生労働省の役人だったコネクションを通じて、近藤と時雨製薬に、承認審査官を紹介したのですね……。飯田継男議員の力も借りて……。針陽薬品よりも、自分たちの提出書類のほうを、より早く審議してもらおうと……。3日の遅れを取り戻すつもりで……」

「そうだよ。しかし、けっきょくは無駄な悪あがきだったがね」

あかりは、男たちの邪魔にならぬよう、ソファから離れて、トレーを持ったまま話に聞き入っていた。

再び池田の声がした。

「けっきょく時雨製薬と、飯田継男は、近藤を見限った……。面倒な承認にこだわらなくても、針陽薬品が特許を取ってから、パテント料を支払って、製造シェアを拡大するほうが得だと、そう考えを翻した。針陽薬品には、純度の高いトルバインドファリンを抽出する技術がない。技術力では、時雨製薬に勝てない……。だから、面倒なことにやっきになるよりも、漁夫の利を取った。しかし近藤は、納得できない。そりゃあそうだ。承認されれば、世界の歴史に名を残すことが出来るのだから……。だから、カネ集めに必死になったんだ。賄賂でもなんでもバラ播いて、自分が一番に承認されたいのだと……。そんなときだよ。キミがのん気に、開業話なんかべらべら話していたのは……」

「……だから、マヌケな世間知らずの産婦人科医から、賄賂に使うカネを、むしり取ってやろうと……？」

「……まあ、そういうことだ。医者の開業には、億単位のカネが動くからな。キミには確かに、恨みなどなにもなかった……。ただ、私も近藤も、カネと名誉に取り付かれて、支配されていた。近藤が殺されたとき、私は本当に目が醒めた。もう特許や承認などどうでもいい、どうでもいいから、殺さないでくれと……。針陽薬品だよ、近藤を殺したのはな」

「……………」

山本は、硬い顔をしていた。本当の事情を知って、気持ちが落ち着いた部分と、人間の営みの矛盾みたいなものが、同時に胸に迫ってきて、無表情だった。

「でも、わかりません……。そりゃあ、トルバイシンが近藤の名前で承認されれば、近藤から些少のカネは受け取れたでしょうが、僕には、あなたがカネだけのためにこんなことをしたなんて、信じられない……。あんなに、子どもたちのためにと、私財を投げ打ってまでNPOを立ち上げたあなたが……」

「……それは、買いかぶりすぎだよ山本くん……。どんなに立派な事業だって、カネが要る、生活もある。最初は名前貸しのようにして発足を手伝った里親協会だったけれど、私は私なりに社会貢献しようとして必死だったんだ。しかし、認識が甘かった……。人間の性善説をずっと信じていた私にとって、里親事業は絶望の連続だった」

山本は、黙っていた。あかりも、じっと端っこに座っていた。

そのときだ。ゆらりとあかりの後ろで陰が揺らめいた。ソファに座っていた一群が、一斉にそちらを振り向く。あかりが首を後ろに向けると、点滴を吊るしたポールにすがりながら、肩を包帯でぐるぐる巻きにした郷原が立っていた。あかりは慌てて、側へ駆け寄る。

「だ、だめですよ……！！ 寝てなきゃ……！！」

「う、うるせえ……。面白そうな話じゃん……。俺にもき、聞かせろよ……」

あかりは郷原を押さえながら、山本を振り返った。

「……いいですよ、北山さん……。別にもう、処置は終わったわけだし。汗、拭いてやってください」

「わ、わかりました」

あかりは、郷原を支えて、山本の隣へと座らせると、バスルームから湯を張った洗面器とタオルを取ってきて、郷原の体中に滲んだ汗を拭おうとしたが、それを撥ね付ける郷原である。

「いい。余計なことはするな」

「でも……。体、冷えちゃうわ……」

「いいたら！ 邪魔だ。向こうへ行ってる！」

郷原は言い放つと、あかりを突き飛ばした。よろけて、洗面器のお湯が大量に床の上にこぼれた。

あかりはこぼれたお湯を、皆が見ている中、郷原を拭こうとしたタオルで、はいつくばって拭いた。拭きながら、涙も一緒にこぼしていた。

郷原の胸の奥が、意地悪な感情に染まる。あかりの尻をなぜか、後ろから思い切り、足蹴にしたくなった。女のこういう卑屈な態度をみると、なぜか郷原の神経は、激しく苛立ってしまうのだ。

それを上手に隠すことができないまま、郷原は、乱暴にあかりの手から、あかりが床を拭いたタオルを奪うと、それで火照った自分の頬を押さえた。そして、池田の話の続きを聞いた。

池田がまだ厚生労働省で、法人担当課長をしていた頃――。池田の上司だった官僚が、早期定年後に天下りとして時雨製薬の役員に就任した。その上司と池田は、かなり親密であったらしい。時雨製薬に上司が籍を移してから、ちよくちよく酒場に呼ばれては、その元上司と飲んでいた池田である。

あるとき、時雨製薬が治験をしている新薬の承認を、何とか早めてもらえないかと、元上司から持ちかけられた。池田は、法人担当の窓口だったから、新薬の承認の順番を早めることが出来る立場だった。ただ、企業から上げられた書類を、審議官が早く審議してくれるよう、上のほうに挟んで提出すればいいだけのことである。それだけで、報酬は5万円――。

多数のローンを抱えた、ただの公務員に過ぎない池田にとって、これ以上ないアルバイトであった。

薬というものは、動物実験をある程度経ると、治験という名の人体実験を行う。そして、その臨床データを、厚生労働省の新薬承認審議に提出するのだ。そこで承認されて初めて、製品化が可能となるのだが、しかし、これが異常に時間がかかる。提出から2年も3年も経って、ようやく審議自体が始まるというケースも珍しくない。

だから、各製薬メーカーはなんとか、この順番を早めてもらおうとやっきになるのだ。そんなわけで、池田のアルバイトが過熱するのは時間の問題であった。

そんな裏稼業を始めて、1年もした頃、このことがとうとうバレてしまう。当時まだ47歳という若さだったが、この事件を機会に早期自主退職することになった。池田はノンキャリアだったから、どのみち課長職以上は望めない。官庁勤めにも飽きていた。

なにか大きな事業をやりたい――。そう思いながら地域活動や、政治的な活動などに首を突っ込んでいるうちに、里親事業をやらないか、と持ちかけてくる集団があったのだ。池田がかつて厚労省の中で、福祉関連の行政指導担当官だったことを知ったうえで、近づいてきたグループである。池田は、そういった仕事ならば、自分のいままでの経験が大いに活かされると思い、発起人としてNPO設立に名前を貸したのだ。

これからは、役所がカバーできない子どもの人権問題を、自分が少しでも取り持ってやりたいと、そう考えた。児童相談所とのパイプも、だんだん太くなっていった。海外の戦争孤児を扱うグループとも連携を取った。たくさんの親に捨てられた子どもを、仲間とともに温かい里親家庭に渡してきた。それはウソではない。

しかし、それでも活動は苦しい。このままでは、事業の存続が危ないというところまで追い込まれた池田に、ある日、1本の電話がかかってきたのである。

それは、時雨製薬に席を移した、元上司からの電話――。

(杉並にある、杉の木坂総合病院で先日誕生した、親なしの赤ちゃんがいる。その子を引き取りたいが、我々のような一般人では取り合ってくれない。池田くんなら、NPO活動の実績がある。その子を連れてきてもらえないか――。報酬は、300万だ――)

さ、300万――?!あまりの額に、池田は眼がくらんだ。

こうして、山本亮一が勤務する病院を尋ねた池田――。

二人は、ここで始めて知り合った。どうにか山本をごまかし、赤ん坊を手に入れると、池田は、元上司に指定された場所へ向かった。そこは、どういうわけか、都内の別の病院であった。

そこに、元上司に連れてこられた近藤学がいた。それに、近藤の知り合いの医者たち――。赤ん坊を受け取った近藤は、すぐに赤ちゃんを医者たちに手渡した。赤ちゃんを受け取った医者たちは、そのまますぐにタオルへとくるむと、赤ん坊を隠すように通路の奥へと消えていった。

もうこれで、自分たちの仕事は済んだという。近藤はニコリと笑って、池田に現金が入った銀行の封筒を渡すと、なぜか携帯電話のカメラで、パチリとその瞬間を写真に取った。

池田が、衝撃の事実を知らされたのは、その日の夜のこと。今日のお礼にと、近藤と元上司に誘われて、料亭で食事をしたときのことだ。

近藤が、いきなり切り出した。

あの赤ん坊は死んだ。肝臓移植のために――。我々製薬メーカーにとっての切り札、厚生官僚出身の代議士、飯田継男の、若い愛人が産んだ子どもが、肝臓障害であと数ヶ月の命だ。一刻も早く移植手術をしなければ助からない。そのために、あの赤ちゃんから肝臓をもらった――。

あのとき、赤ん坊を連れていった医者たちは、旧共産国の医師たち――。今、旧共産圏の国々では、幹細胞を利用した再生医療が、格好の外貨資源となっているのだ。欧米のカネ持ちたちが秘密裏に旧共産国へと出向き、そこで白内障や緑内障、血管障害や神経損傷などの手術を受ける

。その際に、生きた新生児や胎児から取り出した幹細胞を利用する。あの子は飯田の愛人の子どものために、肝臓を取られたあと、某国へ生体サンプルとして買われていった。

「そのカネこそ、あなたにお渡しした300万円ですよ池田さん」

そうやって、手元のお猪口で熱燗を煽る近藤である。池田は、あまりの事実に卒倒することも忘れ、ただ呆然と、近藤学の油ぎった鼻先を見つめるだけだった。

仕方がないのだと、元上司は言った。ドナーが足りない……。ドナーの出現を待っていたら、愛人の子どもは死んでしまう……。子どもが死ねば、愛人がスキャンダルをすべてぶちまけると、そう言っているらしい……。それは我々、飯田継男と、飯田継男の派閥で利益を得ている製薬メーカーにとって大問題だ。だから、身寄りのないあの赤ん坊から、生きた肝をもらうことにした――。親のない子どもなど、成人するまで税金で負担することになるのだから、そんな子どもは減ったほうがむしろ、世のためなのだ。

二人は池田にそう言った。そして、近藤は池田に、さきほど撮った写真を見せる。

「これは僕らと池田さんの、共犯の証拠写真です。あなたはバラされたくなければ、僕らに協力するしかないですよ」

そして、話はもっとどす黒くなっていく。トルバイシン――。夢の放射能除去剤――。その臨床試験のために、胎児や新生児の生体組織が要る……。中絶児や、親のいない抹殺してもいい子どもを連れてきてくれたら、ひとりにつき100万払う――。

そう言われた池田だった。近藤はさらに言う。幹細胞という、放射能にもっとも敏感な、研究すべき命の神秘は、新生児と胎児だけが大量に持っている……。明日の人類、子どもたちを、核の脅威から救う研究のために、多少の犠牲は仕方がない――。と。

それからだ。池田の活動は、真面目な里親事業から、身寄りのない子ども探し、中絶希望の女性探しがメインになっていったのである。すべては、トルバイシンのため――。近藤が特許を取って、莫大なカネを掴んだら、私はそのカネで今度こそ、人を救うための事業を起こすのだ――……。

「あ、あたし、スキャンダルをぶちまけるだなんて、そんなこと、ひとことも……。一言も言っていない……」

「大丈夫か？ お前……。辛いなら向こう行ってろ」

郷原が、あかりのすすり泣きに気がついて、ソファの下を見た。池田の独白を、郷原の側でじいっと聞いていたあかりは、ショッキングな事実の唇を噛み、うつむいたまま、涙をこぼしていた。

「か、肝臓、あたしのをあげてって、何度も何度もお願いしたけど、ダメだって……。大人の肝臓は、小さい子どもには上げられないって……。じゃあ、りえと一緒に死ぬって言ったの……。そしたら、それは困る……。谷中さんが、あたしを養女にと言っているから、死なれたら困って……。あ、あたし……」

(利用されたなコイツ……。薄汚い、野心の固まりの男どもに……。谷中が、飯田に対してイニシアティブを握るための道具にされたんだ、この女と娘は……)

郷原は、自分の頬を押さえていた濡れタオルを、あかりに渡してやろうと手を出した。あかり

の手が、その手に一瞬縋りついた。郷原は戸惑ったが、10秒くらいそのままにしてやってから、そっと手を解いた。

「あの……。あたしの娘のために、ぎ、犠牲になった子の遺体は、どうなったのですか……？」

池田に尋ねるあかりの声は淡々としていた。池田は申し訳無さそうにうつむいて言った。

「それは、わからない……。たぶん、吊ったりなどはしていないのでは……」

「山本先生……。中絶とかした赤ちゃんは、どうやって捨てられるの……？」

あかりが、山本のほうへと首を向けて、涙で顔に張り付いた髪を掻き揚げた。

「それは病院にもよるよ。僕がいたところでは、摘出した腫瘍なんかと一緒に、生物汚染物質として専門業者に渡していた。良心的な病院だと、縫い合わせて、きれいにして、葬儀屋さんを手渡すこともあるけど……。そんな秘密のある遺体ならなおさら、たぶん、汚物として処理されてしまったんじゃないのかな……」

「……そんな……。その赤ちゃん、自分が生まれたことを、この世で覚えていてくれたのは、山本先生だけだったんですね……。山本先生だけが、その子が確かに生まれてきたことを、覚えていてくれた人……。そんな生だなんて……。そんな生を犠牲にして、あたしの娘が生きているだなんて！！」

「だから、向こうへ行ってろって言っただろ？ 泣くくらいなら聞くな」

郷原は冷たく言った。それでもあかりは、郷原の側を離れない。郷原の座るソファの足元で、小さくうずくまっていた。

郷原は、少しため息を吐いてから、優しい声をあかりに向けた。

「北山って言ったっけ……？ あんた悪いけど、コンビニ行って氷と、スポーツドリンク買ってきてくれる？ あと、熱さましの湿布な。んでお前、着替えとか無いだろ？ ついでに買い物行って、自分の着替え買って来い」

郷原はそう言うと、よろける体でどうにか立ち上がり、ベッドルームから自分の革財布を取ってきて、中から5万円取り出し、あかりに手渡した。

「ほれ……。釣りは要らないからな」

そう言うと、川嶋の側に控えていた男に、顎をしゃくる。

あかりは川嶋の部下の一人に促されると、郷原を振り返りながら、部屋を出ていった。郷原は泣きはらしたままのあかりの眼が、なぜだか、遠い昔の、自分に似ている気がした。

どうしてだろう。占い賭博の話をあかりには、聞かれたくない――。それで買い物に出したのだ。

「さあて……。池田理事長。我々の話はこれからですよ」

いいながら、体を引きずって元のソファへと戻る郷原である。

「き、きみたちの話……？」

だいぶ緊張感がほぐれて、池田史郎はタバコを吹かしていた。しかし、そこが甘かったのかも知れない。

2、

「おい、村井」

郷原は、川嶋貢の隣に控えていた、浜崎慎吾とバトンタッチしてやってきた平安ファイナンス社員の村井に、声をかけた。

「ちゃんと全部、録音したか？」

「はい。確かに」

村井はそう言うと、今までの会話をすべて納めたボイスレコーダーを、ジャケットの胸ポケットから取り出し、少し巻き戻して、再生スイッチを押した。そのクリアな音声を聞いて、顔が見る間に張り付く池田史郎である。

「ククク……。なかなかいい音質じゃないの。ぜーんぶ、きれいに録れてるじゃん……」

いいながら郷原は、腕を伸ばして、村井からスティック状のデジタルボイスレコーダーを受け取った。

「理事長……。そう心配しないでくださいよ。これはまあ、保険というか、抑止力というかね。あんたがもし、我々の提案をイヤだと言うなら、コレ、仲良しのオヤジエロ雑誌の記者にでも、プレゼントしちゃおうかなって。こんな危ないネタでも、オヤジエロ雑誌だったら、喜んで記事にしてくれるだろうからね。あとは俺たちが大騒ぎすれば、世の中の連中も、この事実を知るところになるだろうなあ……。どうする？ 寺本組は、祭りを演出することにかけては、定評があるぜ？」

「くっ、くそっ……。！！ ハメやがったな！！」

池田は、憤慨して立ち上がった。郷原は、口元を歪めて乾いた笑い声を出した。

「ハハハ……。！ ハメたも何も。山本先生の質問に、べらべらと勝手に答えたのはあんただろ？ まあ、そう興奮するなって。あるゲームに参加すると決心してくれるなら、この録音は返すよ」

池田は、ハアハアと興奮で肩を上下させていたが、少し落ち着くと、また座りなおした。

「そういえば、さっきも言ってたな、あんた……。ゲームがどうか……。いったい、なんのことだ？」

「だから言ったでしょ？ 俺は占い師なんだってさ。しかも、ただの占い師じゃない……。占い賭博のコーディネーター。わかる？」

「う、占い、賭博……。？ 占いで、賭博……。??？」

「そう……。普通に占ったって、ガキのお遊びにしかなんねえだろ？ 俺はそんなの興味無いんだよ。占いてやつはな、博打に仕立てると面白れえんだコレが。さあ気違い占星術師の郷原よ、未来を当ててみせると、みんなこの俺に勝負を挑んでくる。今度の挑戦者は、個人資産1000億円の爺さんだ。日本政財界を、気分ひとつでコントロールできるフィクサー……。その変態爺さんを楽しませてやるために、二人の対戦者が必要でね。たまたま、山本先生という借金まみれのアホを捕まえたから、山本先生が恨む人に勝負を挑んだら、楽しい賭博ショーが完成するんじゃないかなろうかな。池田理事長にぜひ、山本先生と、俺たち寺本組の賭場で勝負してもらいたい」

「な……。なんだと……。？」

池田は思わず腰を浮かした。その眼が、白黒して落ち着き無い。タバコを持った手が固まって

いる。

「あんた、素寒貧なんでしょ？ それに針陽薬品のことがある。あんたが針陽薬品に命を狙われているなら、しばらくは身を隠す必要があるでしょうが……。どうせ、もう承認も特許も、針陽薬品が取るのは時間の問題だ。針陽に承認が降りてしまえば、あんたはもう命を狙われなくて済む。ほとぼりが冷めるまで、寺本組に身を寄せていたほうが賢明なんじゃないのか？ ゲームに参加するなら、賭場の売上からちゃんと宿泊も面倒見るし、当面の生活には困らないようにしてやろう。チャイニーズギャングは怖いぜ？ あいつら、たったの5万、10万でも殺しを請け負うからな」

池田はうつむいて、タバコの灰が落ちそうなのも気づかないほど考え込んだ。

「か、賭け金は、いくらです……」

震える声で、恐る恐る尋ねる池田であった。郷原は、山本のほうへと首を向ける。

「山本先生、いくら賭けてもらったらいいんだ？」

「そうだな、5千万……。あの5千万円さえ戻ってきたら……」

「でっ、でもっ！！ じ、実はもう、あのお金は無いんですっ……！！ 近藤が、どこかへ持って行ってしまって……。それを賭けろと言われても……！！」

うろたえる池田に、郷原は言った。

「そんなことないでしょ？ 池田理事。三鷹にあるあんたの自宅はかなり広いし、抵当も賃借権もなにも付いてない。それを担保にカネを借りろよ。平安ファイナンスで貸し付けてやろう。五千万と言わず1億でもな。まあ、勝てばいいんだ要は。山本に勝ちさえすれば、あんたは死の恐怖からも解放され、大きなカネも掴むことができ、家も名誉も、なにも失わなくて済む。さあ、どうする……？」

郷原と川嶋が、目配せしあい、揃って池田史郎を見据える。その視線に、動揺で眼をしばたたかせる池田だった。

「僕も、池田理事と勝負してみたい……。いや、僕にとってはリハビリなんだこれは……。自分から甘えを捨てるために、死ぬほどの限界を僕は、味わってみたい……。もうあんたも僕も、後戻りできないところまで来てしまった。今更何も、失うものなんかない……。こうなったら、命を賭けてぜんぶ逆転させるか、このままゆるゆると死を待つかしかない。僕はそんなのイヤだ。命がけで戦って、死ぬときも、生きるときも、自分の決断で進みたいんだ！」

山本の眼に、ゆらめく狂気の炎が灯る。その迫力に気圧されたのと、行き場のない、後のない自分の身の上、そして弱みを握られた圧力で池田は、もはや自分には断るという選択肢は、あり得ないのだとわかっていた。

「う、うっ……。わかった……。山本さんと戦おう……。しかし、山本くんは私に、何を賭ける……？ キミも現金を賭けたまえ……！ 私だってカネはたくさん欲しい。それが偽らざる本音だ！」

「ならば、互いの破滅を賭けて、1億ではどうだ……。あんたは1億、僕は最初に取りられた五千万と、さらに五千万……。それでトータル1億。あんたが勝てば、僕は命を代償に五千万円支払おう。いいだろ？ 川嶋さん……。どうせ僕はもう、平安ファイナンスに骨も皮も、みんな吸われる定めだ。僕の一生を担保にしてくださいよ」

山本の眼が、熱い感情でたぎっている。今までにないくらい、攻撃的な眼の光であった。自分は負けるはずがないと言い聞かせ、信じるしかないような、ギリギリの強がり――。

川嶋はその眼を見据えると、唇の端を歪めて頷いた。

「ふざけるなっ！ 私が1億賭けるのだから、お前も1億の現金を用意しろっ！」

池田は立ち上がって、卒倒しそなくらいの激しい口調で言った。これが正体――。これが池田の本当の、たましいごとの姿……。

「フッフ……！ ありがとう郷原さん。郷原さんのお陰で、僕は人間の醜い本性を知ることが出来た。これがやっぱり、あんたの正体なんだっ！ やっぱりあんたは、格好いいこと言って、偽善者ぶったカネの亡者だ……！ ハハハ……！！誰がその手に乗るかっ！ お前、自分の立場をわきましろっ！ 僕らに会話を全部録音されたことを忘れるんじゃない！ お前は1億、僕は5千万だ！！ お前に選択の余地はないぞ池田！！」

「クッ……！ くそうっ……！！ 飲み込めないっ！！ 飲み込めないがしかしっ……！！

わ、わかった……！ その録音をぶちまけられるよりはマシだ……！ 承服するっ！ 郷原と言ったな……。賭博をすることを承諾したぞっ……！ 録音を返せ！」

「ああ……。もういいよ……。これで賭博は成立した。すぐに第三者の立会いのもと、賭博のための誓約書にサインを……。それが済んだら、ボイスレコーダーごとあんたにくれてやる」

ソファに両足を乗せ、上半身裸の郷原は、眼鏡の奥から覗く怪しい瞳を光らせて、池田に口角を上げてみせた。池田と山本の間、緊張感の火花が散る。

川嶋は狡猾な眼で、不敵に口元を歪めると、唇から白い煙を吐き出しながら山本を見た。

「フッフ……。いいだろう山本先生……。5千万、貸そうじゃないか。負けたらせいぜい寺本組のために、架空の診断書製造機になってもらおう」

それぞれの顔に、ふてぶてしさが色濃く刻まれる。男は、野蛮な生き物――。賭博は、男の戦闘本能を掻き立てる行為――。山本の顔は歪んでいた。ガラスの繊細さを、必死で隠そうとして――。

「では、これで話がまとまったな。今から“デスティニー”へ、運命という名が冠された賭場へ、山本先生と池田さんをご案内しよう。賭けの調印式と、ゲームの説明だ。村井、すぐに用意しろっ！」

「はいっ！」

川嶋貢が、部下の村井に命じた。村井はさっそく、デスティニーの店長、城乃内という男に連絡を取った。そこから迎えの人間をここまで来させるのである。

「おい郷原！ お前はもう休め！」

村井に指示を出し、池田にしばらく好きにして待つよう伝えたあとで、川嶋が郷原をすぐに怒鳴った。

「そうだよ！ 寝てなきゃダメだ！」

山本もすぐに川嶋の声に賛同して、どうやら悪寒がぶり返してきたらしい郷原を、寝床に追い立てることにした。

「へ、平気だ……！ 一人で歩ける！ 余計なことはするな！」

「なに言ってる、よろけてるじゃないか！」

一人で歩こうとする郷原を、肩で支えてベッドへと連れていくと山本は、まずは郷原を寝かせて、点滴のパックを交換してやった。

「たぶん、傷口から雑菌が入って、そのせいで熱が上がっているんだと思う。なにせ、こんな不衛生なところで手術までしたからな……。こういう熱は恐いんだ。今夜はとにかく寝てろ」

「ケッ、医者みてえなこと言いやがって……。でもまあ、これで最初の約束は果たしたな。あんたをハメたやつから、カネをぶん取れるチャンスを作るって話だったから……。でも、俺も礼を言わなくちゃならねえか。あの辻のとつあんは、見立てはいい医者なんだが老眼だから、手術なんか恐くてよ。あんたが居てくれてまあ、助かったよ。済まねえから、あの3千万はチャラにしてやる。それで貸し借り無しってことでいいか、山本さん」

「ああ……。実はあとで手術代、あんたに請求しようと思ってたところさ。僕も切羽詰まっているからな」

そういうと、山本はベッドサイドに椅子を持ってきて、今夜は郷原を看病してくれるだろう北山あかりのために、点滴の交換方法や、看護の注意点などをメモに書いてやった。

動くほうの右手を頭の下に敷いて、ぼんやり山本の顔を見ていた郷原だったが、点滴の薬剤が効き始めて、うつらうつらしてきた。

眠りに落ちる寸前、郷原は、山本に最初から気になっていたことを尋ねた。

「なあ……。あんた、なんで発展途上国に渡らなかったんだ……？」

「え……？」

山本は、その質問に一瞬固まった。

「ど、どうしてそう、思った……？ 星にそう、出たのか……？」

眼をうっすらと閉じて、それに反問する郷原である。

「……星なんか関係ねえさ。あんたを見てればわかる」

「……やっぱりあんた、天才占い師だな。その通りさ。僕は本当は、発展途上国で医療ボランティアをやりたいかった……。それが研修終了後、人手が足りないって泣きつかれて、渋々勤務医になっちゃったけど……。僕はダメなんだ。断れないっていうか、優柔不断そのもの……。病院を開業しようとしたのも、嫁さんや親類の強い勧めがあったりして、それでつい……。それじゃあダメなんだって、この一連の出来事で痛感したよ。僕は、誰の言葉にも惑わされない自分に生まれ変わりたい……。賭博に加わるのは、親を助けたいためばかりじゃないんだ。自分のために、限界まで危険にハマってみたい、そう思ったんだよ。だから負けても、郷原さんを責めたりしないから、心配するな」

山本は、少し微笑んでから郷原の顔を見た。点滴には催眠成分も含まれている。熱と疲れと薬のせいで、郷原は眠ってしまっていた。

振り返ると、川嶋貢が立っている。

「では山本先生……。行きましょうか……。我々の賭場へね」

「……………ええ」

郷原を寝かせてベッドルームを出ると、リビングでは池田が苛立ってタバコをくゆらせていた。

「悪いが、キミは私に勝てないよ山本くん……。私にはもう、怖いものはなにもない。心から、人を踏みにじってでもカネが欲しいんだ。キミが破滅するなどお構いなしで私は行くからな。そのつもりでいろ……」

「……………いいでしょう……………。僕もあなたの生活など、気にしないで戦いますよ池田理事……」

二人の間に、静かな火花が散った。それを横目に見ながら、迎えにきたデスティニーのベンツへと、二人を案内する川嶋と村井であった。

1、

日がだいぶ傾いて、薄暗く暮れ始めたころ、北山あかりはダイヤモンドパレスホテルへと戻ってきた。郷原に頼まれた通り、氷と、熱さましの湿布と、スポーツドリンク、そして着替え用の自分の下着やシャツ、ジーンズを買って、現地で着替えてきた。

フロントに向かいながら、あかりは、思い出していた。

(そういえばあたし、あの占い師さんの名前、本人から聞いていないんだわ……。確か、郷原と呼ばれていたようだけれど……)

キツくて、射抜くような怖い眼をしているけれど、どこか寂しい感じ……。あかりは郷原のことを、そんな風に思った。

フロントを通り過ぎようとしたとき、ホテルの制服を着た女性が、あかりに声をかけた。

「あの……、北山様、ですか？」

「ええ……。そうですけど……」

「鍵を、お預かりしています。皆様外出してしまわれて……。これをお持ちください」

フロントの女性は、あかりにルームキーを手渡した。

(まさか、占い師さん……。！！ あんな体で……。！！)

あかりは、急いで27階へと昇っていった。ドアの前に着くと、慌ててルームキーを差し込む。センサーが反応して、施錠が解かれる音がした。金色のドアノブを掴むと、そっと回して押した。

電気も、何も灯っていない。部屋は日暮れの暗さが溢れている。

(本当に、誰もいないの……?)

照明のスイッチを押してから、リビングの奥に二つあるベッドルームを覗いてみた。点滴を吊るすポールが見え、そこに吊られた点滴から伸びた管が、腕にしっかりと刺さっているのが見えた。

(よかった……。そうか、眠っているから、フロントに鍵を置いていってくれたのね……)

あかりは郷原の寝顔を、そっと覗いてみた。夕方になって、より激しく熱が上がってきたようである。

(当たり前よ――。銃で撃たれて、手術までしたのに、起き上がったりするから……)

熱さましの湿布を、郷原の額に貼る。それから、優しく頭を持ち上げて、首筋にも1枚。そして、胸の付け根のところ――。あかりが、飯田との不倫で産んだ娘のりえは、体の弱い子どもで、よく熱を出した。そのとき、こうしてやると熱が早く下がっていいですよと、小児科医が教えてくれたのだ。

郷原の唇が、熱と水分不足で干からびていた。ガーゼも買ってきてあったから、氷水で湿らせて、口元を濡らしてやった。その刺激で、わずかに眼を開けた郷原の唇が、微かに動く。

おかあさん――。

そう、つぶやいたように聞こえたけれど、錯覚かも知れない。

冷たいガーゼで、郷原の髪が生え際を拭う。4、5秒、あかりの眼を見つめた郷原は、小さな男の子のように警戒心のない顔で、また意識を落していった。

時刻はもう夜だ。あかりは郷原がよく眠っている間に、シャワーを浴びることにした。もう丸1日以上、体も髪も洗っていなかった。

シャワーを浴びて、Tシャツ姿になる。ボトムは、ジーンズをまた身につけた。ホテルのバスローブも置いてあるが、なんだか、そんなものを着るのも変だと思った。

それにしても、広い室内――。改めて、スイートルームの中を眺めてみるあかりだった。(そういえば占い師さんはなぜ、自分の家に帰らないのかしら……。この人の家族は、この人の帰りを心配して、待っているんじゃないの……?)

そう思ったせいで、あかりの胸に娘・リエの顔が過ぎった。

(リエちゃん……。会いたいよママ……。リエちゃんに会いたい……。今ごろ、なにしているの……?もうお風呂に入って、おねんねしてる頃かな……。あたしじゃないママに抱っこされて……)

あかりは、少しさめざめと泣いてから、急に顔を上げると、さっき買い物にいったコンビニで仕入れてきた求人雑誌を、ビニール袋から取り出した。

ダブルサイズベッドの、左端に寄るような格好で眠る郷原の枕もとに、ドレッサーの椅子を運んで、小さなライトを灯し、置いてあったボールペンを握りながら、求人情報誌を開く。

派遣の募集広告。時給1300円からというのが、あかりの眼を引いた。未経験OK、高卒、45歳まで――。

(あたし、事務もなにもやったことない……。パソコンも、難しいことわからない……。そんなのでも、雇ってくれるのかしら……。この先アパートを借りて、リエと二人食べていくためには、いったいいくら稼いだら?アパートを借りる……。そうだわ、敷金とか手数料とか。保証人をもって言われたらどうしよう。あたしに保証人なんて、心当たりもないもの。それに、働く場所……。面接に行っても、連絡先の電話番号と住所って言われたらどうしよう……。やっぱり、我慢してでもあそこにいれば良かったの……?)

そう思ってから、あかりは首を振った。

(ううん……。あんな生活、もう耐えられない――。ホームレスのほうがずっとマシだわ……)

あかりは、5種類ほど買ってきた求人情報誌の中から、普通っぽいのは絶望的だと思って、水商売や風俗嬢の求人広告ばかりが掲載されている雑誌を手にとった。ため息交じりにページを繰ってみた。

ファッションヘルス嬢、日給3万円、大入り手当あり!! の文字が躍る。しかも託児所つきらしい。

(日給3万円――。ウソだ、そんなの……。衣装代、タオル代、水道代と引かれていって、手取りなんか2万円にもならないわよ。そんな日当のために、魂もなにもかも売らなきゃいけないなんて……。それだってもうそろそろ限界だわ。20代のうちはいいけど、30代になったら、それすらもさせてもらえなくなる……。そうしたら、あたしは、もっと死んだまま生きるように、生活費を稼がなきゃならないんだ……。そんなので、どうやって、病気を抱えたりえを育てたらいいの……?)

「泣くなよ、鬱陶しいなあ……」

「つくっ……えっ…えっ……、ふええん……！！」

あかりはいつの間にか、声を上げて泣いていた。

「チッ……」

目覚めた郷原は、うるさくて仕方がない。あかりに背中を向けようとして体を反対に捻ったら、点滴がされているのを忘れていて、点滴のポールが引っ張られ、切開した傷の上に倒れてきた。

「がっ………！ あだだだ……！！」

すぐに立ち上がり、ポールを起こすあかりだった。

「ご、ごめんなさい！！」

「ふ、ふざけんなこのクソ女っ……！！ 向こう行って泣けっ！！」

「ご、ごめんなさいっ……。ご、ごえん、あさいっ………」

あかりは、肩を激しく上下させて、しゃっくりが止まらなくなるほど泣いていた。鼻水もなにも垂れ流して、叱られた小学生のように、ひっくひっくして、郷原の隣に突っ立っていた。

「ぷ………」

その顔を横目で見た郷原の口元が、微かに震える。耐えられなくて、郷原はとうとう吹き出した。

「ぶははは………！！ お前は、子どもかあああっ！！！」

半身を起こすと、よろける腕をベッドサイドに延ばして、そこに積まれた求人雑誌を取り、あかりの頭を張り倒した。

「てっ……！」

ツッコミでもしないと、陰気くさくて敵わない。

「怪我人を笑わせるな……！！ 向こう行ってろっ！ このアホ女！」

「ヤダよっ……。寂しいもん」

少しえぐえぐが収まったあかりは、息を大きく吸って、横隔膜の発作を止めると、赤い鼻のまま言った。

「んじゃあ、カネ払え……。シヨバ代頂こうじゃねえか……」

「いいよ……。払うよ……。いくらだよボケ占い師」

「2万円」

「なんかヤダ。そういうシュールな金額は……。もっと10円とか、あるいは2万ペソとか言えよクソヤクザ……」

「んだと……？ お前、そういうキャラだっけ……？ なんか、昨日と性格変わってねえ？」

「変わってない。あたしはもともと、こーゆうしゃべり方なんだよ。それをオヤジどもが勝手に、なーんか、躰とかしちゃってさ。あたしはお下品な生まれだっけの」

「……そんなんで、よくスナックのママが務まってるお前……」

「務まってないよ。だから谷中にしょっちゅう、ぶたれてた。だいいち、あの店は谷中さんと、谷中さんの知り合いしか来ないもん」

あかりは、サイドテーブルのティッシュボックスから、2、3枚ティッシュを引き出すと、鼻をかんだ。

「まあ、スナックなんてほとんど、そんなもんだ……。パトロンでも居なきゃあんなもん、やってられるわけねえだろ」

「……そういえばあたし、あなたの名前知らない。なんて言うの？」

「教えない」

「なんで？ いいじゃん、教えてよ……」

「ヤダよ。明日になったらお前なんか追い出して、バイバイしたら、どうせ二度と再び会うこともねえ……。そんな間柄でしかないお前に、名前なんか教えたってしょうがねえだろ」

郷原は、どこまでもぶっきらぼうだ。

「んじゃあ、いいもん……。フェアリープリンスのくせに……」

あかりの言葉に、痛む腕を庇うようにして、ゆっくりと郷原は身を起こす。口元がやや引きつり、頬も耳も赤くなっていた。

「お、お前……。なんで知ってる……。俺の黒歴史をっ……。俺の恥ずかしい過去をっ！！」

「あたしは、伊達に不幸女じゃないんだよ。不幸なせいで、かなりの占い本マニアだからね。あんたのバカっぽい星占い本も、持ってた……。そこに写ってた写真に、なんとなく似てるなって思ったよ。昨日からずっと」

「……わかった。謝る……。北山ちゃん……。俺の名前は郷原だ……。郷原悟……。決して、フェアリープリンスなどという名前ではないから、覚えておけっ…！」

「フェアリープリンス・ゴーハラの、“マジカルラブリー占星術”……むぐっ！！」

言いかけたあかりの口を、骨っぽい手が塞いだ。動くほうの右手で、そのままあかりを押さえつける郷原だった。

「お前っ！ 他所でそれを漏らしたら、マジでブツ殺すからな！」

「ヤダよっ！ いいふらしてやるっ！！ この人、昔はそんなハズい名前で、超メルヘンなハズい星占い本出してたんですよって、街じゅうに触れ回ってやるっ！！」

あかりは、郷原の腕を振りほどくようにして叫んだ。昼間冷たくされた仕返しだ。

「わっ……。わかった！！ ボクが悪かった北山ちゃん……。ね、熱が……。もう許して……。はあ、はあっ……」

あかりを捕まえていた腕が、急に力なく萎えてゆく。がくと、肩ごと崩れる郷原だった。

「ご、ごめんなさいっ……。あたし……！」

あかりは、すぐに向き直すと、郷原の頭を持ち上げて、ズレた枕にそっと乗せ、手を静かに、掛け布団の上に直してやった。

「ご、ごめんね郷原さん……。怪我、してたのに……」

そういえば、点滴の交換の時間だ。山本が置いていった説明を見ながら、点滴のパックを新たに吊ると、空になったほうの口元に刺さっている注射針を引き抜き、新しいパックの口元に差し替える。点滴がポタポタと落ちるのを確認してから、ツマミを調整して、ゆっくりと薬剤が落ちてゆくようにした。それから、リビングの冷蔵庫へ行っ、よく冷えたスポーツドリンクと、グラスを持って来ると、郷原の前でそれを注いで手渡した。

少し身を起こし、一気に2杯スポーツドリンクを飲み干した郷原は、落ち着いたように、また枕の上に頭を乗せた。

それを見たあかりは、ジーンズのポケットに手を突っ込む。

「あ、そうだ……。これ、お釣り」

サイドボードに出された札と小銭を郷原は、一瞥した。

「いいよそんなもの。お前持ってる。どうせカネなんか無いんだろ」

「ううん……。他人から、理由もないのにお金をもらうなんて、乞食だわ。あたし、乞食じゃない……。今日、服を買わせてもらったぶんは、いつか働いて、きっと返すからね」

あかりは、優しい顔をして微笑んだ。その顔が小さなライトしか灯っていないせいで、陰影が深く、郷原にはやつれているように見えた。

「……お前、娘は？ 娘はどうしてるんだ。谷中のところなのか？」

あかりは、苦笑したままうつむいた。

「心配、してくれてるの？」

「そんなんじゃねえけど……。なぜ今お前は、娘のところに帰らないのかなって……」

「アイジンってね、いろいろあるんだよ。大丈夫。あの子は今、別のママのところで、幸せに暮らしてる。あたしのことなんか、もうすっかり忘れてね……」

あかりは、唇を結んで、苦笑したまま下を向いていた。その表情で郷原は、あかりが相当卑屈な環境で育ってきた女なのだたと直感した。苛められているくせに、戦うこともせず、我慢してばかりいた人間は、その顔が笑顔のまま張り付いているものだ。

「それより、郷原さんの家族は……？ みんな心配しているでしょう？ おうちにどうして、帰らないの？」

「まあ占い師もな、いろいろあんだよ。もういいよ。お前も寝ろ、向こう行って……。疲れてるだろが……」

郷原の頬が赤潮している。また熱が上がってきたようだ。あかりはその顔を見ながら、弱々しい声を出した。

「やだ……。寂しいよ……。ここに居たい……。あっちは広すぎて……。ねえ、このベッド広いでしょ？半分あたしに貸して。ひとりじゃ心細くてさ。あっちじゃ寝られない……」

「しょうがねえな……。勝手にしろ」

「うん……」

あかりはそのまま、ベッドの反対側に回り込んで、ダブルサイズのベッドの端っこに横になった。とにかく郷原には触れないように気をつけて、そして、もぐり込むとものの数分で寝入ってしまった。本当はあかりも疲れ果てていたのだ。

さんざ冷たくしたつもりなのに、こうして自分の側を離れないあかりを見ていると、郷原は思い出したくもない、昔のことを思い出しそうになって苛立った。あかりが子どもを捨ててきたことなど、できれば知りたくなかった。

遠い昔、狭い部屋で寄り添いあい、3人で眠った日のことが脳裏を過ぎる。自分は男だから、いつまでも赤ん坊のように抱かれるのが恥ずかしくて、毎晩少し離れて眠った。それでも寝たふ

りをして待っていると、いつも温かい腕と足が巻きついてきて、郷原のかじかんだ手足を包んでくれた。

テーブルに残されていたのは、手紙と、たったの5千円札1枚だけだった。

(深雪、悟。おかあさんは、急なおしごとで、2、3日帰れません。二人ともこれで、パンでも買って食べていてください。おしごとがおわったら、すぐに帰ります)

うそつけ、くそババア——。この女も、よくも自分の子どもを捨てられるもんだ——。

点滴の薬剤が効いてくる……。頭の中にいろんな感情が渦巻いたまま、郷原はいつしか、眠りの闇へと落ちていった。

2、

郷原悟と、北山あかりが、なんとなく同じベッドで眠っていた頃、都内某所にあるボクシングジムでは、一人の男がスパーリングの練習をしていた。

男の年齢は、かなり若そうで、青年といった感じであるが、顔色は冴えず、目の色は苦悩と焦燥で狂気に染まり、頬はやせこけて、落ち窪んでいる。今時の、恋だの旅行だのを謳歌する若者とは、かなり違う感じだ。年齢は二十歳前後といったところだろうか。

彼は今、この薄汚いボクシングジムで、金髪に髭面のガラの悪そうな男とリングへ上がり、フットワークを刻んでいた。しかし、ボクシングのスパーリングにしては妙である。

青年の拳は、テーピングで巻かれてあった。ヘッドギアにタンクトップとトランクス、リング用シューズなのはボクシングと同じなのだが、妙なことに、その青年が手にしているのは、グローブではなくて、長さ50cmほどの棒である。

「はい、ワンツー！　そこで踏み込め！　足つかえっ！　足っ！」

コーチらしき男が、青年に向かってミットを向ける。そのミットめがけて、棒で突きかかる青年だった。まるでボクシングと言うよりは、フェンシングのような動きである。コーチが、わき腹を狙えと暗に誘うように、自分の腹の前にミットを動かすと、青年は、大きくそこへ踏み込んだ。間合いが見事に一致して、ミットのど真ん中に突きがめり込んだ。

その瞬間である。リング上で練習している二人に、ジムの入り口から低い声が飛んできた。

「よお……。精が出てるじゃねえか……」

その声にコーチは、振り返る。

「城乃内さん！」

「邪魔するぜ。どうだ？　原口の仕上がり具合は……」

突然現れた城乃内という男は、襟のとんがったガラシャツを着て、胸に金のチェーンをきらめかし、ヤクザそのものの風体である。目つきも、とても堅気には見えない。

コーチは汗を拭いながら、人懐こい笑顔を浮かべて、リングのロープをくぐり、城乃内と今呼んだ男の元へと出てきた。

「へへ……。それがこいつ、思ったより飲み込みがいいんすよ。カンが悪くないです。ただ、残念なことに、あの通りの軟弱な体でしょ？　もうちょっと肉体改造からちゃんとやれば、かなりいい勝負になると思うんだけど、ちょっと時間がね……」

「まあ、そこをなんとか仕上げるのがお前の仕事だ。本番には間に合わせてくれ」

「はあ……。ところで、橋爪のほうは？」

金髪髭の人懐こそうなコーチが、“橋爪”という名前を出すと、リングの上でロープに捕まり、膝をほぐしていた青年の目つきが、にわかには鋭さを増した。

「まあ、向こうはなにせ、元・東洋太平洋チャンピオンだ。多少の矜持はあるだろうよ。しかし、長年のムシヨ暮らしで、肉体的にはかなりなまっている。今、スパーリングを見に行ってきたが、やはり往年のようなキレは、失せていたな。フッフ……。原口とそれなりに、いい試合になるんじゃないのか？」

「でも、今度の原口対橋爪の試合は、面白い趣向がさらに盛り込まれるって話ですけど、いったい何なんです？」

金髪髭コーチは、滲んでくる汗を拭いながら城乃内に言った。

「おお、それよ。それがな、選手だけじゃなく、本番までにセコンドのコーチもしてやって欲しいんだ」

「へ？ セコンド……？ セコンドのコーチ、ですか……。でも、原口の試合は、私がセコンドをやるって話だったでしょ？」

二人の会話が、自分とは関係無いところで行われているのが、カンに触ったのか、原口というらしい、痩せて落ち窪んだ眼をした青年は、リングから降りてくると、城乃内を睨みつけた。

「まあ、今回の趣向ってえのがな、セコンド同士の勝負でもあるわけよ。……おい、池田さんって言ったっけ？ ここへ来なよ」

顎をしゃくって、城乃内は、ジムの入り口からこちらを窺っていた中年の口ひげ男を、コーチと原口の前へ来させた。

池田は、疑心暗鬼丸出しのギラついた目で、原口を見た。原口もまた、追い詰められた狂犬のように、暗くて鬱々とした眼をして、池田を睨んでいる。

(なんとも、よく似たタイプ同士だなー。ククク……。これは面白くなりそうだ……)

二人の瞳を見比べて、口元を歪める城乃内であった。それから池田の肩を叩いて、コーチと原口とに紹介する。

「この人、今度、うちの賭場で大勝負をすることになった池田さん。この池田さんが今日、くじ引きで、原口とコンビを組むことが決まってな。今、誓約書にサインをもらってきたところさ。この池田さんに、お前のセコンドをやってもらうからな。いいな、原口」

「……………」

原口は、ギリッと音が聞こえるほど、歯噛みして、憎らしそうに池田と城乃内を睨んだ。

「どうせ僕に、断ることは出来ないんだろっ！」

「まあ、そういうこった……。しかしお前、池田さんでラッキーだぞ？この人は冷静だ。もう一人の橋爪側のセコンドなんか、産婦人科医らしいがまるで甘ちゃん丸出しのお坊ちゃん。俺は思ったね。原口とあの医者がコンビになるようじゃあ、こりゃあギャンブルの神様も酷なことをするってな。しかし、神はお前を見放さなかった……。せいぜい、残りあと1日、池田さんとじっくり息を合わせて、作戦を立てろ。人生をすべてやり直したければな。ククク……」

「ふっ、ふざけやがってっ……！」

原口は、城乃内にありったけの憎しみを向けていた。

「人の人生をおもちゃにしゃがってっ！！ お前らなんかつ！ お前らなんかつ……！！」

「……呪うなら、テメエの親と育ちを呪えや、原口……。明日の希望もなにもないお前に、俺たちはまたとない再起のチャンスを与えてやっているんだぞ……？ 要は勝てばいいんだ、勝てばな……。この世は、どんな卑怯な手段を使っても、勝てば官軍さ。こういう無茶でもしなけりゃあ、お前みたいな生ゴミ、世間の誰も相手にしねえんだよ……。それをわきましろっ」

城乃内は、生意気な口を聞いてきた原口の胸倉を掴み、唾を吐きかけると、

「んじゃあ、後はヨロシクな……。池田さんを置いていくから、さっそく指導でもしてやってくれ」

そう言いながら後姿で、セカンドバッグを振り、ジムを出て行った。支払いはいつもの通りという、金髪髭コーチへの合図である。

「わかりました！」

嬉しそうに満面の笑みで、城乃内を見送るコーチであった。池田史郎はその様子を、苦虫をかみ殺したようにいまいましそうな顔で、睨みつけていた。

3、

その数時間後の、午前0時過ぎ――。郷原悟は、新橋ダイヤモンドパレスホテル、27階スイートルームの、南側に大きく張り出しているガラス張りの壁にもたれて、携帯電話で通話をしていた。

電話の相手――。六本木でクラブ“デスティニー”を経営する男、郷原と同じ寺本組の川嶋一派、城乃内貴章である。

「そんなわけでな、山本と池田の二人を、さっそくトレーナーのところに置いてきた。占い賭博本番は、明後日だからな。お前も用意しておけや」

「そうですか……。山本……。山本の様子は……？」

「山本お……？ ああ、あの医者か。勝負の内容を聞いたとたん、青ざめて、ビビってたぜ？ なんせ、生き死にの目に会うのは自分だとばかり思ってたようだからな……。フフフ……。急にカラ元気も無くしちまって、面白かったぜ？」

携帯電話を耳に当てながら郷原は、視線を下へと落とした。山本のうろたえる様子が、目に浮かぶような気がした。

（バカが……。甘えを捨てるという言葉は、はき違えやがって……。甘えを捨てるとは、他人の人生など知ったことかと割り切ることだ。そこに気づけない限り、お前は……）

沈黙した郷原を見透かすように、城乃内が狡猾な声を出す。

「まさかお前、あの山本をなんとか、助けてやろうなんて考えてるんじゃねえだろうな……。あいつは、俺たちにとって利用価値がある。診断書だの手術だのやらせて、一生飼うのが得だと、組長も考えておいでだ。山本は負けていいんだよ……。妙な仏心など出すな」

郷原の心の澁みに感づいたように、城乃内が上の方針をちらつかせる。その言葉に、郷原は思わず吐き捨てた。

（……下衆がっ……）

「あ〜？　なんか言ったか？　郷原あ……」

「いえ、別になにも。俺、何か言いましたか今」

「……ケッ、まあいい……。せいぜい、当ててみせろや天才占い師……。この勝負の成り行きと、結果をな……。お得意の占星術だよ。ククク……」

言われた言葉に、侮蔑が含まれているのを、郷原は感じていた。

(いいさ、占い師だとバカにされるのには、慣れている。今に始まったことじゃない……)

「ところで、今日は何時に、どこへ……？」

「ああ。午後4時に、赤坂シンフォニーホテルのティーラウンジだ。そこで志垣会長と、誓約書の調印式を行う……。会長直々のお越しだ。くれぐれも失礼のないようにな」

「わかりました。では、今日の午後4時に……。よろしくお願いします」

通話を切る。まだ、腕がじくじくと痛んで、上げ下げが難しい。

(とうとう、占い賭博の本番一一。今日は誓約書に、判を押す日……。今度は何を賭けさせられるのかな……。腕……？　足……？　耳……？　それとも、自由一一？)

一瞬、心臓がこわばった。でも、恐れることはない一一。

実は今、予言にとっていい状態であるのを、郷原はわかっていた。こんな怪我をして、ぼろぼろだけれど、死に近づけば近づくほど、郷原を愛する予言の女神は、郷原に近くなるのだ。

アルコールへの渴望感が、不意に襲ってきた。賭博と占いでとち狂った郷原の神経が、自分を追い詰めようと脅迫感を持ち始める。痛む腕と、未だに浮かされる熱のせいでふらつきながら、郷原がバーカウンターのほうへ行こうとしたとき、ベッドルームから北山あかりが顔を出していた。

「……ど、どうしたの？　郷原さん……。眠れないの？　あたし、やっぱり一人で眠ろうか？」

「いや、いい……。お前は寝てろ」

体を引きずり、洋酒棚のところへ行って、酒瓶を取ろうとしている郷原に、あかりは眼を丸くした。

「ま、まさか！　ダメだよお酒なんか！」

すぐに、駆け寄った。郷原の周囲にまとわりつくように、止めさせようとするのだが、あかりは基本的にあまり強制的なことをするのは好きじゃないので、ダメだよといいながら、困ったように側に居て、おろおろするだけだった。

そんなあかりに構うことなく、ヘネシーの瓶の口を開けると、グラスに移しもしないでそのまま、郷原は直接ラッパ飲みをする。さすがにあかりは、

「ダメだったら！！」

と強く言って、瓶を取り上げた。

「んだよ、俺の勝手だろ。泊まらせてもらってる身分のくせに、俺に指図するな！」

郷原は、強い口調で苛立ったように言い放つと、また動く右手を伸ばして、ヘネシーの瓶を取り戻そうとする。引っ張り合いになって郷原が勝った。

そのとき、あかりが垣間見た郷原の眼一一。それは、自信の無い、自分を嫌いな人間の眼一一。たくさんの酔客たちの中でも、特に悲しい、帰るところのない男の、眼の光一一。

あの男たちの眼と、郷原の今の眼はそっくりだ。あかりの手からヘネシーをもぎ取った郷原は、また浴びるように口をつけて、胸にびしゃびしゃとこぼしながら、慌てたように喉へ流し込んだ。

それから、プハーッ！ と、大きく息を吐いた。

「見るなよ……。こんな姿見るなっ！ 向こう行けっ！！」

郷原は言い放つと、なおもぐびぐびと、ヘネシーをストレートのまま煽り続ける。あかりは、泣きそうに悲しい眼をして、憐れな郷原をしばらく見つめていた。郷原を抱きしめようかと思ったけれど、それだと、余計に深刻になって、彼を傷つけるんじゃないかと思ったから、やめることにして、2、3秒考え、すぐに思いついて明るい声を出した。

「わ、わかったっ！ いいこと考えたっ！ あたしも、一緒に飲んであげるっ！」

はい、はい！ と、授業中に先生へ手を上げる小学生みたいに、あかりは片手を上げて、おどけてみせた。

「何だよそれ……」

「暗いよそんなの……。アル中ならアル中でさあ、もうちょっと、ギャグっぽくしてくれなきゃ……。そんなマジな眼でラッパ飲みとかされると、迫真すぎてツッコめないじゃん。だからさ、あたしも一緒に飲んであげる。ね？ いいでしょ？」

あかりはそう言うと、さっき買ってきて残っていた氷と、ホテルの有料ミネラルウォーターと、有料の小袋入りナッツを持ってきて、グラスを二つ用意した。手際よく水割りを作ってやる。「あのね、一人で飲むからそんな、アル中みたいになっちゃうんだよ。落ち込んでたり、辛いときはね、余計に一人で飲んじゃダメなの。ずぶずぶになって、そんな自分にまた嫌気が差して、それを忘れるためにまた飲んでって、繰り返しになっちゃうんだよ……。お酒はね、ひとりで飲むようになったら、精神科を受診しなくちゃダメ。完全にアルコール依存症だからね」

郷原は、あかりと向かい合わせの位置のソファに、身を崩して横たわった。酒瓶を取り上げられてしまったので、一気に体がしんどくなったのだ。

「わかったようなこと言うじゃねえか……」

「わかってるよ……。だってあたしのお父ちゃん、重度のアル中だったもん」

「……………」

ごくごく薄い、2、3滴しかウィスキーのっていない水割りが、郷原の目の前に置かれる。これでは、ただの水と何も変わらない。思いっきり不満そうな顔をする郷原だったが、それとは裏腹に、胸の奥が、あかりに対して、犬のように尻尾を振り始めていた。

「お前の父ちゃん、アル中だったのか」

あかりに心が傾くから、つい、あかりのことを聞いてしまう。

「うん。寒いさむうーい冬の日、泥酔いして道路で寝ちゃって、凍死した大馬鹿男なの。ほんとロクでもないよ……。ロクでもないけど、そんなにお父ちゃん、寂しかったのかなって……。あたしじゃあお父ちゃんの寂しさ、救ってあげられなかったのかなってさ。今でもそう思うんだ。あたし、あのときまだ高校生だったから」

言いながら、少し涙ぐむあかりである。恥ずかしそうに、晴れ渡るような力強い微笑みを見せると、人差し指で涙をピッと跳ね飛ばして、ハハハッとおどけて、笑ってみせた。

「そんなわけであたし、郷原さんみたいな男、大嫌い。最低だわ。お酒に逃げるなんて……。最低だけど、放っておけないよなんか……。お父ちゃん、見てみたいでさ……」

その言葉に、郷原は頬が赤らむのを感じた。自分で、自分をコントロールできない。

「……なあ……」

こらえられなくて、とうとう郷原は、本当はさっきからずっと言いたかった言葉を、口にしてしまった。

「ん……？」

「ここ来いよ、北山」

「……お金、取るよ？あたしはプロのママだからね」

「……うん……。払う……。ローンでもいい……？」

「うーん、どーしよーかなあ……。まあいいや。あたしも、宿泊代払えって言われたら困るから、今日は無料サービスにしてやるよ」

そう言うときあたりは、テーブルの反対側から移動して、郷原が寝そべるソファの胸元に、寄りかかるようにして床へ座った。

あたりの笑顔と視線がぶつかる。こんなとき、何を話したらいいのだろうと考えて、二人ともしばらくの沈黙――。

郷原はふと、久子が不意に席を外して、姉と二人きりになってしまった、この間の見舞いのことを思い出した。

葉のせいで髪が抜け落ち、骸骨みたいになった姉と二人、じつと同じ空気を吸った。あのときの沈黙と、今、このときの沈黙は似ていると郷原は思った。

「あのさ、北山……」

「なに？ 郷原さん……」

「お前、きょうだいついてる？」

「いないよ。あたし一人っ子だったもん」

「……そっか……」

あたりが、手持ち無沙汰にグラスの淵を撫でていた。

「郷原さんは、きょうだいついてるの？」

「まあな。姉貴がひとり」

「へえ～……。どんなお姉さん？」

あたりはグラスを撫でながら、郷原の眼をチラリとみた。郷原はじいっと天井を見ていた。

「……人の顔色ばかり窺う性格をしてる。遠慮ばかりしていつも損してさ……。要領が悪いんだ」

「そっか……。優しいお姉さんなんだね。きょうだいがいるってうらやましいな。あたしは一人っ子だったから、お姉さんとか妹とか、ずっと欲しかったよ」

郷原は、あたりが作った水みたいな水割りを一口飲んだ。なぜだか口が渴く。胸の奥がじりじりした。

「お前、母親は？」

「いないよ。だいぶ前に死んじゃった」

「……………」

「……でも、お父ちゃんとお婆ちゃんがいたもん。あたしのお父ちゃん、福井で植木屋やってたんだよ」

「……お前、福井かあ……。どうりで、なんとなくイントネーションがおかしいと思った。こっちに出てきたのはいつなんだ」

心の奥で、サイレンが鳴っている。これ以上、あかりについて知るのはやめると、もう一人の自分が言っていた。それでも、郷原は言葉を止められなかった。

「17歳のときかな。お父ちゃんがのたれ死にしてからすぐ、お父ちゃんの弟にあたる叔父さんが、お婆ちゃんを施設に入れるおカネにするために、福井の家を売っちゃった。あたしは寝るところもなくなって、なんとなくこっちに来たんだよ……。お母ちゃんが死んでから、学校にも馴染めなくてさ、地元にも友達もいなかったから、もう福井には居なくなかったの。いっそ一人で、遠くへ行ってみようって……。東京に行ってみたいなあってさ。そんだけ」

「……………」

郷原は、これと似たような話があったことを思い出していた。

(どこかの誰かも確か、16、17でひとり、島根から流れていったっけ……)

大阪までヒッチハイクしたとき、難波でとあるホームレスの老人と知り合った。老人はたまに街中で占いをする。口先ひとつでカネをむしりとるその爺さんに、そいつは強い関心を持った。自分にも占いを教えてくれと爺さんに頼み込んだとき、爺さんは言った。

(やめておけ。占いなんて外道が最後に手を染める商売だ。兄ちゃんのような若い人がやることじゃねえ。ロクな死に方をせんぞ)

雪村幸造……。雪村の爺さん――。無茶な占いが祟って、とうとう仕舞いにゃあ生ゴミになって、大阪湾に沈んじまった――。らしいといえば、らしい最後だった――。

俺の左腕にいつも嵌めている、金色のロレックス。雪村の爺さんが殺される直前、嬉しそうに俺にみせてくれた戦利品――。唯一の形見――。

「……その腕時計、ずいぶん型が古いのね」

郷原が急に黙り込んで、左腕の時計を撫でていたから、あかりは気になってじっとそれを見た。

「……ああ、これか……。まあ、ちょっとな。もらいものだから、捨てるに捨てられなくてよ。ずっと使ってる」

「……お父さんから、譲られたものとか？」

あかりが、一段と顔を近づけて郷原を見つめていた。けだるそうに腕に頭を乗せて、じいっとこちらを見るその顔に、なんとなく異性の魅力を感じて、郷原の頬はわずかに朱色を帯びた。

「そんなんじゃねえけど……」

「郷原さんの両親は……？」

あかりが、とうとうフェンスを越えてきた。今までだれにも、身の上話などしたことがない。川嶋の内妻、久子以外には――。

「そんなこと、聞いてどうする」

「……別に。ただ、知りたいだけ」

「……………」

郷原は、視線を下へと落とすと、眼を細めた。そんなことをこいつと話して、親しくなって、それでどうなる——？もう二度と、会うこともない女なのに——。そう思って、胸の奥が疼いた。

「話すようなものでもないけど……。親父の記憶はない。俺が赤ん坊のころ、海の事故で死んだらしい。お袋は小学生だった俺と、中学生だった姉ちゃんを残して、どこかへいなくなった。それだけだ」

「……………そっか……。それでさっき、“お母さん” って、つぶやいたんだね」

「え……??」

そのひと言に、郷原の顔中が染まる。耳から首筋まで、茹で蛸みたいに赤くなった。あかりはそれを、もちろん見逃さなかった。

「俺、そんなこと言ってたか??」

「うん。あたしの眼をじいっと見ちゃってさ……。おかあさんって、つぶやいたよ。すごくかわかった」

「……………」

郷原は、激しく狼狽して、赤くなったまま固まってしまった。あかりはそれを見てクスクス笑うと、いたずらっぽく人差し指で、郷原の頬を撫でた。少し生えてきた髭が、ぞりぞりとあかりの指の腹をこすった。

「お母さん、見つからないの？」

「……もういい。その話はしたくない」

「もしかして、怒っちゃった？」

「……………」

郷原は、赤い顔のままじっと黙っていた。あかりはますます、そんな郷原に顔を寄せて、瞳を覗きこもうとした。

「いいじゃん。そんなの、恥ずかしく思うことない。あたし好きだもん、そういう人……。郷原さんのそういうところ……」

「そんなこと、気安く言うなっ!!」

言いかけたあかりの言葉をさえぎるように、郷原が声を荒立てて怒鳴った。あかりはその瞬間、体がびくっと怯えて、指を郷原から離してしまった。

「……………」

「もういい。向こうへ行ってくれ。一人になりたい」

そうやって郷原は、この場から出て行くように身を起こすと、ソファから立ち上がろうとした。

「ほ、本当に怒ったの……？ ごめんね……。怒ったなら謝るから……。ねえ……。機嫌直してよ……」

あかりは立ち上がる郷原の胸元にすがった。その媚びるような顔に、また神経が苛立った郷

原は、乱暴に力いっぱいあかりの手を振りほどくと、突き飛ばした。

「痛っ！！」

ガシャンと大きな音がして、突き飛ばされたあかりは、ソファの手元に置かれていたサイドテーブルよろけて、背中を打った。その瞬間、あかりが手にしていたグラスが割れた。

それを見て一瞬、郷原の眼に気まずさが走ったが、それでも顔を背けると、さっきまで寝ていたベッドルームのほうへと向かっていった。

背中をさすりながら、それを追いかけるあかりである。

「ねえ……。怒ったならごめんね……。そんなつもりじゃないんだよ……。ねえ、怒らないでよ……」

「うるさいなっ！ いいから向こう行けったらっ！！」

猶もすがるあかりを、肩でふりほどいたとき、あかりの髪が逆立った。急に肩をいからせ、拳を握り、白い肌を朱色に染めて、あかりは震える声で絶叫した。

「なによっ！！ あんたなんか、あたしだって大っ嫌いよっ！！」

今度はあかりが、郷原を突き飛ばした。よろけて郷原は、ダブルベッドに尻餅をついた。肩の傷に痛みが走る。

あかりは構わずにわめきちらし、手元にあった枕で郷原を叩いた。

「嫌いっ！！ そうやってすぐ怒る男なんて、嫌い嫌いっ！！ 大っ嫌いっ！！ バカっ！！ 怖いよっ……！ 怖いのっ……！ ぶったりしないで……。なんでみんな、あたしのことぶつよっ……！！」

「……………」

あかりはひとしきりわめいて、枕もシーツもめちゃめちゃにしたあと、呆然とする郷原をよそに、その場にうずくまって泣き出した。

濡れねずみみたいに震えて、自分で自分の肩を抱いていた。その瞬間、郷原には、あかりがひとりぼっち、今までどうやって生きてきたのか、すべて理解できた気がした。

「……ご、ごめん……。ごめん、北山……」

頭に霏がかかって、もう何も計算が働かない。郷原はこんなとき、どうしたらいいのかわからなくて、うずくまったあかりを抱き寄せた。だいきらいと言われた直後だから、拒絶されるかも知れないと思ったけれど、あかりは無抵抗だった。

「お、俺が悪かった……。泣くなよ……。な？」

「……………」

腕に抱き寄せた瞬間、胸のわだかまりが瞬時に氷解するような、甘い感覚が郷原を支配した。そのまましばらくじっと、あかりを抱いていた。もう先のことなど、どうでもいい――。素直になって、一番あかりに教えて欲しいことを聞こう――。

「なあ、教えてくれ北山……。お前、娘をなぜ捨てた？」

「……………」

あかりは、郷原の胸から顔を上げて、郷原の眼を見た。

「…………捨てたと思う？」

「……………」

「……捨てたと、思うの？」

「……………」

今度はあかりが、涙を眼に溜めたまま、必死で郷原に聞いていた。郷原はその眼を、じっと見つめ返した。

「あたし、りえを産んだ日のこと、絶対忘れない……。ずっと中絶できなくて悩んでたのに、無事に生まれてくれて本当に嬉しかった……。最初のおっぱいを飲ませたとき、信じられないくらい幸せだったよ……。飯田先生の奥さんが、病院にりえを引き取りにきたとき、あたし、やっぱりこの子は自分で育てるって、突っぱねた。そしたら、その一ヵ月後、りえに病気が見つかって……。あたしの生活力ではもう、無理だった……。もう、飯田先生の奥さんに引き取ってもらうしかなかったんだよっ……！ えっ、えっ……」

「……そうか……」

郷原は、あかりを抱きしめる腕に力を込めた。左腕が痛いから、片腕でしか抱きしめられないのが残念だった。頬にあかりの艶やかな髪が触れて、柔らかなふくらみが胸に当たるのを感じる。

しばらくじっと、二人抱き合っていたが、やがてあかりが顔を上げた。

「……郷原さん……。なんか体が熱い……。もう休まなきゃ……」

あかりはそうやって、郷原から体を離すと、自分がめっちゃめっちゃにしたシーツや枕をきちんと直して、郷原の手を引いた。

「……ご、ごめんなさい……。これじゃあ、看病にならないね。あたし、郷原さんの上司の方に、面倒みますって約束したのに……」

郷原は、今度はもう嫌がらずに、素直にベッドに入った。

「ああ、あの鬼瓦みたいなオッサンのこと？」

「鬼瓦みたいって……」

「あのオッサンと俺もさ、いろいろあって大変だよ」

郷原は、あかりが差し入れた枕に、ゆっくり頭を乗せながら笑って言った。

「みんな、いろいろあるんだな……」

「まあね……。みんないろいろあるよ……」

そうやって、涙の乾いた顔で、あかりは優しく郷原に笑いかけた。それを見て、郷原も微笑んでいた。

「まだ、看病してくれる？」

「うん」

「そんじゃあ、俺が眠るまで、ここに居ろよ」

「……うん」

あかりが、郷原を休ませるため、枕元の照明を落とすと、部屋は深海の底のように暗くなった。

闇の中、郷原は手探りで、あかりの手を探していた。今ならぜんぶ熱のせいにして、夢が見られると思った。遠い昔、何度も何度も夢見た、自分だけを撫でてくれる、おかあさんの手――。

あかりの手を見つけた郷原は、そっとそれを握ると、自分の胸に引き寄せて眼を閉じた。熱のせいで頭の芯がとろけそうだった。子どもっぽい男だと思われても、あかりにだったらいい――。

1、

あかり――。

深い霧の中で、懐かしい声がある。あかりは声のするほうへと夢中で走っていった。

(どこ……？ どこにいるの？ お父ちゃんっ！ あたしはここにいるよっ！ みんなみんな、誰も居なくなっちゃったよっ！ あたし、独りぼっちだよ、お父ちゃん――！)

あかりが目を覚ましたのは、電話のコール音だった。

なぜか濡れていた顔を、ぼんやり開けてあかりが見たのは、郷原が寝ていたはずのベッドにいる自分だった。

「……………」

そういえば、かすかな記憶――。あれから、郷原の手を握ってやって、しばらくの後、あかりもつられてうつらうつらしていたら、突然、強い力で手を引かれて、結局あかりも同じベッドに入った気がする。郷原の呼吸や、肌の臭いがまだ、あかりの中に残っていた。

(そうか、それでお父ちゃんの夢――。郷原さんの匂い、お父ちゃんの匂いに、そっくりだったから――)

けたたましく鳴り響く電話の音は、あかりがそんなことを思い出す間も鳴り止まない。仕方がなく、寝ぼけたまま手を伸ばして、受話器を耳に当てるあかりだった。

聞こえてきたのは、中年男の声だった。

「北山あかりさんかい？ 私、田代といいます。先日はどうも」

「……………？」

田代、という名前に、あかりはピンと来なくて、しばらく無言だったが、田代は構わずに話を続けた。

「郷ちゃん……、じゃなかった、えーと。郷原先生から伝言を預かっててさ」

いいながら田代は、メモ書きでも見ているのか、少しの間を置いた。あかりはその瞬間、田代という男のことを思い出していた。

そういえば、郷原たちと一緒にいた、郷原の手下らしい中年男が、そんな名前だった気がした。

「えーと。まず一つ目の伝言。“ホテルの支払いはまだ済んでいるから安心しろ”。それから……、“ベッドのサイドボードの上に置いてあるものは、お前にくれてやるから持っていけ”だつてさ。以上」

「え……？ サイドボード……？」

あかりは、ベッドのシーツから顔を出すと、サイドボードを見た。

「う、うわっ！ な、なにこれっ！！」

あかりが見たのは、無造作に置かれた100万円の束だった。

「郷ちゃんからの置き土産、わかったかい？ それが1日看病してくれた日当だって。頑張れよって言ってたよ。それじゃあ」

田代はそう言って、手短かに電話を切ろうとしたが、その瞬間、慌てたようなあかりの音が響いた。

「あ、ま、待って！ 田代さん！」

「あー？」

「あ、あの……。ご、郷原さんは、いまどこに……？」

「それは言えないんだ。じゃあ」

「ま、待って！ 待ってっ！ お願いっ！ 待って！」

「……………」

田代は無言だった。どうしたらいいのか困ってしまっている空気が伝わってきて、あかりは今そこに、郷原がいないことを直感していた。

「あ、あのっ……。田代さん……。郷原さんに伝えてください……。あ、あたし、きつとこのおカネ、返しにいけますからと……」

しばらくの間、田代が言った。

「いいや。その必要はないよ。郷ちゃんがあんたにとって、置いていったお金だ。遠慮なく受けとっておきなよ。じゃあ」

また電話を切ろうとする田代に、あかりは猶も食い下がった。

「ま、待ってください！ 田代さん！ あたし、おカネ貰うようなことしてないわ！ 貰う覚えはないの！ 返しにいけますって伝えて！ そ、そりゃあ、いっぺんには返せないと思うけど……。でも、郷原さんに伝えて下さい……。落ち着いたら、一緒に飲みに行こうねって……。あたし、ご馳走するからってどうか、伝えて……」

あかりは声が震えて、涙交じりになっていた。田代はしばらく間を置いてから、優しい声を出した。

「……わかったよ。確かにその言葉、郷ちゃんに伝えておく」

「ご、ごめんなさい……。田代さんにひとつだけ……。どこにおカネ、返しに行ったらいいですか？ 郷原さんの勤め先なんかはどこに……？」

「……………」

田代はしばらく考えてから、冷たい返答をした。

「悪いけど、それは教えられないよ」

「じゃあ、おカネ、どこに返しに行ったらいいの……？」

「……………」

田代は黙っていた。あかりは郷原とのか細い糸が切れてしまうのが怖くて、泣きそうな声で田代に迫った。

「あたし、このおカネは借りたいんだもん。だから、ちゃんと返しに行きたいの……。返す場所がわからなくちゃ、返しに行けないわ。お願い田代さん、教えて……」

田代は、ハアッと、深いため息をひとつ吐いてから、仕方がなさそうに言った。

「……わかったよ。郷ちゃんはもう、あんたと会う気はないと言ってるが、あんたの気持ちもあるだろうからな。何かあったら新宿百人町の、平安第一ビルの中にある、平安ファイナンスという会社へ行きなよ。おカネはそこに返してくれたらいい」

「そ、そこに行けば、あたしが来たこと、郷原さんにちゃんと伝わるの？」

「……………」

田代は、またしても無言だった。しかしあかりには、無言の肯定のように聞こえる間の取り方だった。

「とにかく郷ちゃん、じゃなかった、郷原先生からの伝言、確かに伝えたよ。じゃあ」

そう言って、田代の電話は切れた。

「あ……………」

耳に当てた受話器は静まりかえった。あかりは呆然として、ベッドの回りを見回した。メモ書きもなにもないまま置かれていた百万円だけが、あかりには悲しかった。

2、

遠くから聞こえる静かな旋律。さざなみのように、寄せては返す人いきれ。頭の上で揺れている、シャンデリアの光。

ホテルは、好きだ。ここでは、誰もが誰にも関心を持たない。みんな通り過ぎてゆく存在——。誰もがやがては、それぞれの居場所へ帰るための場所——。

ホテルに北山あかりを残し、郷原悟は今、長い脚を組んでコートを脱ぎ、スーツ姿で、赤坂にあるとあるホテルの、ティーラウンジのソファにもたれていた。

不意に、ポケットの携帯電話が電子音を発した。郷原は携帯電話を掴み出すと、ディスプレイを見た。田代からのメールだった。頼まれた通りの伝言を、北山あかりに告げたとあった。

「……………」

これでいい、これで——。あれは、ただの夢だ——。

(郷原さん、また、逢えるよね——)

ベッドにそっとあかりを入れてやったとき、耳元で囁かれた言葉が、まだ鼓膜に鮮明に焼き付いていた。

ふと、たくさんの花束を抱えた、幸せそうなカップルと、しきりに周囲に挨拶をする、初老の男女4人が見えた。おそらく、結婚披露宴をこのホテルで挙げた新郎新婦と、その親たちなのだろう。それぞれに晴れがましい礼装をして、幸せに赤潮した頬と、希望に燃える目をしている。

郷原は、連中が視界に入らないよう目を伏せた。ああいう連中を見ると、頼むから近寄るなと思ってしまう。強烈な光は、郷原の闇を色濃くさせる。だから晴れがましい人間は嫌いだった

。

[妬ましいのか？]

心の中で、何者かの声がする。緊張感が高まると、いつも聞こえてくる、もう一人の自分の声——。

(まさか——。家庭など、獄に繋がれるのと同じことだ。俺にとってはな。ただ、姉ちゃんには、あんな晴れがましいことが一つくらいあっても良かったのになと、そう思う……。母親にさえ見捨てられて、学校での楽しい思い出も、就職したことも、結婚したこともないまま、不治の病で死ぬしかない姉ちゃんの人生は、いったい何だった——？ 何のために深雪は、この世に生ま

れてきた——?)

[探してやればいいじゃないか。母親をお前が——。姉のために探してやったらどうだ。お前たち姉弟を捨てた、あの惨めで、貧乏で、学もない、男狂いの母親を……。男に媚びを売り、薄汚い水商売で喰うしかできない、北山あかりにそっくりな母親を——]

(うるさい——)

[恐いんだろ。自分が母親に会うのが、恐いんだろ郷原……。だから、自分を捨てたあのときの母親に、境遇のそっくりな北山あかりと、一緒にいるのが恐かったんだ、そうなんだろ、クク!!]

(うるさい、うるさい、うるさい!!! 黙れ———!!!)

郷原が、唇を強く噛んで、自分の頭の中にこだまする声を振り払った瞬間、不意に、人影が背後で揺らめいた。

「待たせたな、郷原」

その声に、物思いに沈んでいた郷原の意識が呼び戻され、体が、一気に緊張を帯びた。

「あ……。お久しぶりです、組長……。お世話になっています」

郷原はすぐに立ち上がると、目の前の初老の男に、深々と頭を下げた。

「活躍のほどは、川嶋からも聞いている。いずれお前にも、若い衆を任せねえとならねえな、郷原」

そういって、どっかりとソファに座り込む初老の男。初老とはいっても、まだ中年で通りそうなほど、肌の色艶の良い男である。背筋もまっすぐに伸びて、品の良いハイネックのセーターを身につけ、物腰は温厚そうな紳士、といった風体だ。

しかし、この男の正体——。それは、広域指定暴力団、関東報勝会傘下の一大組織、寺本組組長、寺本蔵である。

寺本は、他に二人の男を伴っていた。一人は、40代半ばの、頬の落ち窪んだ、リーゼント頭の目つきのギラついた男。デスティニー店長の城乃内貴章だ。

もう一人は、かなりいい年の老人だった。髪はつるつるに禿げ上がり、脂の光沢が浮かんでいる。額や頬には深い皺と、老人性紫斑がまばらに刻まれ、緩い頬が無様に垂れ下がっているが、まだまだ女でも欲しがりそうなバイタリティを感じさせる男である。しかしその目は、深い憂いと絶望を湛えて、落ち窪んでいた。

「寺本組長——、まさか、お一人でここへ？」

「いいや、私がお連れした。心配ない」

40を少し過ぎたくらいの、骸骨のような風体の城乃内が、郷原を見下したような声で言った。

「そうですか。城乃内さんにお手間を取らせて、申し訳ありませんでした。本来ならばこの件に関しては、私か川嶋が、組長を迎えに出なければならぬものを……」

「まあ、今日は堅いことを言うな。志垣会長のたつての願いを、俺も見届けないわけには行かないだろう。みんな私人として、プライベートでここへ来ている。お前も気を使わなくていい。志垣会長の願いを、じっくり聞いてやってくれ」

「は、はあ……」

郷原は、志垣という老人に目をやった。志垣老人は懐から太い葉巻を取り出す。立ち上がって火をつけようとする郷原を、城乃内が静止した。位置関係上、老人と角を挟んでいる城乃内のほうが手が近いのだ。それを見て郷原は、口の中で小さく舌打ちすると、差し出しかけていたライターを納めて、本題を切り出した。

「志垣会長たつての願い、というのは、やはり、例の賭博のことですね」

志垣会長と呼ばれる老人――。本名、志垣智成。齢は当年にとって82歳だ。葉巻の重厚な煙を、年寄りにしては艶のある唇から吐き出して、ようやく日本政財界の闇のフィクサーと言われる男は、口を開いた。

「そうなんです、郷原さん。あなたは神を現せる、天才占い師だとか……。城乃内さんのところの地下クラブに遊びに行けば、あなたの奇跡の技を見られると、そう、寺本さんから聞きましてね。ぜひ、私を助けていただきたいのです……」

「会長を、助ける？ この私が？ 私はただのペテン師ですよ？ 占星術などという、ふざけたまやかashiで、人を欺きつづける詐欺師です。まさか、その詐欺師が、会長をお助けするなど……」

「フフ……。いいすな。自らをペテン師だと言い切る……。そういうご仁は嫌いではない。ますます、あなたに勝負を申し込みたくなってきた……」

志垣老人は、また煙を吐き出して、自分の心情を吐露していった。

志垣老人の、深刻で、独特な悩みというのは、こういった内容である。志垣智成は長年、信仰に生きてきた人間だ。修験道を学び、大日如来を本尊とあがめ、宗教を日々実践して生きてきた。その宗教的カリスマで人を動かし、いつの間にか全国に信徒を200万人も抱える、一大宗教団体の長となった男だ。

ビジネスのほうでも、運輸業、通信業を商いし、全国と海外に支店、出張所を1200も抱え、子会社や系列などグループ企業を40社従えた一大コンツェルンを構築している。その個人資産は1000億を越えるとも噂されていて、この国の政財界におけるフィクサーの一人であることは、間違いない男であった。

しかし、志垣をここまでの大金持ちにさせたのは、皮肉なことに信仰心だったのだ。志垣は、神や仏に会いたくて会いたくて、さまざまなことを試みてきた人生である。あるときは、野山に籠って千日行と言われる過酷な修行をしたり、またあるときは性的な秘儀を試したりなど、さまざまなことをやってきた。

ところが神の声も、仏の声も、志垣にはまるで聞こえなかったのだ。次第に苛立った志垣は、ならば悪に染まれば、きっと自分に仏罰を当ててくださるに違いないと考えて、さんざ薄汚い仕事を請け負ってきた。時には殺しですら引き受けたという噂まであるほどだ。まさに、神秘に執りつかれ、見えないものに溺れた狂人なのである。皮肉なことにその神仏への執着が、志垣の個人資産を1000億円にまで押し上げたのだ。

「しかし郷原さん……。私は、1000億円すべて払っても、どうしても神の神秘に触れたいのです。こんなに求道してきたのに、とうとう私は、神を体感することが出来なかった。妙玄なる霊界が、もしかしたら存在しないかも知れない、そう考えると私は……。私の今まで歩んで来た

道は……。息を引き取ったら真っ暗な世界、自分が消滅する世界など、あってはならないのです。それだけが、どうしても恐ろしい……。恐ろしい……！！」

志垣の肩も、唇も、微かに震えていた。

(死してなお、不滅を願うだと……？ どこまで欲が果てしないんだ。究極の生存欲だな……。ある意味、無性に醜い……)

郷原は、精一杯柔和な顔を浮かべて、志垣の言葉を聞いていた。

「そんなとき、郷原さんの噂を聞きました。郷原さんの、命がけの占いゲームのことを――。あなたが死に怯えるその瞬間、未来を現すという神の言葉……。それをぜひ体感してみたいっ……！！ そのためならばこの志垣、いくらでもお支払いいたします。ねえ、寺本さん、こ、この通り……！ 私にどうか、神や霊界や、目に見えない神秘を、信じさせて欲しいのです……！」

(いくらでもお支払いいたします――??)

その言葉が、胸の中にリフレインして、寺本蔵と、城乃内の瞳には、まだまだ死が遠い者特有の、やましい光が浮かんでいた。

寺本蔵が、静かに紫煙を吐き出しながら、郷原に言った。

「まあ、この通り志垣会長が直々に、頭を下げているんだ。どうだ一つ、勝負してやってはもらえんだろうか、なあ？郷原よ」

「一つだけ、会長にお聞きしたいことがあります」

「なんだね？ 郷原さん……」

「会長と私が勝負して、私が勝てば、会長は神を信じられるのですか？ それとも、私が負けたときに信じるのですか？それをぜひ、お教え願いたいですね……」

志垣は、視線を斜め前へ投げると、口元に手を当てて、しばし考えた。確かにとても素直な質問である。郷原が勝てば信じるのか、負ければ信じるのか。ここを明確にしなければ話が進まない。

「ふ、ふふふ……。確かに……。ちなみに、どんな勝負を私としてくださるので？それをまず聞いてから、今の郷原さんの質問に、答えようじゃありませんか」

城乃内が、話の流れで、ブリーフケースから封筒を取り出した。

「志垣会長は、ウチの店へ遊びにいらっしゃるのは、今回が初めてですか？」

「ええ。そうですね。この通りの年寄りですから、クラブなどという、10代の若者が行くような場所はちょっと……」

「フ……。それはご心配なく。ウチの店は、表向きは子どものクラブですが、その下にはちゃんと、アダルトが遊べる場所があるんです。郷原との勝負はそこで……。ただし、入会金を別途、頂く決まりになっておりまして。まずはご入会手続きをお願いします」

そういうと城乃内は、ペンと簡単な書類を、志垣老人の前に差し出した。城乃内貴章は、郷原と同じく寺本組の中では、川嶋貢の一派に属している。そしてその川嶋から援助を受けて、六本木で「デスティニー」というクラブを経営しているのだった。

そのデスティニーの地下には、踊り戯れるガキどもやホスト、外国人などを寄せ付けない、薄暗いホールが広がっていて、ガキどもはそこを「裏デス」と呼ぶ。裏のデスティニーという意

味だ。

「裏デス」の入会金は1年間有効で、ひと口100万円。そのうえ入会希望者はいろいろと、城乃内たちの審査を受ける。年収は最低1500万円以上、それに加えて、秘密を守れる者かどうか。

入り口を入るとすぐ、煤けたビリヤード台と、小さなバーカウンター、ルーレット台などが置かれていた。そこでは高レートブラックジャックやバカラなどの他にも、興奮剤を注入した犬猫の殺し合い、ゴキブリレースなどが行われていて、普段の営業はどちらかというそれがメインである。

その奥には、ロープの張られたリングのような、安っぽい造りの舞台が一つ。このコーナーは「裏デス」が月に一度、イベントを行うための舞台である。

プロレスラーや、元ボクサーなどを集めて、デスマッチ賭博をしたり、売れなくなった歌手やモデルに辱めを受けさせたりなど、嘲りと悪趣味が支配する、墮落のジャングルだ。そこで行われる数々の勝負の行方を、郷原が占って、客たちと賭けをするようになったのが、占い賭博の始まりであった。

城乃内は、封筒からさらに、2枚の写真を取り出すと、裏デスの会員規約書に老眼鏡で眼を通して志垣老人に差し出した。

「今月のうちのイベントは、このカードです」

志垣は、会員規約書にサインをしてテーブルに置くと、かわりに、その写真を手に取って眺めた。

「この男……、どこかで見た覚えがあります……」

「志垣会長をご存知ならば、話は早い。そう、この男は、元・東洋太平洋ミドル級チャンピオン、橋爪功治です。こちらの男は、原口信夫。しがない新聞配達員で、万引き常習犯……。親を刺し殺した罪で、この間まで少年院に行っていました。スポーツ経験はごくわずかの、ド素人……」

「まさか、この二人を戦わせるとでも……？」

志垣が、城乃内の目を見張った。

「ええ。今度は、この二人が戦います。しかも、どちらかが戦闘不能になるまで闘う、デスマッチです。運悪く死んだとしても、そこはそれ、世間から野良犬が一匹消えるだけのこと……。フフ……。普通に考えれば、原口に勝ち目はないでしょう。橋爪は、傷害事件を起こして、この間まで服役していたとはいえ、腐っても元パシフィックチャンプですからね。しかし、今度の勝負では、きちんと原口にハンデを与えるのです。ですから、原口が橋爪に勝てる可能性は、ゼロではありません」

「どういったハンデを……？」

「簡単です。原口は、獲物を使っても良いというハンデです」

「獲物？」

「ええ。ドスを持たせてね。橋爪はそのことを了解し、それを誓約書にしてあります。もし原口に刺されて重傷を負っても、文句は言わないとね。原口とも同様の誓約書が取り付けてありま

して、この誓約書は同時に、請求書になっております。勝利者は、この誓約書の半券と賞金を引き替えることになっている。負けた場合、カネは一切支払われない。勝ち負けに関係なく出演料を払うことにすると、駆け引きや、真剣味が薄れて、スリリングな勝負になりませんからね。次のイベントは、こういった内容になっています」

「しかし、どう考えても、原口に勝ち目は無さそうに見える試合ですが……。いくらドスを持たせるとはいえ、チャンプの間合い、フットワーク、パンチのスピード、どれを取っても素人が勝てるはずありません」

「それが意外と、そうでもないんですよ会長。いくら橋爪とはいえ、相手は刃物だ。侮ることは危険……。ほんの少しでも間合いを誤れば、むしろたやすく重傷を負いかねないのは、橋爪のほうです。しかも、素人はときどき、プロには信じられないような切り込み方をしてくる。思いがけない逆転劇が起るのが、ハンデ戦の面白いところ。競馬だって、斤量が同じの別定戦より、ウェイトの違うハンデ戦のほうが、万馬券が出やすいでしょう？うちのお客さんたちは、そういう、荒れる勝負が大好きですから」

「では、郷原さんが私のために、刃物を持った原口が勝つか、それとも拳のみの橋爪が勝つかを予想して、結果を見せてくれると、そういうことですか？」

「まあ、そういう楽しみ方でも、いいんでしょうが、今回はそれに関して、郷原から提案があるということで。おい郷原、志垣会長にご説明して差し上げろ」

城乃内は横柄な素振りで、郷原に顎をしゃくった。城乃内はどうも、郷原と川嶋の間柄が、ヤクザに置ける上下関係を超えて、濃密な愛憎を伴った仲であるのが気に入らないようである。

郷原は、そんな城乃内を胸の中で嘲ると、ディオールのスーツの胸ポケットから、2枚の写真を取り出した。

「提案というのは、これです、会長……。せっかくの会長の展覧試合、もっと面白くしてやれないかと、私の兄貴分の川嶋が、こんな男を連れてきてましてね」

「……………」

志垣は2枚の写真を手に取った。遠近感を調節し、眼を細める。

「……とくに知らない連中ですね……。誰なんです？ この二人は」

「中年男のほうは、池田史郎といいます。この男は、志垣会長もよくご存知のある国会議員と、実に仲良しでしてね。その国会議員のために、いろいろとヤバい犯罪に手を染めてきた男です。もう一人の若いほうの男は、山本亮一……。産婦人科医ですが、もうこれが、甘ちゃん丸出し。カモられるために生まれてきたような男ですよ。フフ……。しかし、善人特有の不思議な、なんともいえないまっすぐさを持っている男です」

「ふむ……」

「さきほどの、橋爪対原口の試合を、この二人にセコンドさせます」

郷原は、顔色ひとつ変えずに志垣に告げた。志垣は、驚きで見る間に口をぽかんと開けると、郷原の顔をまじまじと見る。

「原口は凶器を、セコンドの指示がない限り使えない……。橋爪も、セコンドの指示がない限り原口を殴打出来ない……。すべてセコンドの言う通りに闘う……。そういうルールにしたら、もっともっと楽しいんじゃないでしょうか」

「な、なんと……！ それは面白そうだ……！」

「悪魔の所業に手を染めてきた池田ならば、カネのためには相手を殺せと、凶器を使えと遠慮なく采配するでしょうし、山本は山本で良識人ですから、平和的かつフェアな手段を選手に要求する……。私と会長は、この山本と池田の、天使と悪魔の人間性を賭けた戦いこそを、勝負とするのがふさわしいだろうとね。ククク……」

志垣の瞳に、生き生きとした生命力が蘇る。唇は唾液に潤い、頬は4、5年若返ったのではと思えるように、色艶が良くなった。好奇心で、その顔は明るく輝いている。

「そ、それは素晴らしい――。か、神を試す――！！ 悪魔のような池田の心と、ほ、仏のような山本が、神の神秘を試す――。わ、わはは。それはいい！！ ぜひ、そうしましょう郷原さん！！ ああ！ 久しぶりに勃起しそうだ……、考えただけで……！ ウフフ……！」

「では会長……。私が見事この試合、どんな結末を迎えるのか、この二人のどちらが勝つのかを言い当てる事が出来たら、神を信じて、安心して死ぬ事が出来ますか？」

「そうだな……。郷原さん……。あなたは現時点で、どちらが勝つと思うかね？」

「それはわかりません。この勝負はひとえに、山本がキーだと思います。そこを占いで、神様に見通させてもらうには、私も命を曝け出さないとね。死にギリギリ近づいた精神状態でないと、占いの女神は、未来を垣間見せてはくれないのです。星を透かして見える未来をね……」

妙に和いだ優しい顔をして、郷原は、小鳥のように首をかしげてみせた。郷原の皮膚は、男にしておくのが惜しいほど白く、透き通っていた。その肌は気温の変化に敏感で、毛細血管がすぐに拡張し、あちこちを桃色に染める。郷原は、こうしてみると童顔なのだ。野暮な眼鏡をかけて、粗忽な話し方をするのは、それを隠そうとしているためかと志垣は思った。

志垣は、宗教団体の中で生きてきて、禁欲生活をしていたせいかわ、男を抱きたがる趣味がある。もしも郷原を膝に乗せたら、どんな風にこの白い肌が色づくのだろうか、と志垣は今、夢想していた。

「ああ……。その勝負、ぜひこの眼で見たい……。いいでしょう郷原さん……。あなたの占いの力、未来を見通す神秘の技を見るためならば、この志垣、いくらでも……。いったい、あなたが勝ったら、私はいくらお支払いすればよろしいので……？」

「そうですね。3億、ではどうですか会長」

「な……、なん……、ですと……？！」

余裕たっぷりだった志垣の顔色が、郷原の提示した金額に、にわかにな変わった。

「おい、ご、郷原っ！！」

啞然とした顔をする志垣を伺って、寺本巖が郷原を見た。

「いくらでもいいとおっしゃったじゃありませんか。それとも、そのお言葉はウソですか？ 神の神秘が見られるなら、いくらでも払うと言った言葉は……」

志垣は、ほんの少し面食らったような顔をしていたが、やがて、懐から太い葉巻を取り出して、自分で穂先に火を付けると、ひと口吹かして笑い出した。

「フ、フフフ……。いいでしょう、3億……。郷原さんが見事、占いでこの志垣を唸らせたなら、3億、お支払いします。しかしもしあなたが敗れたら？ あなたの占いが外れたら？ そのとき

はあなた、私にどんな代償を払ってくださるので？ 私はカネなら要りません。この通り、カネなど腐るほど持っていますからね。そんな私にあなた、何を払うのです、フッフ……」

立ち上る葉巻の煙が、まるで志垣の欲望のように、郷原の体にまとわりついてくる。郷原は、顔色ひとつ変えない、氷の水面のような静けさのまま、志垣に言った。

「では、占い師という珍しいペットをプレゼントする、というのは、いかがですか。もし占いを外したら、そのときは、会長にこの身を捧げましょう。会長のペットとして、会長が息を引き取るまで、私をお好みに……。会長のお慰みにするもよし、汚い仕事をさせるのもよし……。私は、何でもやりますよ会長……」

「フ、ふ、フッフ！！ その言葉、確かに！ 確かに聞きましたぞ、郷原さん……！ ああ、私は今、最高に胸が震えています。あなたが勝てば、私は神の神秘をこの手に握り、心安らかにあの世へ旅立てる。あなたが負けたら、あなたを毎夜この腕に……。ああ、なんて素敵な勝負なんでしょう、うふ、うふふふ！！」

「ううっ……！！」

寺本巖と、城乃内貴章は、狂っているとしか思えない志垣と、郷原の約束に、身震いするようなおぞましさを感じていた。

寺本は、目を白黒させると、冷めたブルーマウンテンを、一息に飲み干す。城乃内も、あまりの狂った二人に身震いして、タバコを啜えた。とにかく約束の内容はこれで固まった。あとは、いよいよ調印式である。場所をホテルの部屋へと移してから、寺本組組長・寺本巖が見守る中、ひっそりとそれは執り行われた。賭けの内容を整理して、城乃内が証文にしたためてゆく。

3、

賭博の取り決めの書類は、以下の通りであった。

誓約書

1、志垣智成（以下 甲）は、来る12月25日 港区六本木1-〇〇-xxにて行われる 橋爪功治 対 原口信夫のボクシングハンデ戦において、郷原悟（以下 乙）にその予想を依頼したことを認める。

2、甲は、乙が予想した結果が、第三者の検証を踏まえて十分に的中していると認められた場合、乙に 金 ￥300,000,000- を支払うものとする。その場合、乙が指定する期日までに、乙が現金に出来る方法にてこれを支払うものとする。

3、乙は、来る12月25日 港区六本木1-〇〇-xxにて行われる 橋爪功治 対 原口信夫のボクシングハンデ戦において、甲にその予想を依頼されたことを認める。

4、乙は、乙が予想した結果が、第三者の検証を踏まえ、かつ甲本人が的中していないと感じた場合、すみやかに戸籍を甲が指定するものに移し、甲の存命中は甲の指定する場所に起居するものとする。

以上、相異なることをここに誓う

甲) ㊦

住所
氏名

印

乙) 千
住所
氏名

印

見届け人は、この契約内容が履行されることを保障するものとする。

見届人) 千
住所
氏名

印

見届人) 千
住所
氏名

印

このような紙が、4人の目の前に置かれた。

しかもそれは、きちんと5枚複写になっていて、ペン跡がすべてに転写される本格的な契約書であった。

もちろん、賭博自体が非合法であり、立派な犯罪だ。だからこれを公証人役場で承認してもらうということはできない。しかし、もしこの契約を破れば、それは、構成員・準構成員を含めて数百人はいる寺本組と、その上部組織である関東報勝会の構成員1万2千人を敵に回すことになる。この契約書は、そういった恐ろしいヤクザの組織力を証明するものなのだ。

城乃内は、契約書の中身に誤字脱字や、誤った表現がないか何度も確認し、それを志垣、郷原、寺本にも確認してもらった。

寺本蔵はおもむろに、持っていたセカンドバッグから、白布に包んだ小さな五徳ナイフを取り出すと、それを城乃内に手渡した。城乃内は丁重に受け取って、布を解くと、ターボ式ライターで刃をよく炙り、オキシドールをガーゼに染み込ませて丁寧に拭いた。これは、傷口に雑菌が入らないための下処理である。

それをまず、郷原に差し出す。郷原はあっさり自分の左手の親指に刃を突き立てると、ポタ

ポタと血が滴るそれをそのまま、賭博の取り決めの証文に押しつけた。

血判だ。

志垣はその様子に躊躇していた。石のように硬直したままだった。志垣の、どうしようもない生、絶対的な自己存在への執着が、己の体を傷つけることをためらわせていた。城乃内が、切っ先についた郷原の血を拭い、同じようにターボライターで刃を焼いて、オキシドール消毒をしている間、じっと硬直していた。それでもナイフを渡されると、周囲の視線を窺ってから、何度も呼吸を整えて、おもむろに親指に傷をつけた。

しかし、深さが足りなくて、すぐに血が乾いてしまった。

「こ、困りましたな、これは……。あいや……。な、なんとか、絞り出ればいいのですが……」

そういつて、一生懸命親指を擦り、血をしごき出して、どうにかすべてに血判を押す志垣である。あとの問題は、郷原悟が、どのタイミングで、占い予想をするかということであるが、それについては寺本蔵が、郷原を見据えながら言った。

「さて。これでもう、賭けを実行するだけになったな。もう会長も、お前も逃げることはできない。明日の夜9時から、デスティニーの特設リングでデスマッチボクシングが行われるわけだが、その直前の7時に、郷原にはこのホテルのスイートルームで、占い予想を披露してもらおう。そのあと、ホテルの部屋の中で、全員で占い結果を見届ける。郷原や占い結果を知った者が、選手たちにアドバイスとか、サインなどを送らぬよう、ホテルの部屋にモニターを繋いで観戦する。今日はまあ、本番前夜だ。ゆっくり休め郷原。部屋はこの上に取ってある」

そういつて、郷原の左肩を、ポンと叩く寺本だった。

「っ……………！！」

苦痛に思わず顔を歪める郷原。組長は、郷原が撃たれたことを知らないのだ。

「……？ どうしたよ郷原」

「いえ、なんでも……。まあ、明日はせいぜい、頑張ります」

郷原は、痛みをかみ殺して立ち上がると、ホテルを出る寺本蔵と、志垣智成、そして二人のボディガード役城乃内の後ろについて、ホテルの車寄せまで見送った。志垣は、ひとクセもふたクセもありそうなSPたちに囲まれて、迎えのロールスロイスに乗り込むと、嬉しそうに去ってゆく。明日また志垣はこのホテルの、スイートルームへとやってくるはずだ。醜い、蛆虫のような目をして――。

やがて、黒い礼服と、白い手袋を嵌めた運転手が、リムジンを寺本と城乃内の前に寄せてきた。

「では、明日は頼んだぞ郷原」

「はい。組長のお顔に泥を塗ることにならないよう、当てますよせいぜい……。絶対にね」

「フフフ。その言葉確かに聞いた。ではな。今日はゆっくり休め」

寺本は、リムジンの窓からそう言うと、そのまま日が暮れ始めたビル街の車道へと、消えていった。車の陰が見えなくなってから、なんとなく、左手の親指を見る郷原である。

「深く切り過ぎたな、ちょっと」

そういつて、右手で不自由な左手を支えたと、親指を舐めた。あかりの顔が胸にちらついて、昨夜のことを思い出していた。あんな風に、打ち解けておしゃべりして、温かい空気で包んでく

れた女を、郷原は、母親と姉と、川嶋の愛人久子以外に知らない。

女にはいつも嫌われて、恐がられていた。酌婦でさえ、苛ついた郷原をじゃけんにして、追い出そうとする。もうあかりのいない、冷たいホテルのベッドに、戻りたくなかった。

(どこへ行こう……)

しばし考えて郷原は、なんとなく、ムルシエラゴを停めてある駐車場に戻った。ムルシエラゴは、主人の命令を待ちかねたように、身を潜めて、郷原が運転席に乗り込むのを待っていた。

シートにもたれ、イグニッション・キーを回す。野獣の心臓が、一気に吹き上がり温まる。

[フフフ……。哀れだな、郷原……。帰る場所もないとは……]

(またお前か――。放っておいてくれよもう――)

いつもの、頭の中の誰かだ。

[そうは行かない――。俺はお前だからな――。分かれることなど出来ないのさ、ククク……]

頭の中の、もう一人の自分が疎ましくて郷原は、アクセルを踏み込んだ。郷原の忠実な僕は、激しく心臓を爆発させて、すぐに圧倒的な排気を産み出し、頭のを吹き飛ばした。

ほとんど無意識に、高速道路のランプを入ると、首都高をぐるぐる回る。暮れてしまった空の色と、遠くに揺れるそれぞれの家庭の明かりが、胸を不安にさせて、郷原はなんとなく、急にステアリングを中野へと向けた。

一般道に戻り、中野通りへ――。そして、静かな路地裏のコインパーキングにムルシエラゴを駐車すると、その目の前に見える木造2階立ての、薄汚いトタン壁のボロアパートに向かった。

1、

「なあ父ちゃん、腹へった。なんか作ってよ。もう6時過ぎだぜ？」

宿題をしていた直人がそう言うと、折りたたんだ座布団に肘を突いて寝転がり、テレビを眺めていた田代は、壁掛け時計を見た。

「あーホントだ。こんな時間か。そろそろメシ作らねえとな」

そう言って、田代は身を起こすと、台所のほうへと向かった。

台所といっても間続きで、3畳ほどのスペースしかない。台所のすぐ左側が玄関である。その玄関の少し引っ込んだところに、少人数用の2ドア冷蔵庫があって、田代はそこを覗き込もうとしたのだが、そのとき、ドアに嵌められている擦りガラスの向こうに、人影があるのが見えて、同時にノックの音がした。

「んあ〜、新聞の勧誘？ それなら間に合ってるよ、同業者だし」

面倒くさそうに田代がドアを開けると、そこには思いがけず郷原悟が立っていた。

「よお」

「ご、郷ちゃん……！！ どうしたの？！ 腕、大丈夫なのか？ し、心配してたんだよ！！ 俺！！」

「あー……、おっちゃんに迷惑かけちゃったな……。まあ、挨拶だけでもってよ……」

珍しい声に、直人が奥から、飛び出してきた。

「あー！ 郷原だっ！！」

「よお。元気か直人。今日はクリスマスイブだ。おごってやるから寿司でもピザでもケーキでも、なんでも好きなだけ頼め。あとホラ、小遣いもやるぞ」

「だっ……！ ダメだよ郷ちゃん！」

郷原の大盤振る舞い癖に、田代が台所から飛んできた。

「まあ、いいからいいから。いいじゃねえか小遣いぐらい。俺は自分の子どもも、親戚もいないから、直人ぐらいしかくれてやれる子どももいないんだ。させてくれよおっちゃん、そのぐらい……」

「あー、そう……？ んじゃあ、お言葉に甘えるかあ。まあ、今回は大変だったからなあ、郷ちゃんを探すの」

父親の許可が降りたので、小遣いの1万円札を貰い、嬉しそうに、チラシを見ながら電話器を取る直人だった。

「んで、傷の具合はどうなんだ、郷ちゃん……。まだ3日経ってないだろ？ 撃たれたの……。大丈夫なのかい？」

「まあ、どうにか。熱も下がったし、山本の施術が上手かったんだろ、たぶん……。お陰でまあ、手もなんとか感覚はあるよ。握ったりすると、痛てえけどな、まだ」

それを聞いて、ホッとした笑顔を浮かべる田代だった。

「良かったよお〜。手が使えないとほんと、大変だからなあ……」

ハロゲンヒーターが、田代の後ろで首を振っている。郷原は部屋を見回した。

「ふーん……。男所帯のわりには、キレイに暮らしてんじゃん……。お婆ちゃん、まだ退院しねえのか？おっちゃん」

「あ、それがさ、明日には戻ってくるんだよ。おかげさまで膝の手術が上手く行って、人工関節つつうの？それ取り付けてもらってさ。リハビリしたら前よりぜんぜん歩けるようになっちまって、本人大張り切り。今から、正月はおせちを作るなんて言っちゃって、なかなか死にそうにないよ」

（おせちかー。すごく久しぶりに聞いた。その言葉ー。もしかしたら、手作りのそんな料理なんて俺、久子ママのところで1、2度、食べたっきりかもなー）

「お婆ちゃん、明日、昼には帰ってくるんだよ」

直人が、嬉しそうに教えてくれた。

畳の部屋に小さいテレビ。小さいちゃぶ台、柱時計、押し入れ、小さな台所ー。なんだか、無性に懐かしいー。

「どうしたんだよー、郷原……」

直人が、郷原の顔を覗き込んでいた。

「ああ、いや、なんでもねえ……。そういや、ずいぶんゲームソフトがあるな。最近のゲームってどんなのなんだあ？」

テレビ台の下にあるゲームソフトを、郷原は勝手に覗き込んだ。

「お、麻雀ゲームがあるじゃん……。これ、お前の？」

「違うよ。父ちゃんが買ってきたんだよ」

「まあな……。あの事件以来、カネが苦しくてよお〜。生活費を稼ごうと、雀荘に入り浸ってたからな。まあ、その練習用にというか」

バツが悪そうに笑う田代だった。やがて出前がやってきて、3人でそれを突っつきながら、直人の進学の話とか、ガールフレンドが出来た話、今日あった有馬記念の話などを、田代親子は、郷原に楽しく聞かせてくれた。

それはたぶん、郷原を歓迎しようという気持ちもあるだろうけれど、ずっと入院していたお婆ちゃんが、元気になって帰ってくる嬉しさが、むしろそうさせているんだなとわかった。

「……………」

郷原は、二人の様子を微笑んで眺めていた。そして、急にいたたまれなくなった。

「ところで俺さ、直人にメシ、オゴりに来ただけなんだ。そろそろ帰るよ」

そう言って郷原は、立ち上がろうとする。

「なんだよ郷ちゃん……。もう帰るのかい？ せっかくなんだから、今から一緒に飲もうぜ？ こんな狭いとこだけど、酔いつぶれたら寝てっていいからさ。な？」

「あ、いや、気まぐれで来ただけだからよ……。邪魔したな」

そう言って、コートを、痛まない右手で掴んで立ち上がると、すぐに玄関のほうへ向かった。

「郷原あ〜……。もう帰っちゃうの……？」

違和感に気づき、郷原を気遣って、玄関まで追いかけてくる直人だった。その直人を振り向かずに、郷原はつま先を靴に突っ込む。

「ご、郷ちゃん……！！」

靴を履きかけている郷原の背中に、田代が大きな声を出した。

「う、占い賭博なんだろ？明日……。今度は郷ちゃん、何を賭けたんだ……」

左足の靴を履き、今度は右足の靴に足先を突っ込みながら、郷原は言った。

「自分の人生……。負けたら、変態ジジィのペットになる約束。ジジィが死ぬまで」

「う……………」

靴を履き終わると、郷原はコートに袖を通す。左腕が痛いから、ゆっくりでないと、コートが着れない。

「そうだおっちゃん、あれ、返してよ……」

「あれ……？」

「そうだよ。ベレッタ。おっちゃんが持ってるんだろ？ どうせ……」

「う、うう……、そ、それは……」

「あんなもの、子どもに見せられるかよ……。俺、直人には本当に、素直な大人になって欲しいんだ。直人に見られたくねえよあんなの……。だから、返してくれよ」

うつむいたまま、郷原は言う。その全身が、隅々まで張りつめた決意を漂わせている。抗うことはできないほど、毅然としていた。

「う……、ううっ……っ……！」

田代は、泣きそうな眼をして、冷蔵庫を開けると、スーパーのビニールに包んでおいた郷原のお守り、ベレッタM91を、震える手で、手渡すしかなかった。

「なあ……。一緒に商売しようよ、郷ちゃん……」

搾り出すような声で、田代は呟く。

「あ～……??」

「郷ちゃんほどいろいろ出来て、頭のいい人だったら、絶対上手くできるよ！ もうこんなことやめてさ、占いなんかやめて、一緒に探偵屋でも、ラーメン屋でも、エロビデオ屋でもなんでも！ 郷ちゃんが社長になってくれたら俺、一生懸命働くよ……、だから……」

言いかけた田代の言葉を振り切るように、郷原は、満面の笑顔を見せた。

「まあ、心配すんなおっちゃん。俺は、おっちゃんを占い賭博でぎゃふんと言わせた男だぜ？ その天才占い師の郷原様が、負けるわけねえだろ？ ちゃんとう爺さんからカネぶん取って、おっちゃんに分配してやるよ。期待して待っててくれ」

「そ、そんなんじゃねえよ郷ちゃん……！！ そんなんじゃ！！」

立ち去ろうとする郷原に、田代はさらに必死な声を出していた。

「郷ちゃん……。あかりって子、心配していたよ……。おカネは返しに行くと……。また会いたいと伝えてくれって……。落ち着いたら一緒に飲みに行きたいって、そう言った。なあ……！」

郷原は、田代に背中を向けたまま、ドアのノブを掴んだ。

「まあ、とにかく良いお年を。直人も、元気でな……」

「郷ちゃん……」

「郷原あ……」

立ち尽くす田代と、直人をそのままにして、郷原は田代家を後にした。アパートの鉄板の階段を、カンカン音をさせて降りてから、ベレッタ・M91を、コートの内ポケットにしまう。

ベレッタ・M91――。これが俺のお守り――。

これが手元にないと、占いを立てることが出来ないのだ。この拳銃が、いつでも自分の人生を終わりにさせてくれると思うと、安心して、無茶な勝負に臨める郷原だった。

(心配かけて済まねえなおっちゃん。でも、これは俺の最後の砦……。明日もし、占いを外したら、そのときはこれで一発、こめかみをブチ抜くだけだ――)

また、あかりの顔が胸を横切る。郷原は、北山あかりと別れてよかったと思った。たぶん、あのまま一緒に居たら、悲鳴を上げ続けている自分の心が怒涛のように、北山あかりを飲み込んで、めちゃくちゃに彼女を傷つけていたかも知れない。

だから、やっぱり別れてよかった。このままずっと、どこまでも孤独がいい……。

ムルシエラゴに乗り込むと、遠回りしながら赤坂のシンフォニーホテルへと帰る。結局ここしか行き場がなかった。

組長が用意した部屋へ戻ると郷原は、熱いシャワーを浴びた。

(そういえば、山本のやつ、今ごろどうしているだろう……)

別れ際、妙に澄んでいたあの笑顔――。やけに気になる……。

バスルームから出ると、バスローブ姿のまま、郷原はパソコンを開いた。今夜は酒は口にしない。占い賭博の前には、郷原は酒に溺れなかった。郷原もまた、志垣に勝つためには冷静でいなければならない。酒を飲んで酔いに身を任せるといえるのでは、クールに状況判断をするなんて無理なのだ。

(そう――。状況判断――。それに尽きる――。あくまでも予想の99.9%は、状況判断と分析力――。星の並びなど、単なる連想の呼び水に過ぎない。ギミックだ)

郷原はパソコンで、山本亮一の生年月日と、池田史郎の生年月日を、もう一度確認した。こうして本番直前に、占いのイメージをあらかじめ固めておくのだ。郷原は運命を決める星だと、かのアレキサンドリアの天文学者トレミーがその著書「テトラビブロス」で歌っている星、サターン(土星)の軌道を、確認してみた。トランジット(経過中の惑星)――。土星は現在、黄経162度37分を逆行中……。

山本の生まれつきのサターンの位置である、黄経122度32分と、角度差は40度とわずかに0.5分――。まさに今こそが、運命のタイミング――。山本にとっての――。乗るか反るか――。

(星は、試している……。山本自身の運を……。状況は厳しい、この星回りでは……)

サターンの角度を、微に入り細に入り、いろいろ分析してみる郷原だったが、次第に、星の角度の中に、違和感を覚え始めていた。

(……………? なんだこれは……………?)

命のゆらめき――。生命力の枯渇――。血――。

そんなキーワードを連想させる組み合わせの角度が、明日1日だけで、数えてみると5箇所も出来ている。

(これは……。これをどう俺は、解釈したらいい……?)

郷原の肌色が、見る間に白く青ざめていった。目を剥いて、ホロスコープに見入る郷原。

(なぜだ!! なぜ山本に、死相が浮かんでいる?! なぜ——)

思わず、腰を浮かす郷原だった。

(どう解釈したらいいんだ、この相を……。なぜ、なぜ山本が死ぬ目に遭う……?! 殺しあうのは橋爪と、原口のはずだろ?!)

前髪を掻き揚げ、焦燥しきったように、郷原はそのまま、パソコンの前で頭をむしった。

(いつもそうだ——。結局、ホロスコープなど見たところで、具体的な結論を出すのは自分の想像力しかない。こんなもの読めたからって、それでなんだってんだっ! クソ喰らえ——!!)

郷原は苛立って、パソコンのマウスをテーブルに叩きつけた。

毎回感じている、占いへの怒りと幻滅。

(欺瞞だ、欺瞞だ、欺瞞だ——!!! こんなもので人の心理や、特徴や、未来が読めるなんて欺瞞だ!!! なんの役にも立たないじゃないか!!!)

よろよると、打ちのめされたようにパソコンの前を離れると、夜景の眺められる部屋の窓辺に立った。

(だめだ……。いつもそうだっ……。! けっきょくいつもわからなくて、ギリギリのところであくように、意味が繋がるんだ……。もっと事前にわからなければ、意味がないっ……。!! どうして今頃、山本の死相に気がつくんだ俺はっ……。! くそっ!!)

ガラス窓を、右の拳で叩く。占いが何の役にも立たないのはけっきょく、その時に明確な質問をしてみて初めて、星だとかカードだとかの意味が見えてくるところである。それは例えば、ガンを疑って検査をするからこそ、ガンを見つけられるようなものなのだ。

不安の芽や、喜びの可能性も何も出ていない平常時に、運・不運を託して占いなどしたところで、何も読めはしない、絶対に——。

そこにこそ、占いは転ばぬ先の杖、開運の羅針盤などと喧伝する占い自体の誤謬性があるのである。

だから郷原が、山本の星を事前に見ていたのに、今日まで山本の死相に気づけなかったのも無理はない。あのとき、スイートルームで初めて山本の星を見たときは、占い賭博自体がどう成立してゆくのか、郷原自身にも掴めていなかった。だからやはり、察知できなくて当然なのだ。

所詮、本当のことは神様にしかわからない——。

(どうしたらいい……。? こんなことで俺は明日、本当に未来を予言することなどできるのか? しかも、わずか数時間先の未来を——。今度こそ、負ける……。? 負けるかも知れない……。? 俺は……)

窓辺から、文机のほうを振り返る。眼が、ただ一点、電源が入ったままのパソコンを見つめている。体がふらふらと、再びそこへ吸い寄せられていった。何かに取り憑かれたみたいに——。

放り投げた天体暦を、もう一度拾い上げる。

[そうだ郷原……。占ってみろよ、明日の自分の運を……。明日、お前が生きるのか死ぬのか、

星に聞いてみる……。ククク！！]

心の奥から、悪魔の囁きが聞こえる――。パソコンに、自分の生年月日を入力しそうになって、郷原はかぶりを振った。

(だめだっ……！！　こんなものに運命など聞いてはダメだっ……！！　運命を聞くともう、自分が振り絞る智恵も、必死の思考も、すべて最初から定められていたことになってしまう……！！　そんな馬鹿げたことになってたまるかっ！！　俺は、俺のすべての能力を振り絞って、命を賭けて未来を考える……！！　考えて、考え抜いてみせる……！！　誰が星になど、自分の未来を委ねるものかっ！！)

まるで忌まわしいものに慌てて蓋をするように、勢いよくパソコンを閉じる郷原だった。酒が飲めないと、どうしていいかわからない。仕方がないからもう一度、夜景の見渡せる窓辺に戻る。

ふと、北山あかりを思い出していた。

(あいつ、今夜はどうしているんだろう……)

窓辺にもたれて、遠い眼をする郷原だったが、しかし甘い感情は今、頭の中から排除する必要があった。そういえば、トレンチコートの内ポケットに、ベレッタ・M91を入れておいたらしい。それを、窓辺まで持ってくる――。

(大丈夫――。負けたらそのときは、これですべてを終わりにさせればいい――。恐れるな……)

ベレッタの銃把に収まっているマガジンを、引き抜いてみた。

(やっぱりな、おっちゃんのやつ……。実弾を全部抜いてある……)

これでは、ただのおもちゃだ。郷原は、セカンドバッグにいつも入れてある9mm弾を、装填しておくことにした。

それから、微熱で少しだるい体をベッドに投げ出すと、胸に拳銃を抱いて目を閉じた。

(山本を助けたい――)

胸の奥から、そんなつぶやきが上がってくる。

(山本を無事に、家族の元へ帰してやりたい――。自分で山本を罠にはめたくせにな、俺……。でもどうやって……?)

あの死相――。ウソであってくれたら、と思う。何かは起る。絶対に起る。そう読めてしまった以上、明日は……。だが、星の言葉は象徴言語だ。単なるイメージとしての死相だから、それで本当に死ぬんだ！と考えるのは早計というものである。

この死相が、文字通りの死を意味するのか、それとも、山本の中の覚悟が深刻に極まって、死を迎えるような心境になっているという意味なのか、あるいは、もうダメだ！　死ぬんだ！　と思うような、ヒヤリとする一瞬があって、それで通り過ぎるようなことなのか、その判断はつかない。

(たぶん、この可能性の糸の束の中で、一番正解に近いのは、この死相が山本の決意を表している、と考えられるところだな……。俺の今までの経験と、直観で、そう解釈するのが一番しっくりと来る……。しっくりと納得が行く推量というのは、だいたいにおいて間違っていないものだ……。だとすると……)

死を覚悟する――。それが山本の戦略――？まさか――。

妙な予感が胸を締め付ける。郷原は、山本のあの、別れ際のすがすがしい笑顔を、思い出していた。

2、

その頃――。

都内某所、人影のほとんどない、コンビニエンスストアの前の一般道路の路肩。

そこに駐車されている一台の黒いボックス車。その最後部の3列目シートに、元・東洋太平洋チャンピオン、橋爪功治との打ち合わせを終えた山本亮一が乗っていた。

山本はこれから、城乃内の部下二人につれられ、城乃内が用意したホテルの部屋へ移送されるのである。

電話をかけるなら、このタイミングしかないな――。

山本はそう思って、先ほどから思案をめぐらせていた。今、運転手役の男はひとりコンビニへ行き、山本を監視する合間に食べるカップ麺や菓子などを買いに行っている。

もう一人はかったるそうに、助手席に持たれてタバコを吹かしていた。それを見て山本は、いきなり声をあげた。

「困ったなあ、なんだかさっきから歯が痛いや」

「あー……？歯が痛いだあ～？」

言われた男は、ふんぞりかえって山本を睨んだ。

「我慢しろよ、歯痛ぐらい」

「無理ですよっ！あいたた……。な、なんだか、だんだん痛みがひどくなってくる……。コンビニって確か、鎮痛薬くらい置いてありましたよね？悪いけど、ちょっと行って買ってきてもらえませんか。いたた……。！おカネはあとで、ホテルに着いたら返しますから」

「……ケツ、しょーがねえな……」

男はそうやって、車の外へ出た。山本の手はすでに、後ろ手に縛られている。ボックス車は通常、3列目のシートにドアがない。3列目から出るには、いったん2列目のシートを倒して、2列目のスライドドアを開けて車外へ出るしかない構造である。縛られた手でそこまでやれはしないだろうから、男は山本ひとりを車内に残して、自分もコンビニへと歩いていった。

この隙に、山本は上体を下げ、フリースのポケットに入れておいた携帯電話をつかみ出すと、不自由な手で器用にダイヤル選択をし、コールボタンを押してから、なんとか首に挟んだ。少ししゃべりにくいけれど、首と顎で挟んで話せば、話せないこともない。

山本がかけたのは、新婚だった妻、奈緒子の実家だった。監視の男たちがいつ、戻ってくるかわからない。早く伝えなければ――。

3回目のコールが鳴り終わるとき、通話状態に入った。

「はい、久保でございますが」

上品な、中年女性の声である。山本はすぐにその声が、義母の声であるとわかった。

「お、義母さん……。お久しぶりです、亮一です……」

「え……？ りよ、亮一さん？！ 亮一さんなの？！ あなた、いったい今どこに……？！」

義母は、驚いた声を上げていた。

「お義母さん、その節は本当に……。事情を説明したいのですが時間がありません。奈緒子さんを……」

山本が言い終わらないうちに、奈緒子が母親から受話器をもぎ取ったようだ。懐かしい声が耳に飛び込んできた。

「りよ、亮ちゃんなのっ……？！ バカっ……！！ どこにいるのよっ……、こんなに心配させてっ……！！」

奈緒子は、涙声だった。奈緒子の叫びには答えずに、山本は急いで話した。

「訳あって説明しているヒマはない……。奈緒子、よく聞いてくれ……。これから僕はきみ宛に、ある手紙を書く」

「手紙……？ 手紙って……」

「中身は、書類だ」

「書類？！ なに、意味がわからないよっ……、亮ちゃん……」

山本は、残酷な頼みに、出産間近の奈緒子を傷つけるのを承知で、唇を噛むと、淡々と用件を伝えていった。

「その書類はこれから、どうにかしてポストへ投函する……。それから、僕の実家のすぐ近くにある古書店、覚えてるか？」

「古書店……？ 清文堂のこと……？」

「ああ。昔から世話になってた清文堂のおじさんに僕は、いろいろと本を預けてあるんだ。その中の医学辞典の真ん中あたりに、僕の生命保険の証書が挟まっている……。それを君が、持っていて欲しい……。もし、このまま僕から連絡が来なかったら、僕の先輩の、大林先生のところへ行って、明日届く手紙の中に入っている書類に、印鑑を押してもらってくれ……。それからすぐに、保険屋へ連絡を……。死亡給付金は2億ほど賭けてある。そのお金で借金の精算をしたら、僕の両親を助けて……。両親の居場所は、手紙の中に一緒に入れておく。生命保険のお金で、せめて僕の両親に、アパートでも借りて、普通の暮らしをさせてやってくれ……。残りはぜんぶ、きみと、僕の子どもに……」

「な、なに言ってるの亮ちゃん！！ バカなこと言わないで！！ お願いっ、今、どこにいるの？！ ねえっ……！！」

奈緒子は、絶叫していた。山本の頬には、ポタポタと伝う、雫――。ジーンズの膝へと、染み込んでゆく――。

「ごめんよ、奈緒子にこんな辛いお願いを、するなんて……。ほ、他に誰も、頼める人がいなくてさ……。だいじょうぶ。僕はきっと勝つ……。勝って奈緒子に会いに行く。生まれる子どもにも、きっと会いに行くよ……。だから待ってて……。でも、電話がなかったらそのときは、僕が送った僕の死亡診断書で、生命保険を……」

「亮ちゃんっ！！ イヤよ亮ちゃん！！ どこにいるか教えてっ！！ イヤよっ――！！！！」

泣き叫ぶ声――。

「おい！ 何してるっ！」

監視の男が、山本が首に携帯電話を挟んでいるのを見つけて、怒鳴った。

「まったく、油断も隙もないな。なにが歯痛だ、笑わせやがってクソ医者……。おい、今夜はつきっきりで見張ったほうが良さそうだ。コイツから絶対に眼を離すなよ」

「へいっ！」

山本は、携帯電話を監視役に取り上げられてしまった。

そして、あとは書類をポストに入れるだけだが、それはなんとかホテルの客室係に頼もうと思った。

上手くこいつらの監視を、かいくぐることができればいいけどな——。山本はそう思って、眼を閉じた。

1、

その翌日、占い賭博当日。

数人の男たちが、赤坂シンフォニーホテルの広々としたロイヤルスイートルームに集まり、なにやら立ち働いていた。

室内中央には、丸いシンプルな椅子と、その椅子と一体型になっている、小さなパソコン机が置かれてあった。

男たちは、その椅子から10メートルほど離れた場所に、分厚いウレタン材のマットを置き、その間に木板と、鉄板を埋め込んでいく。その後ろには更に、うずたかく積まれたブロック塀――。

その向かい合わせの位置に、拳銃よりもはるかに狙撃性能の高い、ライフル銃を持った男がひとり立ち、なにやらそれを謎の装置にくくりつけていた。

「よし。いいぞ。試しに撃ってみてくれ」

パネル側にいた男たちが全員、謎の装置にセットされたライフル銃の後ろに下がると、撃ち方の男は、躊躇もなく発射した。パァァン……！ と、薬莢が割れる音がする。

「どうだ……？」

一発撃っての的を見る撃ち方の男。男が撃った弾痕を確認する、他の男たち。今発射された弾は、ウレタン材と木板と、鉄板をブチ抜いて、ブロック塀の塊にめり込んでいた。その弾痕と、中央の椅子を見比べる。

「うーん……、もうちょい、あと4、5センチ上にしたほうがいいかなあ……。頭の位置に合わせないとな」

なんだか、テレビ局の撮影セットみたいに、手が込んだ舞台装置だ。撃ち方の男が片目をつむって照準を微調整する。3回試し撃ちしてみたところで、スタッフの一人が言った。

「うん、タイミングもピッタリだ。これでいいんじゃないかな。あとは、郷原先生が到着するのを待つだけだ」

「しかし、郷原先生が部屋に居ないとはね。迎えにいったらもぬけのカラだったらしいよ。監視くらいつけなくちゃ」

「まあな。俺なら逃げるよ、こんな勝負。25分以内に答えを出さなきゃ、頭をブチ抜かれる装置に括られて、占いの予想をしてだな、しかも、それが外れたら外れたでまた、誓約書通りの代償を支払わされるんだ。狂気の沙汰だよまったく……」

腕を組み、室内の端へ移動したスタッフたちが、今からここで行われる郷原悟の占い予想の瞬間を、口々に噂していた。

「でも、郷原先生は毎回、これで数千万、数億と稼ぐんだろう？」

「まあ、そういう噂だけど……。でも、その裏ではな……」

スタッフの一人が、もう一人のスタッフに対して、くぐもった声を出した。次第に室内に、寺本組の関係者や、志垣智成の関係者が集まり始めているから、聞かれてはマズいのだ。

「なんでも噂だと、郷原先生が客と賭け合ったカネは仲介料として、半分寺本組と平安ファイナンスに吸い取られるって話だ。こんなに命を賭けさせて、そのカネをむしり取るんだから、組長や川嶋の旦那も酷なことするよなあ。そのくせ川嶋の旦那は、郷原先生のことをあちこちで、俺の弟だとか言って、自慢しているらしい」

「うわー、なんかヤダなそれえ……。郷原先生、そんなんでよくやるよ、こんな賭博」

「まったくだ。そのうえな、郷原先生の占い予想が、どの程度当たるのかを、またオッズにして賭けにしたり、賭場に集まる一般客のぶんでも、組には相当なカネが入ってくる……。川嶋の旦那や組長が、郷原先生を手放したがるのもわかるだろ？」

「へえ～……。占い賭博って、そんなに売上があるのか……」

「おいそこっ！　くだらないおしゃべりはやめろっ！！　間もなく志垣会長の到着だっ！　ビシッとしろ、ビシッとしろ！」

ひそひそ話をしていた二人に、黒服を身に纏った浜崎慎吾が、檄を飛ばした。

（クソッ……。こいつら、川嶋社長を悪く言いやがってっ……。！　郷原先生と社長は、そんな仲じゃねえ……。！　社長は郷原先生のためにこそ、この賭博を仕切っているんだっ！！）

浜崎はそう思ったが、今日は会場の警備隊長だ。きっちりと仕事をこなさなければならない。空気がざわついていて、部屋のインターホンを鳴らす音が聞こえる。志垣智成の到着だ。

志垣は、今日も私人というスタンスらしく、部下は一人しか伴っていなかった。しかし、川嶋貢と寺本蔵が、志垣を護って一緒に現れた。寺本組と平安ファイナンスにとって、志垣は今、大変なカネを落してくれる可能性のある客であり、また、政財界に闇の枝葉を伸ばそうと考えている寺本蔵にしてみれば、賭博で志垣を接待することは、後々の関係にも好都合なのである。それで組長自ら、志垣を案内してきたのだろう。

室内を一望して、寺本は言った。

「おい、肝心の郷原の姿が見えないが、どうした……。？　まさか、怖気づいて逃げ出したのか？」

川嶋が、自分の腕時計に眼をやる。

「約束の午後7時には、まだ15分ほどあります。ギリギリまで待ってやってください。あいつにはあいつなりに、コンセンレーションを整える時間が必要です」

そう言って、郷原をよく知る川嶋は、志垣たちに口を添えた。

その頃――。

赤坂シンフォニーホテルの、すぐ前にある公園の便所で、郷原は、頭から水道の水をかぶっていた。

極限まで頭を冷やす――。冷静になりきる――。冷静に、冷え切らなければ、最後の最後で運だとか、神だとか、星だとかの神秘に飛びついてしまう――。

そんなことでは、ダメなのだ。最後まで自分の意志で、自分の決断で“占い”を貫かない限り、言い当てるなど出来ない。最後の最後で、星なんていうものの言うことを信じてしまうようでは、結果はたやすく覆るのである。

頭から、コートもネクタイもシャツも、ずぶ濡れになるまで水を被った。そして顔を上げ、便所の鏡を覗き込む――。

(眼――。今の俺の眼――。冷え切っているか？たった今、ビルの屋上から飛び降りることができると、命の惜しくない、突き抜けた眼の色になっているだろうか俺――。生きることに執着していないだろうか、今の俺は――)

そう思った瞬間、ざわりと肌をかけあがる、あの温もり――。

郷原は、自分の一瞬の気の迷いに、絶句したように立ち尽くした。

(だめだっ……！ 思い出すな今はっ……！ 生に心が向かえば、未来を読み間違える……。限界まで意識を死に近づけなければ、未来を垣間見るチャンネルは、開かない……。信じられるものは自分だけだ。自分だけを信じろ……！ 志垣に勝って、カネと権力を掴むために……！！)

またジャバジャバと水を浴びて、頭を激しく振った。そして、キッと顔を上げると郷原は、毅然とした足取りで、靴もコートもボロボロの姿のまま、赤坂シンフォニーホテルの最上階にある、占い予想のための会場へと向かった。

2、

「やはり、監視をつけるべきだったのでは？ 寺本さん……」

葉巻をくゆらせながら、志垣が言う。

「う、むう……。しかし、今まで郷原が、勝負から逃げたことは一度も……」

顎をなで、首をかしげる寺本であった。川嶋が、落ち着き払った眼をしてきっぱりと言う。

「大丈夫です。郷原は必ず現れます。開始時刻まで、まだ2分あるじゃないですか。もう少し待ちましょう」

寺本巖、川嶋貢、志垣智成の3人は、占い賭博のための装置をゆったり眺められる位置に置かれたソファに、腰を落ち着けていた。その壁際には、浜崎慎吾と6人のスタッフ、そして志垣の部下一人が、手を後ろに組んで、郷原悟の到着を緊張して待っていた。

刻一刻と、秒針がリズムを刻む。水を打ったように静まり返る、スイートルームの広々としたリビング。

郷原を信じて、ひたすら待つ川嶋の耳が、微かな気配を察知する。

その気配は、次第に明確な靴音へと変わり、確実にこちらの方向へ近づいてきた。

川嶋が、振り返った。それを見ていた志垣たち、スタッフたちも一斉に、部屋のドアへと首を向けた。

(5、 4、 3、 2、 1、ゼロ……！！)

胸の中で川嶋がカウントしたと同時に、静まり返った室内にインターホンが鳴った。浜崎はすぐにドアへと駆け寄り、施錠を解き、開け放った。

一同、一斉に息を呑む――。郷原……。なんという姿――……。

「せ、先生っ……………！」

あまりの郷原の迫力に、浜崎慎吾は思わず、後ずさった。

郷原は、ずぶ濡れのトレンチコートから水滴をしたたかせ、血走った、それでいて落ち着き払った眼をして、室内へとやってきた。

浜崎が、すぐにタオルを持ってきた。それで軽く髪と顔、コートを拭う。その場にいる一同が

、郷原から視線を逸らせないでいる中、郷原は、寺本蔵に言った。

「すみません組長……。志垣さん……。まだ、もう少し時間を頂いていいですか……。もうちょっとだけ……」

「まあ、良からう。好きにしろ」

郷原は、寺本や志垣たちの環視から離れた場所で、濡れて重くなったコートを脱ぐと、首と肩をコキコキと鳴らして、軽くストレッチを始めた。腰を伸ばし、隅々の関節までほぐしてゆく。

それが終わると、部屋の入り口に近いところで立ち会っている川嶋の元へ行った。川嶋はよくわかっているふうに、懐から高級シガーを1本取り出すと、それを郷原に静かに手渡した。

受け取り、穂先を軽くほぐして郷原が口に咥えると、川嶋がカルティエのライターで、火をつけてやる。

（まるで死刑囚だ、これじゃあ……）

始めて賭博のために占う郷原を見る浜崎は、その儀式を見てそう思った。東京裁判を描いた映画で、処刑前の戦犯がやはり、こんな風にタバコを吹かすシーンがあったように記憶している。

なんともいえない、透き通るような、死に赴く者のような目をして、厳粛な表情で、郷原はただ静かに、葉巻の煙を吸い込んでいた。

眼を閉じて、胸を落ち着ける。そして、自分に言い聞かせる。

（大丈夫――。今、死んでも悔いはない……。俺は死ねる……。いつでも死ねる……。だから恐れるな……。失うことを恐れるな……。何もかも捨てろ、この瞬間に……！）

いつも左腕に嵌めている、金色のロレックスを外すと、タバコを吸いながら文字盤を耳に近づける。時計が刻むリズムに合わせて、呼吸を整えながら、嫌いなはずのタバコの煙を、ゆっくり深く吸って吐く。強く眼を閉じて、そして、強く眼を開けた。

ゆっくりと郷原は、シガーを灰皿に押し付けて、一同を振り返った。

「さあ……。そんじゃあ皆さん、ボチボチ、始めましょうかね……。楽しい楽しい、占い鑑定大会でも……」

そうやって郷原は自ら、処刑台のような室内中央の椅子へと腰掛けた。浜崎がそこへ、紙切れを渡す。

そこには、ボクシングの当事者、橋爪功治と原口信夫の生年月日と出生地などの、占いに必要なデータが書かれている。池田と山本の生年月日は、もうパソコンに記憶させてある。

スタッフが用意した最高級シェリーを飲んでいた志垣老人は、待ちかねたように身を乗り出して、装置に腰掛けた郷原を、爛々とした好奇心で見つめていた。

「では、会長にルールのご説明を……」

「ええ。お願いします」

マイクを手にした浜崎が言うと、志垣は、海坊主のようなはげ頭に醜い紫斑を浮かべて、脂ぎった顔と飛び出た目玉を突き出し、椅子の郷原をじっと見つめながら頷いた。

「えー……。まず、志垣会長、郷原先生の椅子の前へどうぞ。会長のお付きの方も一緒に」

「……………それで、どうするのです？」

郷原の前に出てきた志垣と、志垣の付き人は、次を促すように浜崎を見た。

「郷原先生が座る椅子に、革ベルトが何本かついているのが、おわかりですか？」

「ええ。これのことですね」

志垣が、椅子についている太いベルトを、掴んでみせた。

「はい。まずはその革ベルトで、郷原先生をきつく固定してください。足首、腿、腰、胸の4ヶ所に、ベルトがついていますから、その全部を固定します。郷原先生が途中で恐くなって、逃げ出さないように――」

志垣のボディガードである、腕力の強そうな筋肉質の男が、郷原のベルトをぐいぐい締め上げる。そのあとで、志垣がベルトを確認した。バックルも頑丈だし、自動で電子ロックされる仕組みになっているから、外れる心配はないだろう。

「えー、ベルトで先生を固定して、カウントが始まったら、郷原先生にはパソコンを叩いたり、暦をみたりなど、占いを始めてもらいます。そしてそれを、手元に置かれた便箋に綴る――。どんな展開で、最終的に参加者たちがどうなっているのか、それを便箋に書く。占いに与えられた時間は、25分間です。5分経過するごとに、水平移動装置がじりじりと動いて、セットされた時限発射装置が作動し、弾丸が1発撃たれる――。弾は少しずつ、郷原先生の頭を狙う――。郷原先生は、5発目の発砲音を聞くまでに、便箋に予想をしたためないと、頭を打ちぬかれることになります。しかし、便箋に書けばそれでいいというわけには行きませんから、25分の間に予想を書いて、それを立会人の皆さんで読んでもらって、志垣会長のOKが出たら、そこで初めてスタッフがレスキューに入る。だから、読まれる時間も考慮すると、郷原先生の持ち時間は25分より短い。早く書いて読ませて、OKをもらわないと、死んでしまうわけです」

「な、なるほど……！ それは面白い、ククク……！！」

志垣は目玉が飛び出しそうなほど、好奇心丸出しの表情で、括られ、動けない郷原をまじまじと見た。郷原は志垣の眼は見ずに、志垣の向こうの、どこか果てない方向を、遠い眼で見つめていた。もうこの世に未練などないというような、そんな表情――。

たまらず志垣は、郷原の耳元に息を吹きかけ、頬を撫でた。

「こうして間近でみるとあなた、本当に滑らかな肌をしておいでだ。いい、実にいい。こういう生意気な若造に、屈辱を味わせるのはたまらない……。あなたを殺すのは残念です、郷原さん。せいぜい、いい加減な占いをして、5発撃たれるまでに逃げ出してください。ククク……。ハ、ハハハハ……！！」

男色家丸出しで郷原を眺める志垣の素振りに、川嶋は、眼を背けずにはいられない。それをチラリと、横目で見ると寺本だった。組長の深読みするような視線をごまかすように、グラスに注がれたシェリーを、川嶋は一気に煽った。

時計に目をやってから、浜崎がその場にいる者全員に聞こえるように、大きな声で、ゲームのスタートを宣言する。

「では、いいですか？郷原先生」

「ああ。もうやるしかねえ……。いいぜ」

「では志垣会長、ライフル銃の時限発射装置のスタートボタンを、押してください」

志垣は、浜崎に促されるまま、観覧用のソファに座り、時限発射装置のスタートボタンを押した。じりじりと、部屋の隅に置かれた水平移動装置の上のライフル銃、自衛隊からの横流れ品

M24SWSが、導火線のように移動を始める。

郷原はすぐに眼を見開くと、パソコンを立ち上げて、関係者4人の星を描き出していった。それから、この瞬間の星の配置――。それらを総合的に読み解いて、どんな展開になるのか予想するのだ。

しかし、郷原の頭の中にはタベから、占うまでもなく、あるイメージが定着していたのである。

それは、山本が負ける、ということ――。もし、この勝負が純粹に、山本対池田の戦いならば、山本には勝ち目があつたかも知れない。だが、戦うのはリングに上る橋爪であり、原口である。彼らの体や、命を無視することが出来なければ、山本が勝つことは叶わないだろう。

(それが出来るのか……？ あの優しい男に……)

しかし、山本がコンビを組んだのは、元・東洋太平洋チャンピオンの橋爪功治だ。その橋爪が負ける？ ど素人の原口に――??

そう考えると、山本が負けるという路線は、かなり薄くなる。しかし……。郷原にはそれでも、どうしても、山本が負けるような気がするのだ。それは、どんな占いの知識も関係なく、直観の深い洞察――。山本という男にじかに触れて、そして感じる皮膚感覚だ。この感覚は曲げようがないほど強く、心の中で揺るがない。たとえ、どんな占いを当てはめようとも……。

それでも、藁をも掴む思いで、未来へのヒントにはならないものかと、郷原は必死で星の計算をした。

橋爪の運――。星回り――。眼を皿のようにして、指で星の角度をなぞっていたその時。

パァァァ……ン！！ と、乾いた音がして、微かな弾丸の風圧が、郷原の頬に届いた。ヒヤリと冷たいものが、背中を這い登る――。体中の毛穴という毛穴が、恐怖で縮こまる――。かぶりを2、3度振ると、再び星の配置を見つめた。

とにかく結論を――！ それ以外にはない。

しかし、必死に星を見ても、橋爪功治の運勢に、命が揺らぐような印はない。もちろん、危険、というシグナルは浮いているし、死に傾きやすい星回りもある。だが、それは、かなり音量の低いレベルのもので、不安定であり、たやすく覆る可能性を多分に秘め、強く、ハッキリと聞こえるものではなかった。

(どうしたことだ！星よっ！！ これでは、意味がわからないっ！！ なぜ、デスマッチをはずの橋爪の死相が、曖昧なもので、ただの秒の山本に浮いた死相が、こんなにハッキリしている……?? わからないっ！！ わからない、俺にはっ……！！)

焦る神経と比例して、どんどん思考が混乱し始める。

[ククク……。もう認めろよ郷原……]

頭の中で、あの声が響いた。いつも、緊張状態に置かれるたびに聞こえてくる、自分のたましいの声――。

[いい加減、もう諦めろ。占星術など捨てろ、郷原！ こんなもの、所詮は何もわかりはしないのだ……。お前の占いが当たるのは、単に、死に物狂いで考えるからこそだろ？ 死に物狂いで分析し、洞察し、欲を通して見える人間の本音を知り抜いているからこそ、お前は未来を占うことが出来るのだ――。神秘を憎み、占いを心底軽蔑していながら、占わなければ生きられぬ

お前……。なんという矛盾……。なんという……]

心の荒野を覗かせようとする、もう一人の自分の声を、郷原は振り払った。

(うるさい——！！ 俺は今、忙しいんだっ！！ は、早く池田や、原口の星を見なければ——！！)

さっきまであんなに、占いなんかに頼るものかと、自分に言い聞かせていたのに、やはりこうして命を危険に曝け出すと、藁をも縋る気持ちが起ってしまう。ホロスコープなどという、クソの役にも立たない屁理屈に、縋りついてしまう——。

焦って、暦をめくる郷原の鼓膜を震わせて、2発目の銃声——。

志垣はいつの間にか、手にしていたシェリーグラスを落としていた。目の前のイカれ占い師、郷原悟が、本当に死に怯えているのを見た気がした。

寺本と川嶋も、占い賭博は何度も見ているはずなのに、やはりここうして目の当たりにすると、我を忘れて見入ってしまう。

血が滲むほど唇を噛み締めて、強く頭を振ると、郷原は再びホロスコープを必死に観た。今度は池田と、原口の星を見比べた。

(池田……。こちらもハッキリと、勝つとは出ていない運勢だ、今日は——。しかし、山本の、あの妙にきっぱりと浮かんだ死相を考えれば、勝つのはやはり池田……。色合いの強弱だけで考えれば、そういう判断になる……。原口、原口はどうだ……？)

原口信夫の星を眼で追った郷原は、次第に泣きそうな顔になった。原口にもまた、決定的に勝つとか、負けるとかの相はなくて、どちらにも傾く可能性のある、不安定な弱いサインだったのである。

(ダメだ——！ これで俺に、どう判断しろって言うんだよっ！ だから、占いなんて信用できないんだっ！！)

郷原はパニックになって、ベルトから逃げようと身をよじった。今まで読んだ星座の見方だとか、星の角度の読み方だとかをなぞるように、すべての脳細胞を震わせて、テキストを思い出してみるけれど、今まで読んだどの占い本にも、こんな星回りをどう読み解いたらいいのか、書かれていなかったように思う。

[フッフ……。だから言ってるだろ？星なんか読んだって、本当に可能性のある未来などわかりはしないのだと……。もうやめろ郷原。星など見るヒマがあったら、状況をもう一度考えて、事態を見つめ直せ。もう一度人間の根源を、人は何によって生きるのかということを考えろ！そこにこそ、山本が負ける理由がある……！]

心の、ずっとずっと、ずっと深くから聞こえてくる自分自身のその声は、すっかり死に怯え、弾丸で頭を粉々に打ち砕かれる間際の恐怖に、身悶えている彼自身を、励ますものだった。

(そうだっ！！ 最後の最後に占いに頼るなんて、バカのことだっ！！ 考えろっ！！ 考えろ、俺——！！)

その、すぐ耳元に、劈くような銃声——。3発目——。

次第に、精神が死に近づいていって、通常では得られない未知なるチャンネルが、郷原の中に開きつつあった。まるで高速処理機のように、1秒間の間に複数の思考が駆け巡る。遠い記憶も

、未来への計算も、瞬きする間もない一瞬に、脳が処理し始めていた。

究極の変性意識――。トランス状態――。

最新の脳科学によると、脳内麻薬物質ドーパミンが、死の恐怖に身悶えて怯えきったその瞬間、爆発的に分泌され、人にさまざまな神秘的幻覚を見せるのだという。さまざまな宗教に伝わる秘儀はまさに、この状態を、意図的に作り出すためのもの――。

郷原は、単にショウのためだけに、時限発射装置に狙われているのではない。こうやって、命を死に曝け出したとき、未知なるチャンネルが開くことを経験的に知っているのだ。

3発目の弾丸が耳元を横切ったとき、郷原の精神はまさに、そんな状態にスイッチしつつあったのである。

[怯えるな！ 決して思考を手放すな！！ 考えつづけて死ねっ！ 郷原！！ 考えつづけて死ぬことこそ、人間が人間である証明――！]

(わかってる！ 考えるっ……！ 人は、何によって生きるのか……。何によって生きるのか――)

ドーパミンの大量分泌が起こりつつある郷原の意識の中、おぼろげに浮かんでくる人影があった。老人の影である。

(爺さん――。雪村の爺さんじゃないか、なぜ――？)

郷原は、自らの遠い記憶の中に焼きついている、老人の姿を眼前に見出して、縋るような気持ちになっていた。

(爺さんっ！ 爺さん教えてくれっ！！ こんな相を俺は、どう読んだらいいんだっ！！ 教えてくれよっ！！ もう一度――！！)

いいか郷原――。

鼓膜を震わせて甦る、郷原に易者のイロハを教えてくれた、亡き雪村幸造の声。雪村の言葉。

いいか郷原……。占いで、人と自分を迷わせて生きてゆくなら、これだけは忘れるな。人間の行動原理の根底にあるのは、あらゆる欲なのだということを――。人は誰でも、欲望という名の醜い汚物を抱えている。神秘など信じるな……。人間の醜い欲望こそを信じろ……。欲こそが、人の世のすべてを動かす力だということを――。

(そうだ……。人間のあらゆる行動原理は欲望だ――。だから、池田や橋爪、原口たちが、勝負の今日を生きる理由も、欲望であるはず……。カネを掴み、落ち着いた暮らしを取り戻したいという欲――。では山本の欲は……？ 山本の欲とは、何なんだいったい……)

(僕はもう、優柔不断などイヤだ！！)

賭博に臨む直前、山本は、強い瞳でそう言っていた。優柔不断を捨てる……。それはつまり、他人の存在など一切排除して、すべて自分で決断し、生きるときも、死ぬときも、自分の心のままに行く、ということ――。

この決意は、欲なのか――？？ 池田や原口たちの欲望と、山本の決意はもしかしたら、異質のもの……？。

(どの言葉ならピッタリくるんだ……？ この山本の状況は――)

郷原は目を閉じ、必死に脳細胞を震わせて、考えに集中した。死に怯える自分自身に、言い聞かせるように――。

ふと、魂の奥深くから、“どうでもいい……” そんな言葉が浮かんできた。胸の奥のずっと深く、耳元で聞こえるかのような距離感のところから、自分自身の意識の音が沸き起こってくる。
(そう、だ……。もうすべてがどうでもいい……。借金のこと、親のこと、結婚のこと、医者としての自分も何もかもが……。それが今の山本一一。生きることにすら、頓着しない状態一一。命を捨てた心はもう、欲じゃない……。欲というのは生存とともにあるものなのだから……。生きること、生きたいと願うことこそが、救いようのない、欲の源泉なのだから……)

郷原の耳に、師匠の声が再びこだまする。

ククク……。その通りだ郷原。お前自身と一緒にじゃよ……。お前は、いつ死んだっていいと思って、未来を予言してきたのだ。生きる気などないからこそ、まやかしてない真実を、お前自身の手で掴み取れてきた……。占い師として最高の才能を持った者……。それは、生きる気のない者一一。あらゆるもの、命すらどうでもいいと思えたその瞬間、人は始めて、人知の外を垣間見る一一。神秘は、神秘を信じぬ者にこそ舞い降りるのだ一一。

(そうだ。欲じゃない……。これは欲ではない……。なにもかもを投げ出し、天にわが身を放り出そうとしている一一。だから読めない一一。占いなんかではとても読めない。今の山本の運命は一一。すべてを失う覚悟をした者の前では、どんな宗教も慰めも、まやかしの神秘もまるで無力一一。ということはずまり……)

やはり負ける一一。賭博には負ける……。しかし……。勝ち負けをすでに超えてしまった状態なのかも知れない、今回は一一。そんな未来が、人間である俺に読めるものか！！

そう思った瞬間。郷原の肩を、不意に何者かがざわりと抱いた。

そう……。お前には読めない……。人の身であるお前には一一。

さざなみのような、地鳴りのような幽玄なる声一一。天上の悪徳の女神一一。郷原を連れにきた一一。

郷原悟一一。占星術という天上の悪徳に、魂を売り渡したお前……。そのときから、お前の人生は決まっている。この先も、占い師だとバカにされて、世間の誰からも嫌われ、孤独に生きる一一。それが、神秘を語る者のさだめ……。神の領域をおもちゃにした者たちの、憐れな末路……。さあ、私を受け入れよ……。私に心を明け渡せ……。！！ されば、垣間見せよう、ほんのひととき一一。人の身に見ることの叶わぬ未来を一一！！

凍りつくほど美しく、そしておぞましい、黒い翼の女神の音が、郷原の精神世界を支配して響く。

人は、弱い。

誰もが、弱い。

誰もが、死にゆくわが身の事実には怯えている。

誰もが、ここに生きねばならない理由を、知りたいと願う。

だからこの世から、オカルトや疑似科学が無くなることは永遠にない。オカルトに込められた、見えないものを解明したい、死の恐怖を癒して欲しいという究極のエゴイズム一一。どす黒い欲望一一。それが、人間が作り出した神秘一一。ククク！！ この者たちを、誰が裁けるという

のだ！！ 誰もが神秘を求めてやまない、この世界で――！！

女神が、高みから舞い降りてきて、はっきりと一人の女の姿となり、郷原の耳元に口を寄せて、うっとり甘く囁き始める。

いつも私に連れないあなた――。逢いたかった――。こんなに愛しているのよ郷原……。あなただけを愛しているの……。だから、私を信じてちょうだい……。人に未来を占うなど、出来るはずがない。人は、決して創造主にはなれないのだから――。創造主の真似事たる占いなど、一神教から見れば恐ろしい大逆罪――。一千万遍、煉獄の炎で焼かれても、贖えぬほどの神への罪――。ならば、唯一の創造主ではなく、人間の醜い欲望より生まれ出でた、我ら俗なる神々より与えられし力こそが、今のあなたには必要なはず――。さあ、それがわかるなら、星の言葉を聞くのよ――。もう一度、星の行方を読み取りなさい郷原――。

[ダメだっ――！！ 暦などめくるなっ！郷原――！！]

郷原の背後に抜け出た、もう一人の郷原が、女神の魅力にふらついているたましいに寄り添うように、飲み込もうとする黒い翼の風圧の中で、必死に抵抗していた。

[確かに人は弱い！！ みんな人生に意味があって欲しいと思う！！ そうでなければ、苦しむ自分が憐れだっ！ この人生には意味があると、この世の誰もが信じさせて欲しい、それは人間の希求として、仕方がない……。それは俺にもわかる！ だがな、強く願い過ぎればそれは欲だっ！！ 醜い欲じゃないかっ！ 強い欲は人間を不幸にするだけだ！！ 欲望こそが人間を苦しめ続ける悪――！！ 目に見えない神秘を求めるその心こそ、不幸の源っ...！！ 占いなんて、欲を煽るだけっ.....！！ わかるはずだっ！！ いろんな人間の欲望を、願いを聞いてきたお前ならば――！！ 眼を覚ませ、郷原――！！]

もう一人の、自分の声――。

その瞬間、占いの暦をめくりかけていた郷原の、虚ろなるたましいの受け皿、肉体がピクリと、もう一人の自分の声に手を止めた。

[郷原っ！ そうだっ！！ 悪しき女神の声など聞くなっ！ 自分で決めて死ねっ！！ 星の言葉を信じるなんて愚かだっ！ それは他人に、自分を明け渡すことと同じっ！！ 明け渡すということは、すでに死んだのと同じことっ！！ 生きたければ、自分で決めて死ね！ それでこそお前は、占いという呪縛から逃れることができる.....！！]

女神が、もうひとりの郷原の叫びに対抗するように、猶も喉を震わせる。

黙れっ！！ 人ごときがっ！！ わらわに逆らうかっ！！ さあ、迷うことはない、郷原よ――。人の子の憐れな男よ――。我ら俗なる神々の愛を受け入れよ――！！ 俗なる我らの魔力を信じよ――！！ 星の言葉に耳傾けよ――！！ さすれば、天上の悪徳の英知が、お前に未来を垣間見せる――。さあ――！

女神がいきり立って、背中の翼を激しくはためかせ、もう一人の郷原を吹き飛ばそうとする。もう一人の自分の声と、悪徳の女神の声とにさいなまれ、郷原は、耳を塞いでいた。

(やめろっ！！ やめてくれっ！！ そんなに大きな声でぎゃあぎゃあ言われたら、なにもわからないじゃないかっ！！ 早く決めなきゃ本当に俺、死んじゃうよっ！！ 早くしなきゃっ！！)

精神世界の中の郷原は、激しく思考が混乱して、地団駄踏んで泣いているだけだった。黒い翼に守られた女神が、徐々に肉感を伴い、自らの裸身を、子どものような郷原の前にさらけ出して

ゆく――。

「うっ――……」

女神に抱きすくめられ、唇をうっとり吸われる郷原。めくるめくエクスタシーが、高波のように体を包み込んでゆく。

さあ――。いい子ね、怖がらなくても大丈夫――。私を、信じなさい郷原……。私を、抱くのよ――。未来を知りたいのなら、拒むことなど出来ないはず――。

女神が、幻覚の中、まさぐるように起立した郷原自身を掴み、ねっとり口に含んでしゃぶる。自分の中へと導き入れてゆく。

肉体を超えた、この世ならざる存在との性交――。幻覚なのか現実なのか、まるでわからないほど、確かな性の激しい快感――。

脳内麻薬物質ドーパミンは、性の快感とも密接な関係にあるといわれている。臨死体験者の中には、死に際での、ドーパミンの大量分泌が起こっていたと思われる最中に、めくるめく性的興奮を感じた経験をした人もいるらしい。

だとすれば、郷原にしゃぶりつく淫乱なる女神は、郷原自身の脳の作用が生み出した、まぎれもないただの幻覚であるはずだ。それなのに――。睾丸の奥から精液がこみ上げてきて、射精しそうになる。思わず腰をひくつかせる郷原だった。性の快感が呼び水となり、次の刹那、さらなるドーパミンの大爆発が脳内で発生――。まるで、宇宙創造の、ビッグ・バンのように――。

(開いた――！！ 予言の扉が――！！)

激しい性感が一瞬で遠のくと、耳の奥でキーンという感じの、耳鳴りのようなものを感じた。

目の前が暗転し、闇の中へと一切の存在が消えてゆく。流れる時間がくっきりと、コマ送りのように止まり始める。ここにはないはずの光景が、はっきりと見えた。

郷原の膝の上で、うっとり彼自身を啜えこみ、腰をくねらせる女神の乳房を透かして、向こう側に見える映像に、郷原の瞳孔は釘付けになっていた。

そこに見えたものは、山本――。山本が、木偶のように倒れている姿――。啞然として、山本を取り囲んでいる、観客たち――。

それ以外には、何も見えない。たったこれだけの断片が、郷原がわざわざライフルに狙われて、命がけで変性意識を起こし、その代償として見る事ができた、時空の超越だった。

(まさか――。これが、未来……?? 山本は死ぬ――?? 死んでしまう――?? もしかして――)

そうよ郷原……。山本亮一はもう死ぬわ――。そういう運命よ……。星にも、似たようなことが浮かんでいたのでしょうか――？

(死ぬ――？ 山本が――？ なぜ――)

しかし、倒れている山本の映像が見えただけでは、「ハンデボクシングの勝敗と、その勝負の成り行きを予想する」という今回のテーマに、何も答えていない。つまり、ストーリーの描きようがない。

山本が倒れるのだとして、それが他人の殺傷によるのか、自傷によるのか、あるいは他の要因なのかもわからない。そこまで答えなければ、あの志垣が郷原を、認めるわけがない。

「ふざけんなっ！！ これだけの情報では、わからない——。もっと細部を、この先を見せてくれよっ！！ 俺は、命を張ってるんだぞ？！ これを読み解かなければ、俺は死ぬんだぞ？！ 俺が死んでもいいのかっ！！ このクソバカ女っ！！」

脈絡なく、急に郷原が叫ぶから、周囲にいた者たちは、いよいよ郷原の神経が限界に来たのだとわかった。郷原のその眼は明らかに、あるはずのない何かを見ていた。

[フッフ……。それはできない相談だよ郷原——。わかってるだろ？ この精神世界は、お前の外部から来たものではないのだ——。この空間で見えるもの、起こること、聞こえることのすべては、お前の内からやってくる、お前自身に帰結したことなんだ——]

女神に吹き飛ばされたはずの、もう一人の郷原が、再び郷原に寄り添っていた。

[女神が垣間見せた映像は、お前の脳が今、直感的に確信を得ていることの象徴だ。お前にはもうわかっている。山本がこのゲーム自体を、自らの命をかけて終わらせる意思を持っていることを——。あとはそれを、思うまま紙に書けばいい。素直に、思うままに——。そして外れたら、そのときはそのときさ。運が悪かった。それだけ——。パチンコや競馬に負けることと、占いが外れることは同じことだ。ツイてねえなと笑って、死ねよ郷原——。な？ 今までだって、ずっとそうして戦ってきたんじゃないか]

ドーパミンの大量分泌は、そう長くは続かない。放物線を描くように急上昇していた分泌量も、限界を超えた映像が垣間見えた瞬間から減り始め、また郷原を、現実へと押し戻してゆく。

(そうだ——。占いの相なんか関係なく、思うとおりに書けばいいんだ。そして、外れたら、笑って死ねばいい。許してくれるよね、姉ちゃん——。姉ちゃんを遺して、俺が先に死んでも——)

ペンを握り直し、文字を綴ろうとした郷原だったが、その瞬間、フラッシュバックのようにあかりの顔が閃いた。

(郷原さん——。また、逢えるよね——……)

蘇るのはささやかな秘め事——。楽しかったおしゃべり——。

(北山——……)

断ち切ったはずの、自分の思いに、自分でおののいた郷原は、不意にそのまま、動けなくなった。

「……………??」

固唾を呑んで郷原の占いを見守っていた一同は、椅子に括られたままの郷原の、ペンを握る手が、迷いで激しく震えている様子に眼を奪われていた。

存在のぼやけはじめた女神が、郷原の背後で囁く。

ククク……。決められまいよもう——。今までのお前ではないのだからな——。今までの、死にたがっていた郷原悟はもういない。北山あかりが胸に住み着いてしまったあの夜から、お前の心は、お前自身も気付かぬ奥底で、お前を生かし始めている——。さあどうする？ 占いが外れたら、本当に笑って死ぬるかえ？ 恋しい恋しいあのめす猫に、もう一度逢いたければ、ここで死ぬわけに行かないぞ?? ましてや、志垣なぞに飼われるわけに行かないぞ?? だとすれば——。より確実な未来を選ぶべきではないのか？ 星の言葉をもっと、読みこむべきではないのか？

「う……………」

女神の言葉に、激しく心乱される郷原だった。

より確実な未来——。あかりの存在が、郷原のたましいを欲で曇らせてゆく。その欲が、「より確実なもの」を求めさせる。

(より確実なもの——?? より確実って、何だよそれ……。想像上の安っぽい神秘や法則が、安易に与えてくれるものが“より確実”だって言うのか——?? 俺には、わからないよそんなもの——)

そう、思った直後。精神世界をただよい、すっかり現実を越えたところにあった郷原の意識を不意に、いかずちが打った。

パァァァ……ン——!!!

鼓膜が張り裂けそうなほどの銃声だった。たましいごと、粉々になりそうな爆発が、とたんに郷原をこの世ならざる空間にとどめていたドーパミンの分泌を、完全に止めた。

4発目——。

現実の、椅子に手足を括られた郷原の肉体が、恐怖ではげしく暴れ始め、足腰にはめられた枷が血の滲むほど食い込んだ。

このとき、見物用の離れたソファで、郷原の様子をじっと見ていた志垣、川嶋、寺本、そしてその場に居合わせた者すべてが、郷原が精神分裂を起こしたのをはっきりと見て、ゾツとしていた。

椅子に括られ、ぶつぶつと心の壊れた廃人のようになって、眼をたぎらせ、見えない何かと話しているように見える郷原。口からは涎を垂れ流し、起立した股間をかすかに濡らして、まことに痛ましい、狂いきった、おぞましい人間の極限——。

しかし、4発目の弾丸の音を聞くや、電光石火にペンを取り、眼をカッと見開き、殴りつけるように必死で文字を綴りはじめた。

「俺は、俺は、誰にも支配されはしないっ!! 俺が欲しいのはカネだっ!! 権力だっ!! バカにされない人生だっ——!! あいつがくれる温もりなんかじゃないっ!! 誰が安っぽい神秘になどっ!!」

閉じて行く郷原の精神世界の狭間で、郷原を誘惑したくて仕方のない悪徳の女神が、叫んだときにはもう、遅かった。郷原は、星など関係なく、自分が素直に感じた内容だけを、そのままメモに走り書きしていたのだ。

そして、便箋を高らかにかざす——。

「かっ!! 書けたぞっ!! 書けたっ!! 止めてくれっ!!」

すぐに浜崎が駆け寄り、郷原の手から便箋をもぎとって、志垣と寺本に見せる。書かれた文章を目で追った志垣は、眼をひん剥いて驚くと、すぐに手を上げた。

駆けつけるスタッフ。機動隊が使うジュラルミンの盾を持ったスタッフたちが、すぐに郷原の前にバリケードを展開した。

「はっ! 早く解けコラ!! は、早くっ!!」

パァァァ……………ン!!!

5発目の銃声――。

目をつぶり、肩をすくめ、凍りつく心臓――。恐る恐る、眼を開けてみる……。最後の弾丸は、ジュラルミンの盾をぶち抜き、さらにバリアにしていた鉄板に当たって、かなり威力を殺されたらしく、防弾チョッキを着ていたスタッフに当たったが、肌が赤くなる痛みを胸板に残す程度で、なんとか床に落ちた。

助かった――。

すぐに革ベルトを解かれ、自由にされる郷原――。

郷原が書きなぐった便箋を、志垣と寺本は、目を丸くして読んだ。

「ほ、本当に、こんな展開が……？」

そこには、こんな予言が記されていたのだ。

勝者・池田原口コンビ。しかし、二人は正規の勝ち方をしない。試合は中断され、不戦勝のような形になる。何らかの理由で重傷を負う山本。死ぬかも知れない状態に陥る。

「な、なんとっ……！！ 正規の勝ち方をしないだと……？ どういうことだ……？」

志垣は、身震いした。

「しかも、セコンドの山本が瀕死……?? 信じられない……」

郷原は、浜崎の助けを受けながら、やっと立ち上がると、そのままどっかりと、空いたソファに崩れ込んだ。

「本当に、こんな未来が見えたのか、郷原……」

寺本巖が、ソファに崩れた郷原を見下ろすと、郷原は組長を睨め返した。まるで見境いなくかみ殺しかねない、狂犬じみたその眼に、さすがの寺本も一瞬たじろいだ。

「わからない……。わからない、もう何も……。俺にわかるわけないだろっ!!! 俺は自分の思うままを書いただけだっ!!!」

「おい、今、デスティニーのオッズは、どうなっている？」

「今のところ、9対1で橋爪勝利を予想する会員が、圧倒的です」

「9対1、か……。これでは元返しだな。賭けとしてはつまらないが、俺も確かにそう感じる。橋爪が負けるなど……。もし原口が勝ったら、原口に張ったほうは大興奮だ。しかし……」

「郷原の占い勝負は今年、2戦2勝……。全部勝っています。それを考えると今回も、当たるのかも知れないという考えは、捨てられないのでは……」

川嶋が、寺本組長に顔を向けて言った。

「ふむ……。まあいい。ネット会員たちには、郷原のこの予想を、メールで配信しろ。占い予想がどの程度の精度で当たるのかを、賭けたがる連中だからな」

「わかりました。おい浜崎、すぐにネット会員たちに、占い結果をメール配信して、占い賭博のオッズを決めろ」

「はいっ!!!」

川嶋の命令に、きびきびと答えた浜崎慎吾は、すぐにスイートルームの別の部屋へと移動して、占い賭博を楽しみたい連中のために、ゲームを仕立て始めた。

志垣は、占い予想の書かれた紙をしばらく覗き込んで、好奇心に目を輝かせていたが、しかし、急に表情を変えた。言葉のアヤ——。そこがどうしても、引っかかるのだ。

「フフフ……。なかなか迫真の占いでしたよ、郷原さん。本当にあなたが発狂したのかと思えるくらい、楽しい占いの様子でした。しかし、ここが引っかかります。ここをあなた、どうするので？」

疲れ果て、眼の焦点がまだ合っていない郷原の前に、郷原が書きなぐったメモを、突きつける志垣である。

「引っかかる……。？ どこが……。？」

「ここですよ、ここ。 “何らかの理由で重傷を負う山本。死ぬかも知れない状態になる”——。この記述、ひっかかりますねえ……。死ぬ “かも” 知れない、はないでしょう？ 死ぬ “かも” 知れないは。ここをあなた、どうするんです？ 善人の山本はけっきょく、死ぬんですか？ 生きるんですか？」

ヘビのように、狡猾に笑みを浮かべて、いたぶるような志垣の追及が、郷原の精神を現実引き戻した。

「あ……………」

占い文の中の、わずかな汚れのような、逃げの部分——。そこを志垣は、指摘したのだ。

「さあ……。そこまで言い切らなければ、私はあなたの占いを、当たったと認定できません。山本は死ぬんですか、生きるんですか。今この場で決めていただかないと、占いとして中途半端です」

「う……………」

郷原の脳裏に、一瞬垣間見えた景色——。それが蘇る——。

あのとき、死に限界まで近づいた郷原の精神が捉えたのは、仰向けに倒れている山本の姿であった。それ以外には何も見えなかった。

(あれは死んでいる——？ 生きている——?? わからない……。わかるものか……。実際に、その時、その場所に居ない限り、わかるものかそんなものっ……！！)

郷原は、思ったままを口にした。

「わかるわけないでしょ……。そんなもの……。そんな風を感じた、思ったというだけなんですから」

それに対し、志垣は首を振る。

「いいえ。勝者が池田だと断言したあなただ。生きるか死ぬかも断言すべきです」

「なら、山本が生きるほうでいいよっ」

「それは、占いがそう言っているのですか？ 郷原さん」

「占いなんか関係ねえ！！ 山本が生きるほうを俺は、信じるっ！！」

「し、信じる……。?? 信じるですとっ……。?! ダメです、そんなのは……。!! ならば、賭けなさいよ、信じるならば……。信じるなど、口で言うのは簡単です！！」

「どうしたんですか、志垣さん」

異変に気づいて、寺本と川嶋が、郷原と志垣の元へやってきた。

「ああ、寺本さん、ここの記述、逃げだと思いませんか？死ぬ“かも”なんて書き方はないですよ。これはくだらない、テレビや雑誌の星占いではありません。私と郷原さんの、真剣勝負なんだ」

「んじゃあ、何を賭ければいいんだよ……。賭ければいいんだろ！ 山本が生きるほうにっ！」

ガン！ と、大きな物音が響いた。苛立って思わず、手前にあったテーブルを、志垣に向かって郷原は蹴飛ばした。

「フッフ……。苛立っただってダメです。生きるというなら、賭けなさい。だいたい、世間のやつらは占い師などという、いかれぼんちに甘すぎる……。人様に圧迫感を与え、人生を迷わせる予言をするからには、外したら責任をとらせるべきなのだ……。世の中の誰も、占いを糾弾しないから、世間にはバカな占い信者が溢れかえっているのです。私は、占い師は責任を取るべきだと思います。郷原さん、言い切る、信じるならば賭けなさい……。さあ……！！」

「わかったよ……。んじゃあ、腕でもバツサリ取ってもらおうじゃねえか……」

「右腕？ 左腕？」

ペンを取り出し、寺本と川嶋の目の前で、更に証文にしたためてゆく志垣であった。

「じゃあ、左腕だ」

まるでふてくされた子どもみたいに、背中を向けて、ぶっきらぼうに言う郷原を、川嶋は、いたたまれない顔で見つめていた。

カネのため、すべての責任を一身に背負うには、郷原の背中が繊細過ぎて、女性的だった。だから川嶋は辛くて、思わず顔を背けてしまう。見届ける責任が自分には、あるはずだと思ながら……。

志垣は、投げやりな態度の郷原を見つめ、いたぶるようにニヤリと笑って言った。

「いいでしょう……。では、試合終了後1時間経ってもまだ、山本が生存していたなら、この志垣、さらに1億円を追加いたしましょう。あなたと違って私は、体を張るしかないドブネズミではありませんから、カネを賭けます。山本が死んだら、私の部下に居合い抜きの達人がいますから、その男をすぐにこの場に呼んで、あなたの腕を一刀両断させます。いいですね、クク！！」

「……………」

ハンデボクシングのゴングまで、あと1時間と15分――。その試合が終わったとき、まさに運命が明らかになる……。

郷原は苛立って、人のいる場所から離れた窓辺に立つと、珍しく2本目のシガーに火をつけた。

そして、考える……。占いは終わったけれど、なんとか山本を救えないものかと、考える……。昨日からわからない、あの山本の、最後の明るさ……。いまどき珍しいあんな人間を、こんな薄汚い賭博で死なせるわけにはいかない……。家族の元に、無事に帰してやりたい――。それがせめて、自分にできる精一杯のこと――。

（そうだ……。さっき垣間見えたあの映像――。あの映像は間違いなく、山本が倒れている映像だった。しかしなぜだ……。？ なぜ、山本が倒れなきゃならない……。？ 倒れる――。倒され

る――。あるいは、刺される――。刺される?? 誰に――??)

刃物……。池田、原口、橋爪、山本の4人のうちで、刃物を持っていいのは原口だけだ。

(ということは、原口が、山本を刺す――?? どうして……。しかし、考えられるとしたら、山本が自分で自分を刺すか、原口が何かの理由で山本を刺すとしたら……。そうとしたら、考えられない……)

しかし山本は、自分で自分を傷つける術を持たない。どう考えてもそうなのだ。昨夜山本は、城乃内の部下につきっきりで監視されていた。ホテルの部屋の中には、ハンデボクシングを円滑に終わらせるために、刃物や凶器になりそうなものは、一切置いていなかったはずだ。山本の所持品もすべて、ホテルに入るまえに、城乃内がチェックしている。だとすると……。

(山本が自分で自傷する、自殺を選ぶという可能性は、ありえない……。どうにかして、凶器を調達する以外には……。冷静に考えればそうなんだ。なのに俺は……。山本が、自分で死ぬ覚悟を決めていると、勝手に思ってしまった――)

郷原の心が、真っ二つに張り裂けそうだった。

(もしそうだとしたら、山本が、刺される――? 誰に? 唯一凶器を持っている、原口に――?? 原口が、山本を刺すのかも知れないということなら、占いは外れる……)

まず、その恐怖が郷原の体を包んだ。

(だって、どうして原口が、山本を刺さなきゃならない? 動機がない……。追い詰められた弱者の原口がキレて、橋爪以外に池田や、支配人の城乃内を刺す、というのなら、動機もなんとなく掴める気がするが、なぜ、まるで接触のないであろう山本を刺すんだ……?)

郷原はシガーを啜えたまま、ゾッと恐ろしくなって、自分の右腕で、自分の上体を抱いた。

(ま……。負ける……。今度こそ……。あのビジョンは、気の迷い……。当たる気がしない、今回ばかりは……)

思わず呟く郷原だった。なぜこんなにも心が弱っている……?

[北山あかりを、愛したからさ……]

また、頭に響くもう一人の自分の声……。

[わかっていただろう? 誰かを愛してしまえば、もう自分ではなにも決められなくなると……。わかっていて、なぜ腕に抱いた……? 頬を寄せた……? 体中で野良猫の呼吸を感じていた……?)

「うるさいっ……!!!」

自分の声を振り払うように、激しくかぶりを振ると、たまらず郷原は、さっき脱いだトレンチコートを探す。

クローゼットの中――。夢中で、コートの内ポケットをまさぐった。すぐにわかった、あの硬い感触――。郷原のお守り――。

これを身に付けていないと、とてもじゃないがこれ以上、正気で居られない。まだ濡れたままのコートを羽織る。拳銃を抱いていないと、不安で仕方がなくて……。

「どうしたよ郷原。そんな濡れたコートなんか、また羽織りやがって。言うておくが、山本に、試合開始前のアドバイスをしに行くなど認めんぞ。お前の気持ちが山本に寄っているのは、わか

っているがな……」

刻々と集まる占い賭博のオッズに、眼を輝かせながら、寺本蔵がちらりと郷原を見た。

「……そんなんじゃありません、そんなんじゃ……」

郷原は、うつむいて否定した。

[ウソだ……]

また、心の声……。

[ウソだ郷原……。助けたいくせに……。山本を死なせるくらいだったら、いっそ占いなど外れたほうが良いと思っているくせに……。しかし、山本が生きればお前は死ぬ……！ あとは神に任せるしかない……。占いが、当たるのか外れるのか……。皮肉なものだな！ 運を弄ぶ占い自体が、また運任せであるという、この真実……！ ククク……！ 占いが当たるか外れるかそのものを、占い師は見抜けないのだから……！ ハーッハッハ……！]

「黙れ……！！ 黙れっ……！！ うるさいっ！！」

郷原はよろよると、モニターから離れて一人、東京の夜景を見渡せるガラスの窓辺に近づいた。耳の奥に、吹雪の唸り声が響く。

今頃、親子3人、寄り添いあって暮らしたあの海辺の町は、雪に閉ざされているのだろうか――。

そう思いながら郷原は、夜景のかなたになぜか、北山あかりの姿を探していた。

1、

首都高の高架が、六本木通りと平行に、どこまでも伸びていた。

東京メトロ “六本木駅” を降りて、麻布方向へとしばし歩く。

騒がしい交通と、人いきれを渡り、六本木らしい煌びやかな通りから、やや奥まった裏路地を進む。

すると、大きな雑居ビルに飲み込まれるような格好で、鼻が曲がりそうなゴミ溜まりと、陰鬱な店が見えてくる。

ビルの1階部分に “Destiny” と、ゴシック風の文字。その真下には、ペンキをベタ塗りしたように重厚な暗緑色の、ロダン作“地獄門”を真似た扉。中が何の店なのか、通り過ぎただけではまったくわからない外観である。

その店の入り口は、こんな調子で、入るのをためらわせてしまうほど威圧感があった。退廃的で、いかにも野良犬や野良猫たちがたむろしそうな、悪徳の臭いを発散させていた。

暗い藍色のライトが浮かび上がらせる、威圧感のある地獄門のミニ・レプリカを入ると、エントランスー。ネクタイをした黒服が、立っている。城乃内貴章がやってくると、黒服は「支配人、ご苦労さまです！」と頭を下げた。

城乃内は、右手を軽く上げただけの挨拶をすると、店内へと通じるドアの中へ入っていった。その向こうには、激しいクラブビートと、眼もくらむような5色のライト、フラッシュが交錯している。

ガラシャツの胸に金のチェーンを光らせた城乃内は、それなりに客が入っているダンスフロアを抜けると、その奥の階段室へ続く防火扉を開け、階段を地階へと降りていった。

この階段は、“裏デス” の会員しか降りられない。この階段の先にある地下2階が、闇のゲームバー “裏デス” なのだ。

階段をワンフロア分下りきると、また防火扉を開ける。その扉を入れてすぐに、小さな支配人室があって、その奥には、広々とした薄暗いホールー。ホコリっぽくて湿気ていて、殺風景なそこには、ビリヤード台と、ロープを張られた小汚いリングがあった。

今、この時間はまだ、通常営業の時間帯だ。数十分後にはメインイベントが始まるが、まだ少し早いせいか、フロアをうろつくお客の数はまばらである。

しかし、今日のメインイベント“ハンデボクシングデスマッチ”が行われる直前になれば、5、60人は集まってくるだろう。

「ボチボチってところか……。ククク……」

城乃内は、会場の客の入り具合を見渡してから、支配人室へと入っていった。これから寺本組の使い走りが、店で使う現金を運んでくる時刻なのだ。

それを見届ける、キャップを目深に被った男。

窺うように、見つからないようにキョロキョロすると、彼は、ハンデボクシングの試合に参加する池田と、原口の控え室を探した。

ハンデボクシングの試合開始まで、残り50分を切っている。男は、最後の望みをかけた作戦に出ようとしているのだった。

そのとき池田は、原口と同じ控え室の中、習ったばかりのフットワークの練習を、この期に及んでまだやっている原口を、腕を組んで眺めていた。

「おい、そろそろ止めたほうがいいぞ。試合前に動き回って、体力を消耗させてどうする」

「うるさい！！ 僕が戦うんだっ！！ 僕の勝手だろっ！！」

そう言って原口は、姿見の前で執拗にイメージトレーニングを続けていた。全身が緊張感でピリピリと殺気だっている。池田は、チッと舌打ちすると、その原口を見つめたまま、思案を巡らせた。

(原口の貧弱なボディー。とても、橋爪から逃げ続けられるスタミナがあるとは、思えない……。さて、どうするかな……)

これから始まるハンデボクシングは、1ラウンド2分、インターバル1分の、ラウンド無制限デスマッチである。しかし、3ラウンドも原口が持つかなあと、常連のお客たちはほとんどが思っていて、今日の原口のオッズは、異常な高騰ぶりを示していたのであった。

(試合開始から恐らく、原口は、すぐにコーナーに追い詰められるはずだ……。しかし、問題は山本……。山本が押す、橋爪のパンチ許容回数ボタン……)

今度の試合の趣向は、こうだ。

山本は、クイズ番組のボタンのような箱を持って、セコンドに望む。リング上には、電光掲示板。そこに、山本が押したボタンの回数が表示され、チャンピオン橋爪は、そこに表示された回数しか、原口を殴打できないルールである。

もし、打撃回数をオーバーしたり、逆にラウンド中、ボタンが押された回数の打撃を消化できなかった場合は、即、橋爪の負けということになる。ちなみにヒットしなかったパンチは、カウントされない。あくまでも、相手にダメージを与えるパンチの数を、山本が決めるのである。

一方、原口に用意された獲物は4つ。50cmの木刀、50cmの竹刀、30cmの短ドス、50cmの長ドスで、この4つ全部を最低1回は使わなければならない。それぞれの獲物は最大3ラウンド使用までで、それを越えて使い続けることができるのは、試合がそれ以上にもつれ込んだ場合の、最後に手にした獲物だけだ。従って殺傷力の弱い竹刀、木刀で、各1ラウンドずつは持ちこたえなければならないのだ。最後に手にした獲物で、最後まで戦わなければならないから、決め手はやはり、50cmの長ドスになる。最初から使ってしまうと、3ラウンド経過で使用できなくなってしまうから、もちろんこれを最後に持ってくるのが妥当だが、そうなると原口は3ラウンドは持ちこたえる必要がある。

あるいは作戦としては、最大9ラウンドは長ドス以外で引っ張れるから、序盤はなるべく長ドス以外でしのぎ、橋爪が疲れてきたところで最後に本命を使う、という戦略もあるだろう。

そして、1回獲物がヒットしたあとは、原口が連続技を繰り出していいのかどうか、池田が采配する。2回連続で刺すことを、自己判断でやってはいけなかったが、池田が手元の青い札を上げた場合には、容赦なく連続技を出して良いルールだった。ただしこれも、一度青札を上げたらそのラウンド中は相手に背中を向けられない決まりで、そうなったら原口はひたすら切り込むしかなくなる。背中を向けたら即ペナルティーとなり、次のラウンドでは一回、武器の使用ができ

なくなる。

だから、ラウンド制限時間内での指示のタイミングが重要なのだ。

そこを、どうするか――。タバコをくゆらせて、池田はひたすらそんなことを考えていた。

そのときだ。コンコン、と、軽いノックの音。

「だれだ……？」

いぶかしげに、音のした入り口のほうに、首を向ける池田。恐る恐る、安っぽいスチール製のドアをそっと、窺うようにごく薄く開けると、そこには、キャップを目深に被った男の姿があった。池田は、警戒して眼を細め尋ねる。

「誰だ……？」

「山本です、池田さん……」

「な……！ なに……！！ なんだと……?!」

意外な人物の登場に驚き、ドアを掴んでいた池田の手が緩んだその一瞬を捉え、するりと、控え室の中に身をすべり込ませる山本。

鏡の前でコンセントレーションを高めていた原口も、目を丸くひん剥いて、思いがけない客の訪問にうろたえていた。

「な、なぜキミが、ここに……？」

キャップを目深に被り、フリースのポケットに両手を突っ込んだまま、山本は言った。

「フフ……。提案がありましてね、お二人に……」

不敵な、力強い、それでいてどこか張りつめた山本の声。池田と原口は、緊張して身構える。（この期に及んで小細工など、されてたまるかっ……！！）

そんな態度だった。

「まあ、そんなに身構えないで。こんな勝負、間違っていると思いませんか、理事長……」

「……………??？」

山本が言わんとすることが飲み込めなくて、池田と原口は顔を見合わせた。ずかずかと、ロッカールームに入り込んだ山本は、室内の中央に置かれた、会議用の長テーブルの前の、パイプ椅子へと勝手に腰掛ける。テーブルの上には案の定、これから試合で使われる刃物、木刀、竹刀などが置いてあった。ドライバーやピンセット、木屑などの工作のあとまで残っている。。

やはり……。こんなに無造作に獲物を、試合前から控え室に置かれては、細工をしない手はないだろう。

「フフフ……。勝とうと必死ですねえ、二人とも……。フフフ……」

テーブルに置かれた獲物を、手に取って笑う山本。

「何しにやってきたっ！！ お前の作戦になど乗らないぞっ！！ 帰れっ！！ それに触るなっ！！」

そういつて、声を荒げ、テーブルの上の獲物や、道具類をかき集める池田である。山本が笑いながら手にした30cmの短刀も、手からもぎ取った。しかし山本はマイペースである。

「いいんですか？僕は、全員が無事に怪我ひとつせずに、カネを掴める方法を、提案しに来てやったのに……」

「な、なんだと……？」

池田がその言葉に、警戒と関心の入り混じった眼で、山本を見つめた。不敵な笑いで肩を震わせ、提案を切り出す山本である。

「間違ってるでしょ？こんな勝負なんてねえ？原口くん……」

「……なにが言いたいんだ、あんた……」

山本は、立ち上がると、一歩前へと踏み出して原口を見た。

「フフフ……。要するに、結局みんなカネだってことさ」

「カネ……？」

「ああ。原口くんも理事長も、橋爪さんも、みんなカネ、欲しいわけでしょう？」

「そ、そりゃあ、そうだけど……」

窪んだ青白い頬を汗で濡らした原口が、伏目がちに本音で頷く。その全身からは今日の試合への、自信のなさが窺えた。

「だったら、みんなで示し合わせて、八百長にしませんか」

「な……、なに……??」

池田が、山本の思いがけない言葉に眼を剥いた。

「僕は、昨日ひと晩中考えた……。どうしたらみんな、カネが掴めるのか……。そうして考えた結果、やっぱり、こうするのが一番じゃないかと……。示し合わせて、八百長試合にして、全員でカネを分配するんです、理事長」

「ううっ……。しっ、しかしっ！ 昨日までのあの態度っ！ あ、あれは何だった？ あのやる気満々だった、強がってた態度は……」

「決まってる。あんなの、必死の芝居だ。ああいう態度でもしなければ、僕に再び自由は訪れない。逃げるチャンスも生まれない」

山本は、今日の試合に不安そうな原口を見据えた。

「原口くん……。残念だけど、きみは橋爪さんには勝てないよ。いくらドスを持って戦うからって、向こうはプロだ。きみが無事に、この試合を終えて、カネを掴んで社会復帰する方法はただ一つ。みんなで八百長試合にすることだ。わかるだろ……。？ だから、手を組もうじゃないか、な？」

「うっ……」

山本の言葉に、張りつめていた原口の神経は、激しく揺さぶられていた。それを見る、池田――。高速回転する脳――。山本のこの言葉……。信用していいのか……？

「は、橋爪は……？ 橋爪は、八百長にすることを了承しているのか……？」

池田が、疑心暗鬼の眼をして、山本のほうを見る。

八百長にすることを承服させておいて、そのくせ、それを利用して付け入られたのでは敵わないと、池田は警戒しているのだ。

「ええ。橋爪さんにだって、家族がいる……。この試合が終わって、何もかも自由になったら、知人の建設会社で働くんだと言っていた。奥さんと子どもとで、人生をやり直したいと……。今、ここに橋爪さんが居ないのは、二人で控え室から抜け出してしまうと、バレるからです。橋爪さんは今、僕が池田さんや原口くんと話せる時間を作るため、室内でわざと物音を立てて、僕が

控え室にいないのをごまかしている……。時間がありません。早く決めなければ……」

原口と二人、山本を挟むように、啞然と突っ立っていた池田だったが、くるりと背中を向けると、自分もタバコに火をつけた。

猛烈な計算……。信用していいのか？ 山本のこの、提案を……。

「八百長するとして、しかし、どうやったら？それにカネはどうするっ……。私は正直言って、私のカネを4人で分配しようと言うのなら、この話は乗らない！ 冗談じゃない、そんなのっ……！」

「フフ……。もちろん、そんなのわかってます。リスクは、言い出しっぺが背負うべきだ。僕が負けます理事長。だから、僕から取る5千万円を、原口くんや橋爪さんに、分けてあげて欲しいんです」

「な、なんだと?!」

狂気の提案に、池田は眼をしばたいた。原口も、口をぽかんと開けたまま、山本に見入っていた。

「し、しかしっ……。！ どうやって?? まさか、橋爪がガードを甘くして、自らこの原口に、刺されるとでもいうのかっ……。??」

「いいえ。血を流すのは、僕ですよ理事長……」

「な、なんだと……。?!」

「セコンドが続行不能になる、ということをつぶん、ここの連中は想定していない。そこに付け込むわけだ。僕が試合中に倒れたり、気絶したりすれば、不戦勝ということで池田さんと原口くんの勝ちになる」

「う、ううっ……。！」

池田と原口は、山本の提案に5秒ほど、考えただろうか。しかし、その間に二人の考えは、今の山本の提案は、やっぱりフカし、ハツタリだと思えてきた。

だって、どこの世界に、八百長試合のために自分の命を犠牲にするアホがいる――？やっぱり作戦だっ!!俺たちの心理を攪乱する、何らかの作戦っ!!こんな提案になど、誰が乗るかっ!!

「バカがっ……。!! フカしやがってっ……。!! 出てけっ!! ちらりとでも話しを聞こうとした俺たちが、間違いだったっ!! 試合ではボコボコにしてやるからなっ!!」

池田は怒り心頭といった感じで怒鳴ると、山本を突き飛ばしてドアのほうへと追いやった。そして、思い切り体当たりして、ロッカールームから追い出した。よろけた山本は、廊下に尻餅をついて、勢いよく締め出されたドアを眺める。

そして、小さい声でひとりごちた。

「まあいいや……。一応は、上手くいった……。フフフ……」

そうやって、つぶやいて、山本は微かに笑みを浮かべた。ともかく、目的は達成したのだ。あとは、試合開始前に観客たちの前で、言質を取るだけ――。そうすれば、悲しい橋爪さんや、原口くんが、殺しあわずに済む……。

タベホテルで一人、一生懸命つくったアレに、あとで気づいてももう遅いからな、池田――。

山本は、一人ほくそ笑んだ。

2、

試合開始まで、残り25分――。赤坂シンフォニーホテルの最上階、1泊120万円の、ロイヤルスイートルーム。

志垣智成はその部屋に置かれた、ゆったりしたソファで、ふんぞりかえってシェリーを飲んでいた。

「フフ……。わくわくしますねえ、占い賭博……。競馬や競艇、マカオのカジノなど目ではないほど、楽しいゲームだと聞いてはいたが、まさか、ここまでドキドキするとは……」

その言葉を、遠い眼をして聞き流す郷原。リビングに大型テレビモニターを置いて、試合開始を待つ志垣たちだった。

その志垣はもう、勝った気になって、ふんぞりかえると、隣にいる郷原の肩に手を回すような仕草をしていたが、郷原は無表情なまま、刃物のような眼をして、まっすぐ前だけを向いていた。

テレビモニターは今、裏デスの特設リングと、その周辺にバラバラと集まっている見物人たちを、固定カメラで映している。リングを取り囲むように、幾重にも、黒い頭と折りたたみ椅子が見えた。

会場の生の音声も、わりとマイクが拾っているから、普通のボリュームの話し声だと聞こえないけれど、野次の大声なら、すべてここにも聞こえてくるはずだ。

スタッフたちは、ぞくぞくと集まってくる、郷原の占い予想への賭けの状況を集計して、オッズにしていく作業に追われていた。あと10分で占い賭博の投票は、締め切りなのである。

裏デスの、本当のスペシャルイベント――。ハンデボクシングが一般会員向けの見世物であるのに対し、ネット会員は郷原の占いが当たるか、外れるかこそを賭けにして楽しむ。本当は、こちらで動くテラ銭のほうが、莫大な利益を生んでいるのだ。

裏デスはひとえに、郷原悟の占い賭博を成立させる実験場――、ゲーム盤のようなもの――。

今夜の占い賭博、一番人気は、“勝者のみの中”であった。つまり、郷原の占い通り、試合自体に勝つのは池田原口コンビだけれど、山本が倒れるとかいう予想は当たらないだろう、という予想だ。

「フフフ……。相変わらず、賭場では人気者だな郷原。会員専用閤のコミュニティサイト、“裏デス掲示板”には今、お前を支持する書き込みが、何百通と寄せられている。昔のオグリキャップみたいだ。応援馬券ならぬ、応援占い券が、飛ぶように売れている……」

部下が操作するパソコンの手元を覗きながら、紳士風の顔だちの寺本が、嬉しそうに呟いた。

「そりゃあどうも……」

ぶっきらぼうに返事をして、シェリーを煽る郷原だった。

ちなみに、2番人気は、“勝者・状況ともに外れ”であった。やはり、橋爪勝利は揺るがないし、その他の状況だって、セコンドの山本が倒れるなんかあり得ないよ、という見方。

以下、“勝者・状況ともにパーフェクトに完全的中”が3番人気、“勝者は外れるが状況だけの中する”が4番人気、そんな勝ち馬投票券ならぬ、“勝ち占い投票券”の売れ行きであった。

モニターの中には、すでにセコンドの山本と、池田が映り、原口と橋爪はもう、それぞれのコーナーに寄って、膝をほぐしたり、肩をほぐしたりしている。

こんなアングラな地下の、薄汚い賭場である。選手入場の華々しい花道など、あろうはずもない。まるで田舎町の高校のボクシング部みたいに、少し無様な感じで、淡々と原口、橋爪は、試合が始まるのを待っていた。

「しかし、郷原さんは立派だ。私は、占い師などという連中は、どいつもこいつも無責任だと思っていました。でも、郷原さんは違う……。こうして、自分の占いに責任を持つのがだから、あなたは立派だ。おためごかしの占い師どもは、みんな郷原さんの姿勢を見習うべきです。これでこそ、ウソのない態度というもの。世間の奴らは生ぬるい。郷原さんみたいになれないのなら、取り締まるべきだ、占い師など……。国家公安委員会はなにをやっているんでしょうかねえ、まったく。こんな社会悪を取り締まらないのですから……」

志垣はすでに酔って、上機嫌だった。占い賭博の予想自体が終わっているから、あとは楽しく結果待ちをするだけだ。すでに勝った気になっているのか、黒服におかわりを注がせた。

郷原は、ただ静かに絶望していた。コートの内ポケットに、いつでも手をかけられるよう、意識しておく。

(やっぱり、山本が自害するなんてあり得ない。ましてや原口が、なんの恨みもないはずの山本を刺すだなんて、あり得ない――。あのビジョンは、ウソのビジョンだ……。北山に心が傾いた俺が、戸惑いで瞬間、垣間見ただけの、偽りの未来――)

拳銃のある位置を、しっかりと把握する。占いが外れた瞬間、この連中の目を盗んで俺は、心から笑って、弾丸を一発頭にブチ込むのだ――。

やがて、会場のざわめきが収まった。すべての作業を終えたスタッフが全員、後ろ手に手を組み、モニター席の後ろに控える。全員が、大型の液晶画面を見つめていた。

画面の中に、マイクを手にした城乃内貴章が現れる。一緒にいるのは、バーテン風の、黒服男。城乃内は、少し黒服と言葉を交わしてから、マイクを黒服に渡し、自分はリングから離れたバーカウンターのほうへと移動した。そこでゆったりと城乃内は、試合の成り行きを見物するつもりなのだろう。

この会場にいる者たちは、郷原悟の占いの内容を知らない。郷原が、勝つのは池田と原口だが、妙な勝ち方をして、山本がなぜか死ぬような目に会うという占い予想を出したことを、全員が知らない。

当然、城乃内も――。赤坂の占い賭博会場と、六本木のデスマッチボクシング会場は、完全に隔たれていた。

やがて、ルールの説明が、黒服より行われる。試合は、1ラウンド2分、インターバル1分の、ラウンド無制限デスマッチ。

1ラウンドのゴングが鳴った瞬間、山本は、そのラウンド中、橋爪が殴打する回数を決める。ボタンを押さない、という選択ももちろんありだが、上限は1ラウンドにつき20回まで。

一方の原口は、ラウンド開始前に獲物を選択。途中で獲物を持ち替えることは出来ない。ヒットアンドアウェーである。つまり、一度橋爪に命中したら、連続技を繰り出してはいけないこと

になっていた。池田は原口の刃物なり、木刀なりがヒットしたら、青い札を出すか、それとも出さないかを定めることができる。

青札が上がらないときはストップ。これ以上攻撃するなの意。青札は、そのまま攻撃しつづけるの意。一度上げた青札はラウンドが終了するまで変更できない。だから、一度出してしまったら、そのラウンド中原口は、橋爪に対して背中を向けることができなくなる。もし向けてしまえば、ペナルティとして、次のラウンドは獲物を使えないというルールだった。

ぼんやりモニターを眺めていた郷原の眼に、黒服がルールを読み上げたあと、山本が手を上げる様子が映った。思わず視線が止まる。

「おい、聞こえないぞ音声！ 山本の声拾えっ！」

「は、はいっ……！」

郷原の怒鳴り声に、すぐにアンプに繋いだコントロール・パネルを、微調整するスタッフであった。ツマミを回し、ケーブルを確認して、なんとかソファの郷原たちに、リング周辺の音声が出て来た。かなりノイズ交じりで、聞き取りにくかったが、山本はルールの確認を取っていたようである。デスティニーのスタッフからマイクを受け取ると、口元に近づけて発言していた。

「……………と、ということですか？」

山本の声だ。

「ああ。そうだ。セコンドが試合を降りるとか、辞めるといったことは認められない」

「そうですか……。じゃあ、試合はどうしたって、やるしかないんですね……」

「当たり前だろ？この期に及んで、降りるなんてこと許されるわけないだろう」

さも当然といった感じで、黒服が言う。

「そうだ！ ここまで来て中止だなんて、寝言言うなボケ医者！」

野次る観客の声を背中で受け止めて、山本は猶も食い下がった。

「じゃ、じゃあ、たとえば試合中、酔ったお客さんに襲われたりとか、心臓発作が起って倒れたりして、セコンドの僕や池田さんが戦えなくなったら……？ そのときはルール上、どうなるんです？」

「そんなこと起こるわけないだろう。なにくだらないことを聞いている」

黒服が、バカにしたように切り返したが、それでも、そこから逃げない山本だった。

「いいや……！ 未来のことなんか、誰にもわかるもんかっ！ ここにいる誰が、10分後に急な心臓発作を起こさないと言い切れる？！ 大地震が起らないと言い切れる？！ どうなんだよっ！ ええ？！ セコンドにもしものことがあったら、試合は続行なのか、それとも中断なのか、きちんと明確にしろっ！」

会場が、ざわめいた。黒服は判断に困って、支配人城乃内のほうを見た。すかさず、会場内のスタッフが、バーカウンターに腰掛けてリングを見ていた城乃内の元へと走り、マイクを向ける。城乃内は、おいおい……！と少し注目されたことに照れたように肩をすくめると、マイクに口を寄せて発言した。

「そうだな。まあ、セコンドにもしものことがあったら、そのときは相手チームの勝ちってことでいいんじゃないか？」

「そうですか。わかりました。セコンドが続行不能になれば、試合は終わって勝敗もつく。そ

ういうこと……。フフ……。了解です」

ようやくこれで気が済んだのか、山本は静かにマイクをスタッフへと返すと、橋爪のいるコーナーポストの下に、腰を落ち着けた。

山本をなだめるように、橋爪がなにやら囁きかける。やはり、マイクの音声は拾うが、普通の会話というのは聞こえない。

たぶん橋爪が逆に、山本に指示を与えているのだろう。落ち着けとか、恐れるなとか、そういうこと——。橋爪のほうが、山本をリードしているのがわかる。やはり、チャンプの矜持なのだろうか。

橋爪は、モニター越しに見る限り、落ち着き払っていた。

やがて、野次や口笛、拍手が響いて、ついに第一ラウンドが始まった。志垣も寺本も、モニターを食い入るように見つめている。

郷原は、モニターの前にいるのが辛くて、立ち上がると、ひとり窓辺へと向かった。

ふと、傍らに人影——。夜景を見つめていた郷原の隣に、川嶋が立っていた。

「すまないな、郷原……」

「……………」

「お前に、こんな苦しい稼業をさせるなんて、本当にすまない……。俺は……」

川嶋の沈痛な声に、郷原は寂しそうに微笑んで、首を少し左右に振ってみせる。

「なあ、川嶋さん……」

「ん……？」

「タバコ、もう1本ちょうだい」

「なんだ……。今夜はやけに吸うんだな……。いつもタバコなんか、大嫌いなくせに……」

そういつて、スーツの胸ポケットから、いつものパーラメントを取り出した川嶋は、1本郷原にやって、カルティエのライターで、穂先に火をつけてやった。その煙を、ゆっくりと肺の中へ吸い込んで、夜景を見つめたまま郷原は言った。

「……………カネ、だいぶ貯まった……？」

「ああ。お前との約束が果たせるのも、もう少しだ……。カネ貯めて、平安ファイナンスの株をすべて買い戻したら、お前と二人、ヤクザなんかから足を洗って、まっとうな銀行家を目指そうって、そう、約束したもんな郷原……。もう少しだ。そうしたらお前はもう、こんな稼業なんかしなくて済む。誰からもバカにされない人生を、日の当たる人生を、やっと胸を張って生きられる……」

「うん……。そうだね……」

息子みたいな顔をして、郷原は、夜景の中にぼんやりと映るガラス越しの川嶋を見つめていた。少し間を置いてから、郷原が呟く。

「川嶋さん……。久子ママのこと、幸せにしてやってよ」

「ああ……？」

「俺、あの人泣いてるの見るの、辛いんだ。久子ママにはいつも元気で、俺のこと、叱ってて欲しいんだよ。あの人俺の、もう一人の姉さんだから……」

川嶋は、本当は気づいている。郷原が、久子のことを、ずっと前から女として愛しているのだということを……。

「ねえ……。この占い賭博が済んだら川嶋さん、久子ママとちゃんと、子ども作りなよ」

「な、なに言ってんだ、こんなときに……」

「俺、わかるんだ。久子ママは本当に、子どもを産んで育ててみたいんだって。かわいそうだよ。川嶋さんだけを支えて、川嶋さんだけを見て生きてきたのに、子どもも授けてもらえないなんて……」

「そ、そりゃあお前、俺だって、考えてないわけじゃねえけどよ……。でももう久子も、年齢が年齢だからなあ……」

そう言って、しきりに照れる川嶋を、やっと郷原は振り返った。

「女ってね、男が、抱いてやらないとダメなんだってさ。そういう、生き物なんだって。ちゃんとママのこと、抱いてやってよ川嶋さん……。あの人は、それだけでいいんだからさ。川嶋さんのことが、本当に大好きなんだよ」

「……………」

なんだか、別れの言葉のようだった。遺言……。そんな風な寂しさ――。川嶋は、唇を震わせていた。

「まさかお前、今夜は敗れるとでも……？」

その問いかけに、郷原は眼を伏せて、寂しそうにうつむいた。

「わからない……。でも、山本を助けてやりたい……。山本を無事に、家族のところへ帰してやりたい……。俺は、どうしたら……？」

「……………」

黙り込む川嶋だった。本当は川嶋も、山本が平安ファイナンスに作った借金など、許してやっても良かった。山本は、もうじゅうぶんカネを落としてくれたのだ。占い賭博に参加してくれるだけで、平安ファイナンスと寺本組は、何億と儲かるのだから――。

そう思えば、川嶋もまた、山本を無事に帰してやりたい気持ちは同じである。

しかし……。組がそれを、どう思うか……。特にカネが大好きな、あの寺本の親父……。もう山本に、診断書をたくさん書かせるつもりで、あれこれ用意を始めているはず――。

「だが郷原……。お前は、自分の占いに干渉することは出来ないぞ……。？　ここで山本の無事を祈るしか……。しかし、山本が無傷で勝利すれば、お前の人生は志垣のものになってしまう……。俺は、そんなこと信じない。今度もきっとお前の予知は当たる。俺は確信している。山本はきっと、お前が言うとおりの……」

川嶋が、そう言った瞬間だ。おおおっ！！　というどよめきが、モニターを見つめている寺本、志垣、スタッフたちから上がった。

その声に驚いて、慌てて川嶋と郷原は、大型モニターの前に駆けつけた。画面の中――。固定カメラ数台で撮影しているだけでは、どうにも具合がよくない。状況が掴みにくかった。

「どうしたんだっ！」

川嶋が、側に立っていたスタッフの、浜崎慎吾を問い詰めた。

「そ、それが……。原口の獲物が、すり替わってたんすよ！！」

「な……、なんだと……?!」

川嶋の顔が、見る間に青ざめる。郷原も、目を剥いていた。

「今、3ラウンドがどうにか終わって、4ラウンド目に入ったんですけど、原口がやっと獲物を竹刀から、短刀に持ち替えたんです。それで、おおっ!と思って、食い入るように見ていたら、なんか、それがただの筒だったみたいで……」

モニターに首を向けると、確かに、青ざめて、焦りきった顔で、必死に怒鳴っている池田と、妙な黒い筒でひたすら空を裂き、逃げ惑う原口の姿が見える。

(あ——……!!!)

その瞬間、郷原のたましいは、神のいかづちに打たれたように、すべてを読み通したのだった。

「わかった! 読めた! 山本はやっぱり、自害するつもりなんだっ!!!」

「な……、なんだとっ?!」

全員が、郷原のほうを一斉に振り返る。

「山本が、自分ですり変えたんだっ! ドスをっ……! 自分でケリをつけるために……!!
あの死相は、そういう意味だったっ!!!」

郷原はたまたま、まだ濡れているトレンチコートを翻して、駆け出していた。ロイヤルスイートルームのドアを開けようと、施錠に手をかけたとき、スタッフが数人、止めに入った。

「ダメです! 先生は会場にいけません! そういう決まりです!」

「うるさいっ! 離せよっ! 早く止めないと山本がっ!!!」

川嶋がたまたま、郷原に味方した。

「わ、私からも頼みます! 山本を、救ってやってください、今回ばかりはっ!」

床の上に手をついて、寺本巖と志垣智成の足元に、額をこすりつける川嶋だった。

「志垣さん……、おやっさん……。お願いだ! 郷原を行かせてやってください……。落とし前が必要なら、この私が……! どうか郷原の気の済むように……!」

「し、しかし……」

うろたえる寺本である。意外にも、志垣が乗り気な声を出した。

「いいじゃないですか、寺本さん。私も、この目で直接、試合を見届けたくになりました。我々も会場へ急ごうじゃありませんか。もうここまで来たら、郷原も運命には干渉できません……。行かせてやりましょう。自分の予言が死をもたらすその瞬間を、見届けさせるために……。クク……!!!」

志垣の眼が、血走っていた。

「う、ううっ、わかった……。行けっ!!! 今回は特別に許そう」

郷原は、矢も立てもたまたま、ドアを開け放つと、駆け出していた。その後を追う浜崎と、川嶋だった。

「フッフ……。では、我々も参りましょうか寺本さん……。年寄りには、タクシーでね」

志垣が、寺本に狡猾な笑みを見せた。

「あ、ああ……。そうですね、志垣さん……」

寺本巖は頷いて、自分たちもホテルのスイートルームを後にした。

3、

郷原は、夜のネオンの中を、ひたすら走った。赤坂から、六本木を目指して――。六本木通りへと続く道は、今夜は渋滞している。タクシーを利用して、足止めを食っているうちに、取り返しのつかないことになったら――！！

そう思うと、居ても立ってもいられなくて、ひたすら走っていった。自分の占いを、外すために――。自分の敗北と引き換えに、山本を止めるために――。死ぬために郷原はひた走る。夜の中を……。

郷原の後をついてきた浜崎と川嶋は、思いがけない郷原の足の速さに、驚いていた。息を切らせる浜崎。川嶋は早々に見切りをつけて、タクシーに手を上げた。浜崎も、それに一緒に乗っていくことにした。

ひた走る郷原。縫合したばかりの肩の傷が、徐々に再び広がって、血が滲み始めている。
(だめだっ！！ 早まってはだめだっ！！ 山本っ……！！)

郷原は夢中で、祈った。

その頃、デスティニーは、第四ラウンドの後半。相変わらず、逃げつづける原口である。「くそっ！！ 何が、八百長をしようだっ！！ 笑わせるなっ！！ こんなものとすり替えやがってクソ医者っ……！」

リング上を逃げ惑いながら、山本に向かって唾を吐く原口である。

しかし、試合が始まってから山本は、一度も打撃を橋爪に、指示しないままだった。観客からは次第に、ブーイングの声である。

「おいっ！ ヤブ医者っ！ いい加減、橋爪に打たせろっ！！ 俺らはもう一度、現役の頃みたいな橋爪のストレートが見たいんだよっ！」

「ふざけんなっ！ 負けろっ！ 橋爪っ！！ 原口にいくら賭けたと思ってんだっ！！」

いろんな声が、リングに向かって浴びせ掛けられる。橋爪は、殴打してもいいという指示が与えられないので、原口をロープへと追い込んで下がり、また追い込んで下がるということを繰り返していた。

(……ったくっ！ いつまでこんな鬼ごっこをさせるつもりだ、山本っ……！ パンチを3発も打てばこんなガキ、簡単に沈められるものをっ……！！)

ここでゴングー。原口と、橋爪はそれぞれ、コーナーへ下がる。

コーナーへ着くなり、橋爪は声を荒げた。

「おいあんた、どういうつもりだっ！！ さっきはさっきで、八百長をしようなんて持ちかけておいて、俺になんの指示も出さないじゃないか！ 俺の体力だって、限界がある……。いくらあんな小僧、わけないとはいえ、こうも鬼ごっこが続けば、追い詰めるばかりの俺のほうが消耗する！ 次は2、3発打たせろっ！ いいな！！」

橋爪は、山本に怒鳴っていたが、山本は淡々と、橋爪にミネラルウォーターを渡すだけだった。

。

チラリと、相手サイドを見る橋爪――。池田が、原口の獲物を、持ち替えさせている。とうと

う最後の武器、50cmの長ドスを手にすることにした、原口・池田陣営であった。本気なのだ――。

橋爪は、マズいなという気分になってきた。原口は、案外足が良いのだ。むしろ、追い詰めらることで、体力を消耗しないで済んでいる。逆に橋爪は、追い込んで下がるの繰り返しだから、2倍以上消耗するのだ。このまま、こんな風に疲れさせられてしまえば、きっとスキが生まれて、7年前の東洋太平洋チャンピオンといえども、ひょっとするとど素人に、刺し殺されてしまうかも知れない。

(もしかして――)

橋爪は、思った。

(もしかして、この男……。さっき、原口と池田のところに出かけて行って、まさか3人で、この俺をハメようという作戦を練ったんじゃないか……)

疑惑に揺れる、橋爪の心。それを見透かすように、山本が、あと10秒で第五ラウンドの開始というタイミングで、橋爪に満面の笑顔を見せた。

「だいじょうぶ、橋爪さん……。僕がきっとみんなを、怪我ひとつさせずに、家族の元へと帰す。お金はもしかしたら、もらえないかも知れないけど、無事に帰れて働けるなら、またきっと貯められるよ……。やっぱり、カネのために命を犠牲にするなんて、間違ってる。僕は……」

その山本のつぶやきを、橋爪はケツと吐き捨てた。

「これだから、お坊ちゃんの相手はイヤだったんだ……。いいから、お前は次こそパンチボタンを押せ。1回でもいい。とにかく俺に打たせろ。今度打撃ボタンを押さなかったら、俺はお前の命令など無視するからな！」

「……………」

山本は、橋爪の言葉を、悲しそうな目で聞くだけだった。

そして、第五ラウンドのゴングー。やはり山本は、パンチ許可ボタンを押そうとしない。お客たちは、そんな山本に罵声を浴びせ掛けた。反対に、50cmの獲物を持った原口は、リーチが長くなったぶん、今までよりも平気で突きかかってくる。橋爪は、交わすのも、だんだんしんどくなってきた。

ラウンド開始から、10秒――。30秒――。1分――。1分30秒――。

また、鬼ごっこのまま、第五ラウンドが終わるのか……。？誰もが試合が動かない苛立ちを感じていた、そのときだ。

山本の反対側に控えていた池田の眼に、キラリと輝く、銀色の閃光――。

あ――。あれは――。すり替えられた短刀、じゃないのか??なぜ山本が今、手にしている……??

池田は、目の前の山本の行動が読めなくて、ただそう思った。

山本は、フリースをたくし上げて、薄いシャツの上から指で、胸の骨の位置を探るような仕草をしている。まるで、メスを入れる部分を見極めているかのように――。次の瞬間、山本は位置を確認すると、短刀の切っ先を胸骨の隙間に当てて、刃先にのしかかるようにして、思い切り突き立てた。なんの躊躇もなく――。

池田が見たのは、なんともあっけない光景であった。そのとき、原口の必殺の突きは、吹き出した山本の血に一瞬、視界が奪われて、橋爪のわき腹を掠めただけで空を切った。

あー。誰かが、罵声の中で静かに、指を差す。その隣近所が、なんとなく、その指の先を見る。その視線が連鎖して行って、3秒後には、その場にいた全員の眼が、一点に注がれた。

そこには、スローモーションのように崩れ落ちる、山本亮一の姿――。血の花びらが、山本のフリースをたちまち赤く彩ってゆく。

夢のように鮮やかな、静かな光景だった。全員が思わず息を呑む。女性客が、大きな悲鳴を上げていた。

「山本っ――！！！」

その時だ。絶叫が、観客たちの背後から響いた。駆け寄る人影――。見物人を突き飛ばすように、踊り出た長身の男。郷原悟であった。郷原は、すぐに山本を抱き起こした。

「お前っ！！ お前、どこまでバカなんだお前はっ！！ こんなクズどもを助けるために、自分が犠牲になるなんてっ……！！」

郷原に抱きかかえられた山本は、薄っすらと微笑んでいた。とても満足げな眼の色を浮かべて――。両手が、自分の胸に、短刀を突き立てていた。その手は、溢れる鮮血で、べっとりと染まっていた。

「すぐに医者をつ……！！ 誰か、救急車をっ！！」

郷原は叫んだ。城乃内貴章が、バーカウンターから近づいてくる。

「バカが……。自分から命を、どぶに捨てやがって……」

郷原は、涙が流れるままに、城乃内に懇願していた。

「城乃内さんっ…！ 頼むっ……！ すぐに救急車をっ……！！ 救急車を呼んでくれっ……！！」

城乃内は、山本を抱いて泣き崩れる郷原の前に、しゃがみ込んだ。

「そりゃあだめだ、郷原……。ここは違法ゲームバー……。救急車なんか呼んでみる……。大事になって、組にも本家にも迷惑をかけることになる……。こいつが勝手に自害したんだ。放っておけ」

「……！！！」

郷原は、城乃内を睨めつけると、ありったけの声で怒鳴った。

「だっ、誰か、誰か手を貸してくれっ！ 山本をすぐ病院へっ！！」

躊躇している、観客たち……。みんなが、思いがけない状況に、固まったままだった。

「郷原先生っ！」

そこへ、浜崎慎吾と、川嶋貢が到着した。すぐに山本の元へと駆け寄る二人。山本はすでに、うめくように苦しがり、口からごぼごぼと血を吐いている。

「マズい……。すぐに病院へ運ぼう！ 試合は中止だっ！ いいな城乃内！」

川嶋が、城乃内を怒鳴る。

「川嶋の若旦那がそういうなら……。おい、今日の試合は、原口たちの不戦勝だ」

「え～！！」

ブーイングが、ホール全体を包んだ。

「うるさい！ セCONDがこれじゃあ、試合は終わりだっ！ おい、手を貸してやれ」

「はいっ！」

すぐに店内にいた黒服が、物置から担架を持ってきて、山本を乗せた。

「しっかりしろっ！山本っ！！」

郷原が先頭に立って、山本の担架を担ぐ。浜崎と川嶋も、持ち上げるのを手伝った。そのとき、郷原の腕の傷は、再びぱっくりと開いてしまって、トレンチコートをじっとりと血でぬらしたが、郷原はそんなことも気づかないまま、渾身の力を筋肉に伝えて、山本を持ち上げた。そして、外へ出るための扉へ……。

扉を開けた瞬間、時間差でデスティニーへと駆けつけた、志垣智成と眼が合った。

「な………！ なんとっ………！！」

扉の向こうから現れた、血まみれの山本――。そして、獣のようなおぞましい憎悪で、自分を睨めつける郷原――。

「なんとっ！！ なんとっ………！！」

志垣は、あまりの的の中に、思わず足元がよろけた。そして唇を、肩を、指先を、足元をすべてガタガタと震わせて、心底怯えたように、志垣智成は郷原悟をののしった。

「あ、悪魔だっ………。お前は、悪魔だ郷原っ………！」

「……………」

「お、お前は、ひ、人でないっ！！ お前は何者だっ！郷原………！！ よ、妖怪っ！ ば、ばけもの………。ばけものだっ………。お前は、人の姿をした化け物だ郷原――！！」

「うるさい、どけっ！！」

郷原は、志垣を突き飛ばして、山本の担架を担ぎ、階段を駆け上がっていった。

「わ、わははっ！！ あ、悪魔………。あの男は悪魔！！ グ、グフフフ！！ 人の姿をしたおぞましい、化け物っ！！ 化け物っ！！」

「だ、大丈夫ですか、御大っ！」

涎を垂れ流して、郷原の消え行く後ろ姿を指差す志垣を、御付きの部下が支える。

「あ、悪魔………。だがしかし、欲しい………。たまらなく欲しい、あの男の予言の力………。この志垣の力を、磐石なものにするために………。この国に、私の仏国土を実現させるために………。フフフ………。欲しいっ！ 郷原がっ………！ 郷原の、予言の力がっ！！」

「し、志垣さん………」

寺本は、狂える志垣を、御付きの男とともに、見つめるしかできなかった。

4、

手術室の赤いランプ――。山本亮一の命――。

助かるかどうか、わからない……。手術に取り掛かる外科医が、手術室に消える前、冷たくそう言った。

山本の血圧は、失血のショックと無呼吸で著しく下がり、生命活動はぎりぎりのところまで弱まっていた。意識もない。限りなく死に近づいた、生――。

山本が、自分の胸に突き刺した短刀は、正確には心臓を貫いておらず、肺にめり込んでおり、そこに大量の血液が溜まって呼吸が出来なくて、なんとも苦しい自殺方法だということだった。まるで溺死するのと同じような状態だという。

医者のかせに、自分の心臓の位置が、わからなかったのだろうか？

いいや……。これが運なのだ……。これこそが、運なのだ……。事件が起ってみるまでは、それがどうなるのか、誰にもわからない……。心臓を一突きしたつもりが、少し逸れて、肺に命中してしまったこと、おかげで即死には至らなかったことこそが、神の与えたもうた山本の、運一一。そこまでは、どんな占いも、ぜったいに読めはしない。運に人間が干渉することなど、あり得ない……。

生きろ……。生きてくれ山本……。

郷原は、山本が手術室へと担ぎ込まれるのを見届けると、そのままよろよろと、病院の待合ロビーのほうへ、無意識のまま歩いていた。肩から染み出してくる、山本が手術した銃創から溢れ出した血液が、中指を伝って、ポタポタと、廊下に水玉模様を作っていた。

そして、味気ない長椅子の上に、座り込んだ。こんな出会い方でなければ、きっと山本を、いい奴だと思えたのに一一。

俺は……。俺は、化け物……。関わる者すべてを飲み込み、死の淵に追いやる化け物……。俺は……。

夜も更けた病院のロビーで一人、闇を見つめる郷原の耳に、冷たい靴音が近づいてくる。

コトリ、コトリ、コトリ、コトリ……。4つの、靴音……。

靴音たちは、郷原の手前3メートルくらいのところで止まった。そこから、老人がひとり、更に踏み出した。

「フフフ……。この手術が無事に終了しなければ、さっそく腕の切断式ですよ、郷原さん。ククク……。いいですね？」

「……………」

うつむいて、何も聞こえない風に、下を向いたままの郷原は泣いていた。

「フフ……。神をも恐れぬ化け物の分際で、涙を流すとは……。滑稽です。クク……」

志垣の言葉も虚ろなほど、郷原の心は壊れていた。

「郷原……」

川嶋が、郷原の隣に座って、その肩を叩く。それでも郷原は、闇を見つめたままだった。

男たちは薄暗いロビーでじっと、山本の命の答えが出るのを、静かに待った。賭博のため一一。ゲームのためだけに一一。

やがて、白衣に着替えた医者が、郷原たちの元へとやってきた。どうやら、山本の処置を終えたらしい。身を乗り出すように、川嶋は容態を尋ねた。。

「せ、先生っ……。や、山本はっ……！」

「まあ、命だけはどうか……」

「な、なんとっ！！」

志垣が、すっとんきょうな声を上げる。

「命はどうか、取り留めましたがしかし、回復するかどうか……。脳波や脈拍が、かなり弱ま

っています。今夜を乗り切れるかどうかでしょう。ところで、あの人の家族は……？」

「……今夜は、来れないと……。今、遠いところにいるもので」

川嶋が、うつむいて答えた。

「そうですか。今夜はこのまま集中治療室です。意識が戻るかどうかは、なんとも……。万が一のことも考えて、お身内の方に連絡してあげてください。では……」

医者はそれだけ言うと、ロビーの奥の暗闇へと消えていった。川嶋が、志垣を見やる。

「志垣会長……。今回の賭けは、どう考えても会長の負けです。郷原の占いは、完膚なきまでに的中したんだ。どうか郷原に、約束通り賭け金を払ってやってください」

「ふむ……。いいでしょう。今回は、完全に私の負けだ。しかし、寺本さん、川嶋さん」

「え……？」

小切手にサインをしながら、志垣智成が、寺本巖と川嶋貢に、視線を向ける。

「あなた方は、いつまでこんな賭博に、この男を使うつもりで？」

「そ、それは……」

「この男は、こんなことに飼い殺す男ではない」

「……………」

川嶋が、口ごもる。寺本も、腕を組んで黙り込んだ。

志垣はうつむいたままの郷原の背中に、声を浴びせていった。

「郷原さん、あなたは、こんな世界にいるべき人間ではない……。あなたは、あなたの力を生かせる世界に行くべきだ」

ずっと虚ろだった郷原が、志垣の言葉に顔を上げる。

「俺の力を、生かせる世界……？」

「そう……。あなたは、絶望している……。未来など読めたところで、誰も助けられない自分に……。人を陥れ、死の淵に追い込むしかできない自分に……」

「う、うう……」

郷原は、うめいた。

志垣は妖怪だった。どこまでが演技で、どこまでが本気なのか、わからない男だと川嶋は思った。さきほどまで酔って上機嫌そうだったのに、今はまるで、判決を下す裁判官のようだ。

「本当はあなた、助けたいのです……。か弱き人を……。貧困者を……。女や子どもや、喘ぎ苦しむ労働者たちを……。そうじゃないんですか？ 郷原さん……。あなたは本当は、貧者のためにこそ、命を賭けたい人なのではないのですか？」

「うっ……」

耳を塞ぐ。唇を噛む。郷原の体中が震えて、はらはらと涙の雫が、床にこぼれていった。

「そうやって、政治家や金持ちの保身だけを占わされるのか……？ どいつもこいつも、俺を利用するだけ利用して、占いが済めば人間とも思わなくせに！！ 俺の悲しみや苦しみなど、誰も想像しないくせに！ 占い師のことなんて、誰も人間だと考えていないっ！ それでも、そんな世界で生きろと？！ この先も、ずっと一生利用されて、利用するくせにバカにされて、踏みこたされて生きろと？！」

わめく郷原。静まり返った病院の、暗く、冷たいロビーに、その声が響く。まるで、舞台の上の独白のように――。

志垣は、舞台上手で黄金の錫を持ち、君臨する全能の神役のように、郷原に残酷な宣告をした。

「何を寝ぼけたことを……。占い師など、人間でなくて当然です。占いは、一方的に人間を規定する。星座や、カードや、相などというバカげたもので……。その時点で人間を、人間として扱っていない占い師……。占い理論の前では、人間は単なる記号に成り下がる……。人間を人間として扱わぬことを生業とするものが、他人から人間として扱われないからといって、なにを憤ることがあるでしょう。当然の因果応報じゃないですか。フッフ……」

「っつ……………！！」

子どものように震えている郷原の肩を抱いて、川嶋が懇願するように志垣を見上げた。

「し、志垣さん、今は……。今はもう、これ以上郷原を、揺さぶらないでやってください……。自分自身の占いで、誰より傷ついているのは郷原だ……。でも、こいつはこんな風にしか、生きられないのです、今は……」

「姉、ですか」

志垣が、核心を突いた。

「な、なぜ、それを……？」

郷原の背中を抱きながら、川嶋が、思わず眼を見開く。

「郷原深雪……。もう何年もホスピスに入ったままの、郷原さんの姉……。病院の白い壁しか知らない、かわいそうな姉……。10代の頃から入退院を繰り返していた姉の治療費のために、中卒の弟は、ウソで固めた占い師になって、博打を繰り返し、心身をぼろぼろにしてゆく……。悲しい悲しい、親に見捨てられた姉弟……。手っ取り早くカネを稼ぐには、占い師ぐらいしか手段がなかった弟……。ククク……。美しい話です、実に……。フッフ……、ハハハハ！」

志垣は、ロビー中に響き渡るような声で笑い声を立てた。

「まあ、いいでしょう。しかし、断言しますが郷原さん……。あなたの力はいずれ、欲深い政財界の人間に注目されるようになる……。わかりませんか……。？あなたは、その気になれば、この国の王にすらなれるのだということを……」

闇に怯える子どものように、震える目をして、志垣を見つめる郷原。王という言葉……。いつも、占い師だ、詐欺師だと嘲笑され、バカにされてきた自分が、王……。？王、だって……。？

「そうです。あなたは、天上の悪徳を操る王、闇の太陽にさえなれる男……。いつか、支配してやりなさい、その占いの力で……。あなたがた姉弟を踏みにじった、世間の者どもを……。憎くて仕方がない、カネ持ちたちを……。政治家を、財界人を、この国のすべてを……。フッフ……。ハーッハッハッハ……。！！」

「う、ううっ……。！！」

郷原は喘ぎ、たまらず、川嶋に縋りついた。父親に助けを乞う、少年のように――。

志垣智成は、それだけ言うと、約束通り都合4億の小切手を切って、そのまま病院から去っていった。いつか、あなたは闇の王となる日が来る――。そんな呪いの予言を、郷原に残して……。

5、

年の移り変わりを華やかに盛り上げようと、デコレーションされた、賑やかな夕闇の街。この大東京は、孤独な地方出身者で溢れ返っている。だから、盆と暮れにはみんながふるさとへと帰っていった、妙に街は静かなのだが、それでも大晦日の夜ともなると、ここ、明治神宮の周辺には、無数の人々が繰り出してくる。

北山あかりは、そんな街をふらふらと、さっきまでほっつき歩いていて、疲れたので、通りにある1杯150円のコーヒーショップへと入ったのだった。そこで、最低の値段の、150円のSサイズホットコーヒーを注文。それから、タバコの煙が充満する禁煙席に座ると、拾い集めてきたさまざまな求人雑誌を広げ、履歴書をひたすら書き始めた。

大晦日の今日。もうとっくに、一般企業は冬休みに入っていて、あかりのバイト探し、職探しは今日もはかどらなかった。

郷原から借りた100万円は、すでに98万2千4百円になってしまっていた。郷原と別れてからずっと、あかりは、マンガ喫茶に寝泊りしながら、アパート探し、職探しをしているのだが、年末で時期が悪いせいか、なかなか思うように行かない。あんまりこんな調子でいると、残金が目減りするばかりだから、じっとしてもいられなくて、開いてないのはわかっているのに、今日も朝から歩いて不動産屋を探し、バイトを探した。朝から食べたのはメロンパン1個だけだった。

それでもまだ見つからなくて、こうしてコーヒーショップで、求人雑誌と首っ引きなのである。

まだ20代半ばの若いあかりにとって、一番簡単なのは体を売ることだが、それをしたらもう二度と、郷原とは会えなくなるような気がしていた。

簡単にお金を稼ぐのは、きっと間違っているのだ――。あかりは、水商売の世界に飛び込んで、なんとなくそれがわかってきた。

簡単にお金を稼ぐということは、そのぶん、素直な幸せや、人の温かさが見えなくなってしまうということ――。お金と引き換えに、大切な大切な何かを、きっと失って

1、

今年最後の大晦日の夜。新宿西口、小田急百貨店の並び。

ここでいつも高台子を立てる、易者歴15年の霊泉先生は、あれ以来なんとなく落ち着かない。この間、トレンチコートを着て眼鏡をかけた、目つきの悪い大男にさんざ絡まれて、35万円ももらった霊泉先生だった。

あの男がまたやってきて、カネを返せと言ってきたら、どうしよう……。あれ以来霊泉先生は、それが気になって仕方がない。

しかしあの35万円はもう、家族に秘密で手を出した商品先物の尻拭いに使ってしまった。だから返せといわれると、困るのだ。

仕方がないから霊泉先生は、もしまたあの男が現れたら、逃げるか、35万円分占ってやるかしようと考えていて、憂鬱だった。

今日は誰もが来年の運勢を気にしそうな大晦日だというのに、なかなかお客がつかないので、霊泉先生はヒマにかまけて、仕方がなく、自分で卦を立ててみた。算木を、念を込めて振ると、陽・陽・陰・陽・陽・陰と出た。

(今日の運勢は、巽為風か……。いい事、悪いことの両方が訪れる意味の卦だわ。不意な訪問者を暗示する卦でもある……)

そう思って、霊泉先生が顔を上げると、往来の向こうから、どこかで見たような景色が近づいてきた。

べろべろに酔って、足が千鳥足になっていて、そして、背が高いトレンチ眼鏡男――。一瞬デジャブかと思って、目をしばたいたが、見間違いではなかった。ま、まさか――。

「う、うわぁ！！」

思わず腰を浮かして、逃げようとする霊泉先生よりも、男のほうが早かった。まるでサバナンで、群れからはぐれたインパラの子どもを見つけたチーターのように、眼が合うやいなや、徐々にスピードを上げて、近づいてくる男。

「なんらぁオバラん……。まらやってらんかここれ……」

男は、崩れるようにそのまま、霊泉先生の高台子に突っ伏した。

「あ、あなた、この間はびっくりしたわよお～！35万円も置いていくんだもん……」

「んあー……。そうらっけ……。おれ、おろえてれえ」

「お、覚えてないの?! あんた、35万も置いてったのに??」

「うん……。れんれん」

男は、アルコールの巡りに苦しそうに、腹の底から呼吸していた。そして、酔って思考能力が無くなっているのか、60年配の霊泉先生に、妙なことを言うのだ。

「へんへえ……。カネ払うから、俺と今からホテルいこ……」

「な、なんだとう??!!」

この間もそうだったが、相変わらず言うことが突拍子もない男だ。

霊泉先生は、顔を真っ赤にして、うろたえた。こんな親子ほども違う30代男に、ナンパされるだなんて……。

「俺、寂しいんらよ……。られれもいいから、一緒に寝て欲しいんらよ、☀️☂️ ◎ ☹️ ✖️
☹️ ……」

男は最後、とうとうろれつが回らなくなって、意味不明の言動をすると、崩れるように再び高台子の上に突っ伏した。

それを見る霊泉先生。そういえばこの男は、家を飛び出していった自分の長男と、同じくらいの年齢だ。年の瀬にこんなになるまで泥酔して、この男の妻や家族は心配していないのだろうか。

「……………」

霊泉先生は、なんだか事情があるのに違いないと思えてきて、お袋みたいに微笑むと、男の肩に自分のストールをかけてやった。こんなところで眠ったら、寒いだろうと思ったのだ。

男はそのまま、しばし眠り続ける。こうして見ると睫毛が長くて、彫りの深い顔立ちは、酒のせいで色白の頬に朱が浮いて、寒風の中疲れ知らずに遊ぶやんちゃ坊主のようだ。

しかし、これではお客を占えない。欲を搔いて、大晦日まで街占しようとしたのが、そもそも間違いだったかも知れない。

霊泉先生はふう、とため息をひとつ吐いてから、魔法瓶を取り出すと、男の前に自宅から淹れてきたコーヒーを置いてやった。

やがて、その匂いで目を覚ました男。ズレた眼鏡越しに、湯気の向こうにゆらめく霊泉先生を見た。そして、突っ伏したまま、泣きそうにか細い声を出した。

「なあ、せんせえ……………」

「んー……………？」

「占って、楽しいの……？ 占って、信じているの……？」

「あんた、家族いないの？」

「え……………」

男は、その言葉にむっくりと体を起こして、先生を見た。霊泉先生は、相変わらずお袋のような目で、微笑んでいる。

「なんで……？ なんでそう思うの……？」

「いや、あたしらときどき、ストレスのはけ口にされることがあるのよね。殴られそうになったり、怒鳴られたりね。占い師くらいしか、ストレスの持って行き場がない人なんだなって、おばさんはあんたのこと、そう思ったわけ。だから、もしかしたら天涯孤独な人なのかなってさ、お兄さんは」

「……………」

霊泉先生は飲みなと言って、冷め始めたコーヒーを勧めた。

「お代り、あるからね」

男は、なんとなく親切にしてくれる霊泉先生に、とんがった心が少しほぐれてきた。じいっと、置かれた水筒のカップを見つめた。

街は次第に、初詣客やカウントダウンで飲み明かす若者で、賑わいを見せ始めていた。男の背

後で、盛り上がった若者たちが、未来に向けて一本締めの手を叩く。

「あらあんた、ずいぶんいい手をしてるじゃないの」

「え……？」

ぼんやりと虚ろな男の手を取って、ライトにかざし、手相を覗始める霊泉先生。なにせこの間、この男にもらったカネは、支払いで全部消えてしまったから、少しでも鑑定してやらないと申し訳ないと思ったのだ。

「あんたがくれたあのおカネ、遠慮なく使わせてもらったわ。だからこうでもしないと、申し訳ねえべさ。今日は無料で占ってやる」

「ねえ、俺の占いなんてしなくていいから、おばさんのこと聞かせてよ……。おばさんはどうして、占い師なんかやってるのかさ。占いを、信じているのか……。そこが俺、聞きたいんだよ」

今度は霊泉先生が、ぼんやりと考え込んでしまう番になった。どうして、占いなんかやっているのか……。？そう言われてみれば、まるで考えたことがない。霊泉先生にとって占いは、あまりにも自分の日常に溶け込みすぎていた。

「うーん……。そうねえ、人様のお役に立てるじゃない？ 人助けというか。占いで元気づけてあげられるというかさ」

「ふーん……。元気づけてあげられる、か……。元気づけて……」

霊泉先生に対して、体を横に向け、往来を見つめたままボソリと呟く男。冥く、遠い目をしている。

「なあ……。占って、いったい何なのかなあ、先生……」

「んあー……？」

「先生は今、人助けって言ったけど、俺、わかんねえよそのリクツ。占いが当たれば当たるほど、人をむしろ不幸にさせていく……。世界中から占いがぜんぶ無くなっても、たぶん地球上の誰ひとり、生きるには困らない……。そんなもんで人助けなんてできねえよ。先生が人助けできるのは、今、俺をここに居させてくれた優しさだろ？ 占いなんかなくたって、先生はちゃんと助けてるんだよっ」

男は、温かい水筒のカップを手にしたまま言った。言っているうちに声が震えて、涙が目尻に滲んでいるのが見えた。

「だから、お願いだからそんな悲しいこと、言わないでくれよっ……。先生みたいないい人が、占いで助けるなんて悲しいこと言うなっ！！ 言うなよっ！！」

霊泉先生は、急に豹変した男の顔を見つめた。

そして、彼の言った言葉が飲み込めなかった。

いや、心が、たましいが、その言葉を解釈することを拒絶していたのかも知れない。なぜなら、自分は占い師だから――。

占いで深層心理がわかり、占いで人の本音もわかり、占いで未来がわかるという前提になっている者だから――。

目の前にいる人間がたとえ苦しみを訴えても、占い師はまず、それが命式なり、ホロスコープ

なり、手相なりに出ていなければ、その人の言うことを信じられないのである。現実の、人の痛みや感情よりも、占い理論のほうが大切な人種なのだ。

いや、本当はわかっている、占いをしている自分を手放さない限り、けっしてそのことを真正面から考えることはできない。

考えてしまえば、たちまち自己矛盾に陥ってしまう。占いの閉じた世界でいつまでも遊びたいければ、思考停止でいるしかない――。

たとえそれが、自分のたましいを欺くことになっても。

男は立ち上がると、肩をすくめて、そんな霊泉先生を、許すような優しい目で見下ろしていた。

「先生……、ごめん……。ちょっと俺、言い過ぎた……」

男はそういって、セカンドバッグから札束を取り出して、それをまたこの間のように、バサッと、高台子の上に放り出した。

「ちょ！　ちょっと！　要らないわよこんなもの！！」

立ち上がり、札束を掴むと、男の胸元に突っ返す霊泉先生だった。

「いいよ先生……。先生にやる。俺、そんな汚らわしいもの、持っていたくねえ……。姉ちゃんの入院代だけあればいいんだ、俺には……。カネなんか要らねえ……」

そうつぶやく男の眼に、ゆらめく狂気――。さっきまでの遠くを見ていた眼差しは、こうして胸元に近づいて改めて覗くと、ぞくりとするような氷の刃がギラついていて、とても恐ろしい眼だった。

男の瞳孔の底に、それを確かに見た霊泉先生は、急に金縛りにあったように動けなくなって、ガタガタ震えると、札束を手にしたまま固まってしまった。

男はそのまま、ふらふらと歩き、青梅街道へ――。青梅街道の大スクランブルの手前を右手に曲がり、ホームレスが横たわる大ガードを抜けて、靖国通りへ。そこをさらに右手に向かって、男は気がつくやうに、新宿アルタ前に出た。

聞こえてくるのは街宣車のスピーカーの、ヨハネ黙示録による最後の審判。あなたがたが裁かれるのは近いと、必死に訴えるキリスト教系新興宗教の声。

そしてその背景にセットされた、スタジオアルタの大型ビジョンでは、来年の運気を占う12星座ランキングが、明るくポップに意味も無く、誰のためでもなく、なんの必要性もないままに、ただ垂れ流されていた。

男は耳を塞ぐ。唇を噛み締める。肩も背中もぶるぶる震わせていた。やめろ、やめろ、やめろ、やめろ――！！！！

絶叫――。声を張り上げた。

「占いなんてウソだっ！！　占いなんて人でなしのすることだっ！！　お前らは狂ってる！！　希望と欲望で狂ってる！！　この狂人どもっ！！　うわああああ！！！！」

男の叫び声は、周辺にいた数人、十数人を振り向かせ、驚かせはしたものの、宗教団体の街宣にかき消されて、ただ、それだけの効果しかなかった。

街の中でただひとり、肩を震わせ、拳を握りしめる。

誰もが、醜い欲の塊――。死と損失を忘れた者ども――。

人はいつか、カネも愛も夢も、この身さえも、みんな失うのだ。

そう考えれば、占いなど無意味だ。

無意味だっ！！

こんな無意味な地獄の中で、この先も生きてゆくしかない俺を、誰か助けて――。助けてよ誰か――。

「北山っ！！」

男は悲痛な眼をして、顔を上げて、始めて好きになった女の子を人ごみの中に探したけれど、彼女はもう、どこにもいない……。

男は、とぼとぼ歩いた。まっすぐに、喧騒から離れて――。

男の頭上には、ネオンに霞む幽幻の月――。天文学者ケプラーは言う。人間は空を仰ぐ動物だと。心理学者ユングは言う。魂はみんな、深い共通の無意識で繋がっていると。

だから、人が天の中に意味を見出そうとしたとき、天の兆しは地上に反映されるし、人がイメージの中に意味を見出そうとすれば、それは意味のあるものとして無意識に語りかけると。

でも、いくら星のシンボルを調べても、意識すらできない無意識を心の中に探しても、どうして自分が生まれてきたのか、どうしてここにいるのかは、やっぱりまるでわからない。

狂ったように悲しく酔った男は、そのままとぼとぼ歩きつづけて、都会の公園に着いた。冷たいベンチに、体を横たえる……。

人類が月に降り立ってからこの方、科学や経済の発達で人は、神秘から自由になったのだろうか。それとも、神秘から隔離されて、余計に不幸になったのだろうか。

しかし、星座を見ても、手相を観ても、タロットカードを並べてみても、心理分析してみても、人間のことはちっともわからない。

生きることの苦しさには、まるで答えてくれない。

占って、いったい何のためにこの世にあるんだろう。

何でこんなに世の中に、溢れているんだろう……。

俺には、わからない……。誰か、教えてよ……。

遠くに、除夜の鐘の音。人々の欲深い、カネや地位や名誉や、愛欲のとぐるを、賽銭とともに飲み込んで、聖なる鐘の音が鳴り響いていた。

《完》